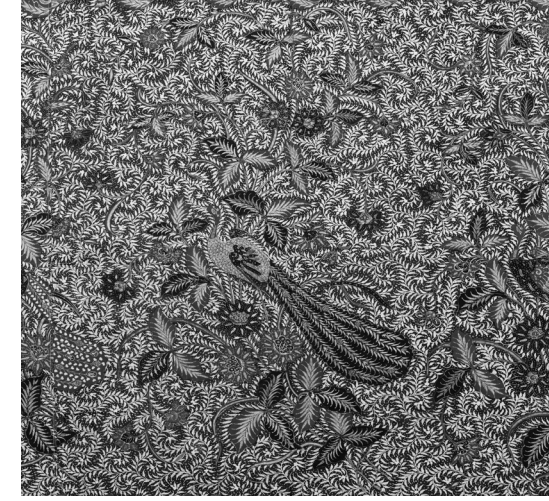




ISSN 2187-6894

BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No.14



福岡市美術館 研究紀要

第14号

福
岡
市
美
術
館
研
究
紀
要

第
十
四
号

- Research Material: KAI Mihachiro in Manchuria
Drawings and Articles Placed in the Magazine “Kyowa” 8
NAKAYAMA Kiichiro 1
- Formation, Overview, and Case Studies of Accessible Gallery Tours at the Fukuoka
Art Museum, with a Focus on the “Chat and Touch Tour for Visitors with Visual
Impairments” Implemented in 2024
TAKADA Rumi 14
- Tracing the Evolution of Educational Programs at the Fukuoka Art Museum through
Their Target Audiences: Part 1 (1979–1994)
SAKITA Sayaka 25
- Transcription of *Unchuan Chakaiki*—The Tea Gathering Records by OGI Seisai 10
URATSUKA Shoji
GOTO Hisashi 65

- 【資料紹介】
満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事⑧ 中山喜一郎 1
- 福岡市美術館における「バリアフリーギャラリーツアー」について、事業の成り立ちと
概要、活動事例報告 2024年度実施の「視覚障がい者のための おしゃべりとてざわりの
ツアー」を中心として 高田瑠美 14
- 対象者を軸にたどる福岡市美術館の「教育普及活動」の変遷:①1979-1994
崎田明香 25
- 『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑩
浦塚省二
後藤 恒 65

Edited by Fukuoka Art Museum
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan

二
〇
二
六
年

2026年

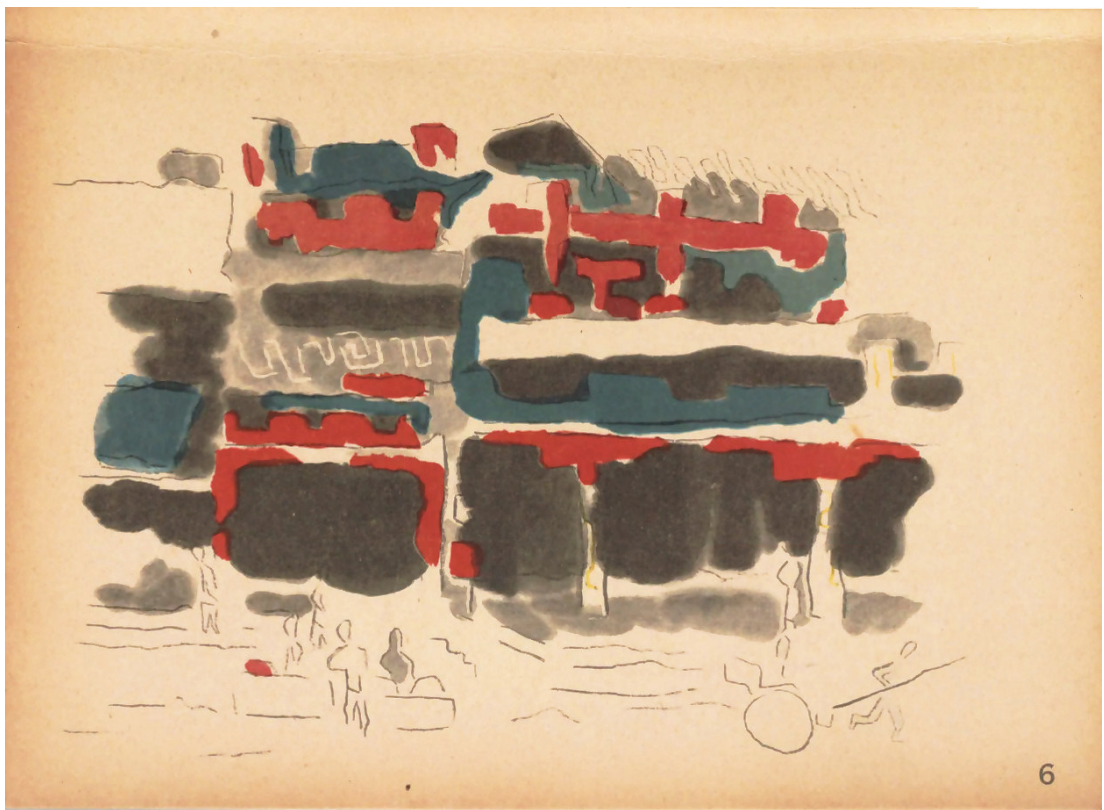


口絵 1

甲斐巳八郎 満州郷土画譜89 西崗子の質屋



口絵2
甲斐巳八郎素描集『北京』より《1 飯荘》



口絵3
甲斐巳八郎素描集『北京』より《6 商家》

【資料紹介】 満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事⑧

中山喜一朗

解題

今回は、前号に積み残した第200号（昭和12年9月1日発行）の掲載挿図から第206号（昭和12年12月1日発行）までを掲載している。ただし、与えられたページ数とレイアウトの関係で、205号掲載の記事一編を次回に回した。したがって通し番号はNo.216からNo.218に飛んでいることをご了承いただきたい。

この時期に特徴的なのは、「満州郷土画譜」のほかに、挿図や短いコラムなどではない1ページ全体を使ったタイトル付きルポルタージュを執筆していることである。これは一度きりのことではなく、この先も続くし、「満州郷土画譜」を執筆した同じ号に掲載することも多い。第204号（昭和12年11月1日発行）の「北京一瞥」が最初である。よほど北平（北京）への旅行が充実していたのであろう。この時の取材による作品は、三年後の『北京：甲斐巳八郎素描集』（満鉄社員会から叢書第44号として発行）に結実する。昭和12年の旅行で描いたと考えられる作品が数多く含まれているからである。時系列としてはやや早いかもしれないが、二図ほど紹介しておこう。左は表紙、右は《飯荘》というタイトルである。



いずれも墨に赤や青、黄などの色を加えており、水分の多い面的表現を強調する新しい画風である。これは戦後まで続く表現であり、画家としても記者としても充実した日々を送る姿が髣髴とされる。

（なかやまきいちろう 福岡市美術館 総館長）

凡例

- 1 甲斐巳八郎の挿絵や記事が掲載された『協和』の号数（発行年月日）を見出しとし、掲載順に配した。掲載ページは省略した。
- 2 自筆記事、挿絵や作品には通し番号をつけてNoで示した。最終的には、Noは『協和』に掲載された全作品点数とほぼ一致する。
- 3 活字化されたタイトルや署名などがある場合は、Noのあとに[]で記した。ない場合は、[なし]とした。
- 4 活字化されたタイトルや署名とは別に画中に文字や署名があり、判読可能な場合は「 」で記した。
- 5 ルポルタージュなどの自筆記事は、タイトル等のあとに全文を掲載し、挿絵をそのあとに配したが、紙面の効率上、先に挿絵や写真等を掲載する場合もある。文章の旧漢字、旧仮名遣いは意味が異ならないかぎり現代表記に改めた。地名、固有名詞等はそのまま記した。原文は、グラビアページの文章以外はほぼ総ルビであるが、本稿では必要に応じて一部を残し、他は省略した。明らかな誤植は（ママ）としたが、意味が通じる範囲で訂正しなかった。
- 6 作品や記事の理解の助けとなる情報、語句解説などは、適宜*印で記した。
- 7 挿絵は原寸ではなく、それぞれ縮尺は異なる。
- 8 原本の文字が縦組の場合も、本稿では横組とした。

第200号 (昭和12年9月1日発行)

No. 210 [満州郷土画譜87 碧山荘]

*ルポルタージュ本文は前回に掲載しているので、掲載挿図から紹介する。

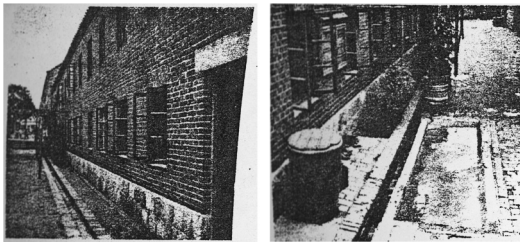
No. 210-1 「碧山荘窟舗 巳八郎寫」



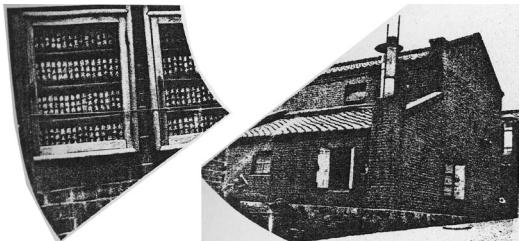
*右下の黒い部分は下記の写真の一部。写真のタイトルは左上から右下の順になっている。

No. 210-2 ~ 7 写真6点

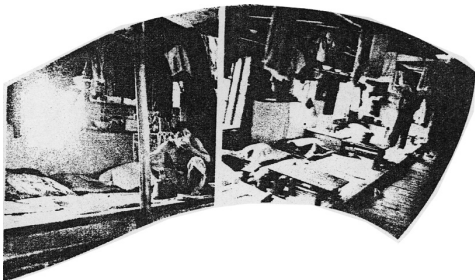
写真2 [南側] 3 [南側洗面所]



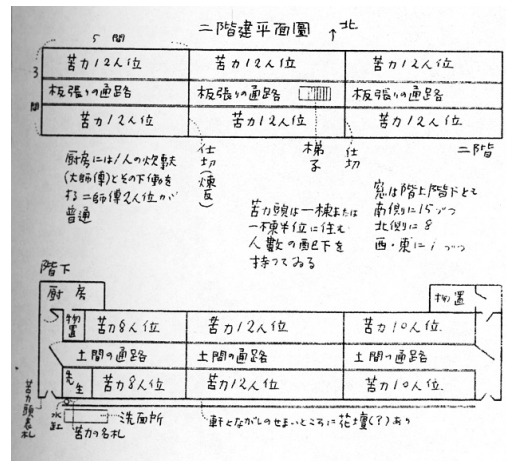
4 [苦力の名札] 5 [北側厨房]



6 [階下] 7 [階上]



No. 210-8 「二階平面図」「階下」



*「平面図」と「階下」の細かな手書きの書き込みは省略するが、板張り (二階)、土間 (階下) の通路を挟んだ両側の一区画に8人、10人、12人程度の苦力がいること (二階合計72人位、階下合計60人位)、二階の一区画の幅が5間、廊下も含めて奥行きが3間で、通路の中央に梯子があること、また苦力の名札や洗面所、苦力頭を表札、物置などの位置が示されている。両図の間と下部には、以下の手書きによる書き込みがある。「厨房には1人の炊事夫 (大師傳) とその下働をする二師傳2人位が普通」「苦力頭は一棟または一棟半位に住む人数の配下を持っている」「窓は階上階下とも南側に15つつ北川に8、西・東の1つつ」「軒とながしのせまいところに花壇 (?) あり」

第201号 (昭和12年9月15日発行)

No. 211 [満州郷土画譜88 大連の露西亜家屋]

内地からはじめて大連に来た絵かきが、先ず画心を動かすのは露西亜の建物で、特に町を好んで描く絵かきには、旅順、大連は描き尽せぬ位、建物の画題が豊富である。何故支那の建物よりも露西亜の建物の方が一般の絵かきに好まれるかという、大連の支那式家屋はマッチ箱に屋根と窓をつけたような簡単な建物で、然も孤立した住宅と云っては、欧風の何の変哲もない建物ばかりで、いくらかでも支那の匂いを持つ建物 (建築というよりも装飾と云った方があっているかも知れぬ) は、大連のような歴史の短いところでは商店街

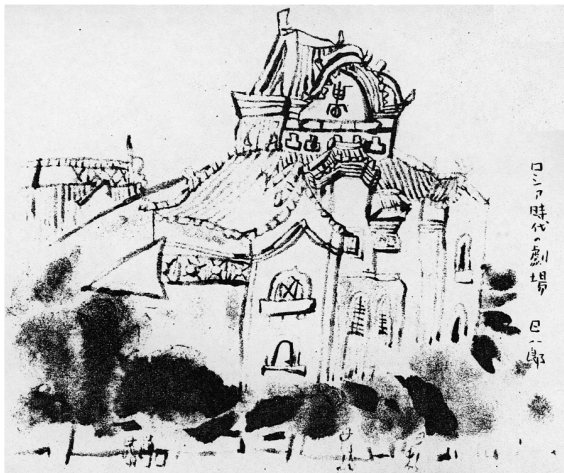
より他に見ることが出来ない。その商店街は表向だけを飾り、家が並んでいて、側面は見えないから、平盤になって絵かきには非常に条件が悪い訳であるが、露西亜の建物はこれとは全く反対の条件を具えている。特徴のある露西亜建築は商店街よりも、孤立して建っている住宅官省に多く、側面からも裏からも、また遠望が利き、建物は複雑な形式が営まれておって変化に富んでいる。

日本家屋の古いのに露西亜風につくられたものの多いのは、気候の関係や、当時の情勢から見て当然のことであって、十五年も経った日本建築なら、ほとんど露西亜の匂いのしていないものはない位である。

露西亜建築は大連より旅順に多いとも言われているが、大連では何といても露西亜町の名のある如く、今の乃木町一带に当時の官庁、ホテル、官舎その他の住宅が、外観はそのまゝに残っており、現在の満鉄本社や紅葉町の支那劇場なども当時のものである。

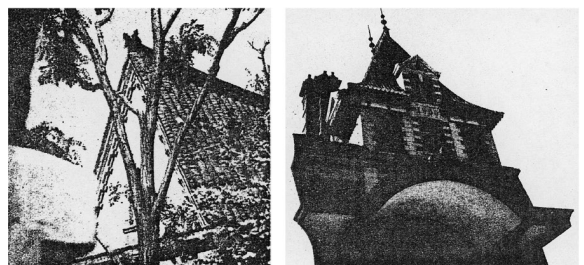
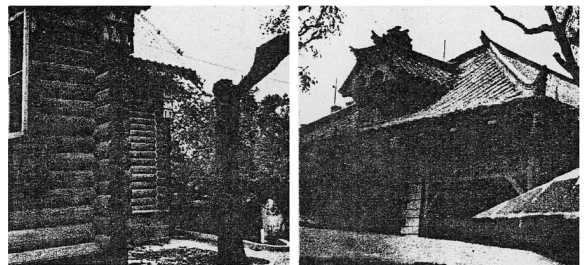
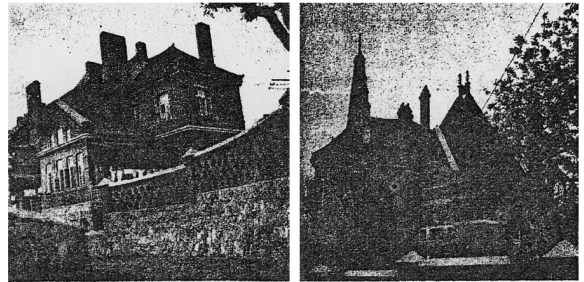
建物の一つ一つについては、昨年二月号の「満州建築雑誌」に近代満州建築史に関する座談会速記が載っていて、写真に説明が加えてあるから、そちらで見て頂くことにし、こゝには歴史的興味や建築学的見地からでなしに、通りすがりに見た面白い建物ばかりを拾ってみた。 巳八郎

No. 211-1 「ロシア時代の劇場 巳八郎」



No. 211-2 ~ 11 写真10点 2 [社員会宿泊所もとのダルニーホテル] 3 [日本橋図書館もとの東清鉄道汽船会社] 4、5 [乃木町の満鉄社宅] 6 [北公園の木造家

屋] 7 [六角堂もとの礼拝堂] 8 [北公園の木造家屋もとの水上警察] 9 [乃木町、明りとりと煙突] 10 [乃木町の満鉄社宅の鬼瓦?] 11 [満州館、建立の年号が入りてある]



*巳八郎がレポートした建築物すべてが現存するのかわ定かではないが、大連のロシア建築は、現在でも大連観光の見どころのひとつになっている。

第202号 (昭和12年10月1日発行)

No. 212 [満州郷土画譜89 支那家屋の正面飾り—大連—]

露西亜の建物を観る上に、便宜上、支那家屋をマッチ箱だとか実利一点張だとかけなしたが、見る目に直接訴えるものはそんな小理屈ではない。一応は支那家屋がどんなにして出来上っているか、解っているものにも、芸術上のこゝろに映る姿は、わざわざ表飾りをとり除いた裸身の建物ではない。また表飾りだけが建物から別物となって見えるのでもない。やはり正面装飾は建物そのものであって、特に支那の建物では、建築上の最も重要な役割を果たすものではないかと思う。

大連の支那家屋は、これは変っていると思ってよく眺めると、同じ形式のものでもっと強調された支那臭の濃いものが、一步沿線に出ればいくらもあって、特に大連らしいものとしてはなかなか掴みにくい。即ち煉瓦づくりのマッチ箱に、細長のトタン、木片れ小屋ばかりで、稀に丸柱黒塗りの木柱やそりのある高屋根があるにはあるが、奉天、海城あたりにはざらにある建物である。

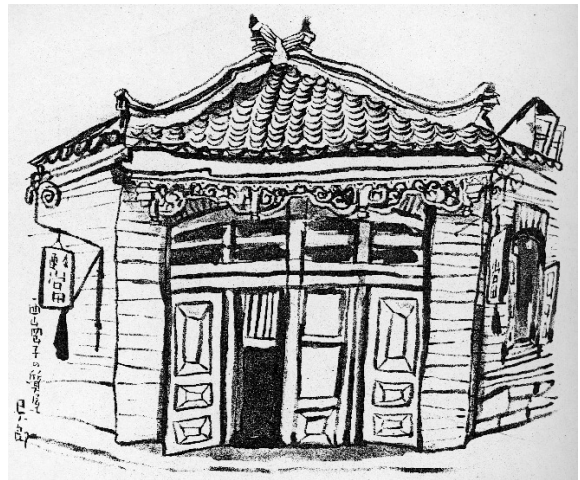
それで大連では古いものを求めることは絶対に不可能で、店舗の舗飾り即ち正面装飾に、自由につくられた大連支那を探すより仕方がない。しかしこれとても面白いと思うものはちゃんと沿線各都市のものが多く、やっとこれならと写しとったものには、案外くだらぬものが多いのであるが、しかしくだらぬながらそれが大連支那であるから致し方がない。

大連にながく住む絵かきが、一見くだらぬ建物だと思われる支那家屋に興味を覚えながら描いているのを、私の友人のなかに幾度か経験したことがあるが、これなど、この家屋こそ大連の代表的支那家屋だと意識して描いたのではなく、絵かきの敏感な神経にうったえてのことである。

こんな風に見て来ると、何処にでも特徴は必ずあるのであって、現在つまらぬものと思われるものでも、相当の時日を経て来たら、このつまらぬものが、はっきりと特徴を発揮するのであろう。

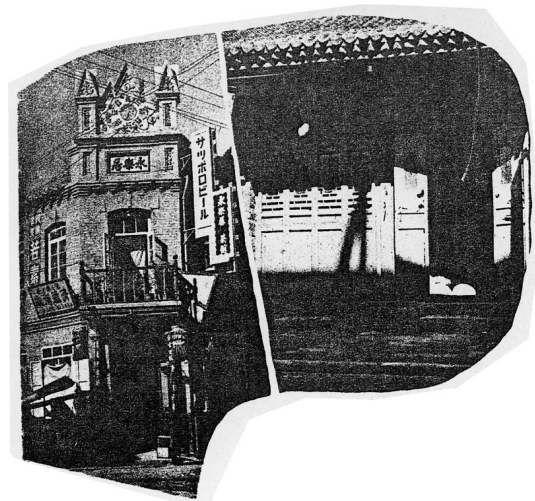
巳八郎

No. 212-1 「西崗子の質屋 巳八郎」

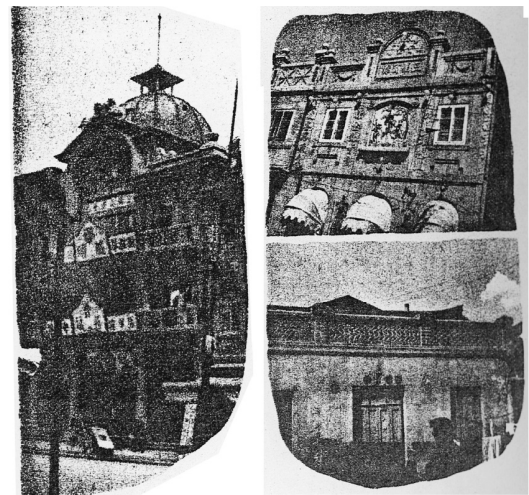


No. 212-2 ~ 10 写真9点

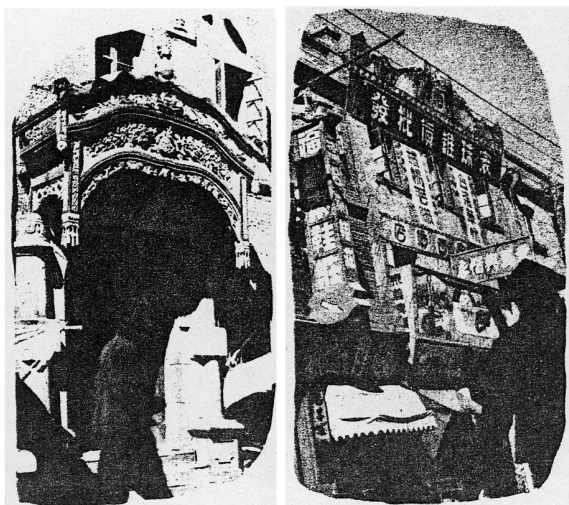
No. 212-2左 [西崗子の飲食店] 3右 [近江町の肉屋]



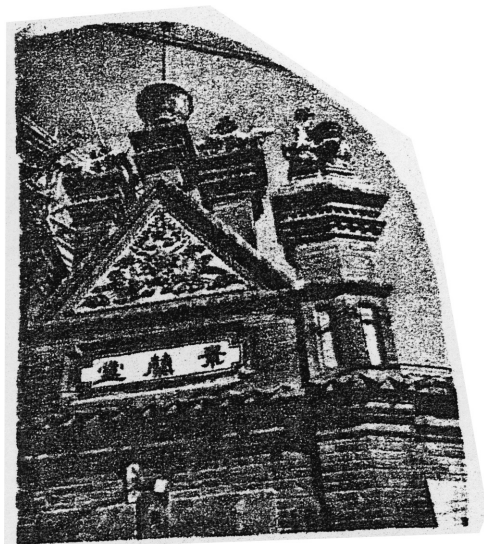
No. 212-4左 [奥町の劇場] 5右上 [西崗子の金銀細工店] 6右下 [西崗子の平康里の一軒]



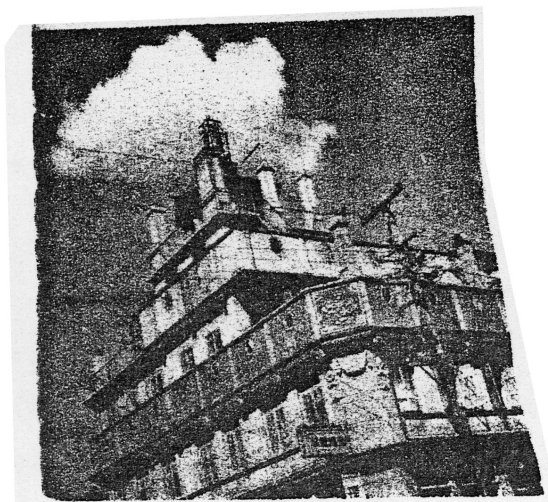
No. 212-7左 [西崗子の風呂屋] 8右 [西崗子の雑貨店]



No. 212-9 [西崗子の平康里の一軒]



No. 212-10 [西崗子の寄合デパート]



第203号 (昭和12年10月15日発行)

No. 213 [満州郷土画譜90 北平の店頭装飾]

北平は満州ではないが、満州の郷土的所産の殆んどのものが北平の真似事に近いのであるから、時折北平を「郷土画譜」にもって来ても無駄ではないと思って揚げてみることにした。

こゝに集録したものは、北平前門の繁華街と、崇文門から東四牌楼までの大通り、二ヶ所のもので、場末の店頭は別の機会にしたいと思っている。

凝った装飾ほど木彫の多いのは、木材に恵まれない北平では何よりも尊いものに考えられているからであろうが、彫刻も通り一ぺんのものでなく、左甚五郎の猫や鼠位のもはザラにある。もっとそれ以上にこまかく手のこんだものもあって、その上に塗られた、丹や金、銀の美しさは、ただのこけおどしでなく、強烈な色彩の洪水にも拘らず、不思議な位の落つきをみせ、然も冷気を催すほどの静けさを漂わしているのは、古い歴史の致すところであろうか。紺布をひさしに使った店もあり、白布に紺色の大文字を縫い入れてある店もあるが、これがまた如何にも老舗といった感じを深めている。

北平ほどの歴史を経てくると、恰度日本でも匂いはしなくとも味噌屋と薬屋の店構えが自ら異なっているように看板がなくとも、どの店が紙屋か醤油屋か、文字を解しないものにも、それと識別出来るのであろうが、われわれ旅行者には、薬屋と煙草屋は見分けがついても、表飾りだけでは、薬屋と葉茶屋を見違えることがある。

満州に較べると、北平の表飾りはこれ以上は施しようがないといった位、表の全面が飾られてあるが、満州の招牌のように、一つだけ、龍とか、道路にまではみ出た木刻の大きな看板は、繁華な町ほど見ることが出来ない。そうして北平の彫りもの細工は大部分が木であるが、満州はセメントものの浮彫が多いが目立っている。

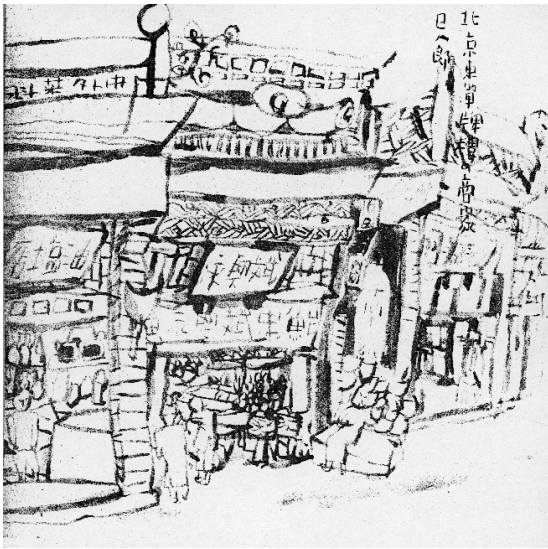
永い歴史の間に研を添え、凝りに凝りぬいた旧都のものはさすがに満州のものとは比較にならぬ位、重量と落つきがある。私は門前町の石頭胡同のさる油店の店内に座りこみ、内容の大きさや、時代のついた柱や棚、樽から家財の隅々まで研ぎのかかった美しさに、

ただ茫然として見惚れているのを、俵夫にうながされてやっと立上ったのだが、北平の町をゆっくりと見歩いてたら、店頭店内の魅力だけでも、結構一年や二年の足止は喰らわされるだろう。

巳八郎

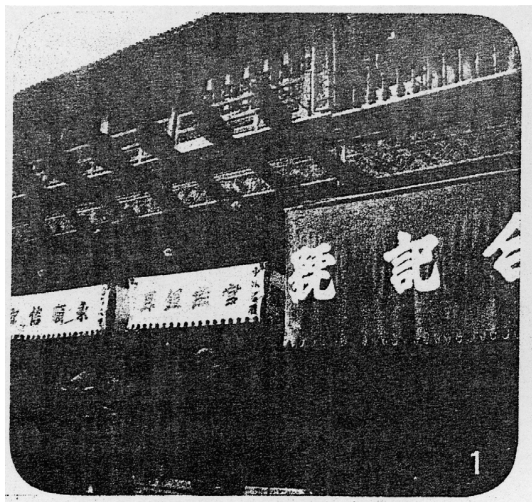
*北平市は、現在の中華人民共和国の首都北京の旧称で、1928年から1949年までの公称である。ただ、これ以前にも、時代によっては北京とも呼ばれており、下の図中にあるように、1937年当時も北京という呼称が使われていた。なお、中華民国においては現在も北平が公称である。

No. 213-1 「北京東単牌樓の商家 巳八郎」

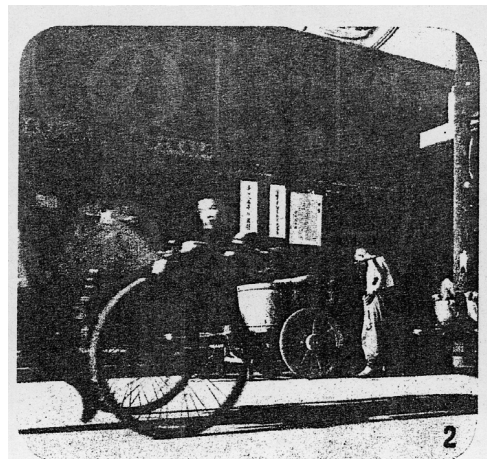


No. 213-2 ~ 7 写真6点

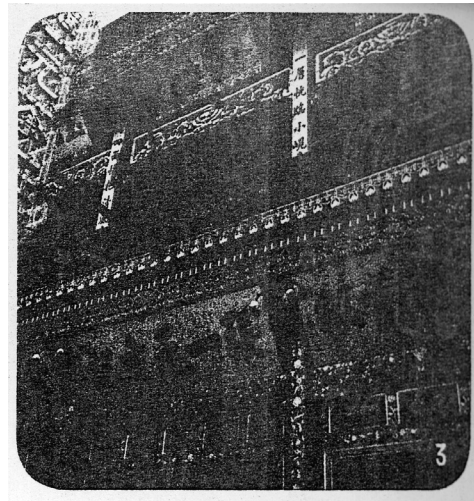
No. 213-2 [1. 小さく仕切った店、中央が高級乾物食品店とでもいおうか、宮燕が燕の巣、銀耳が木くらげ]



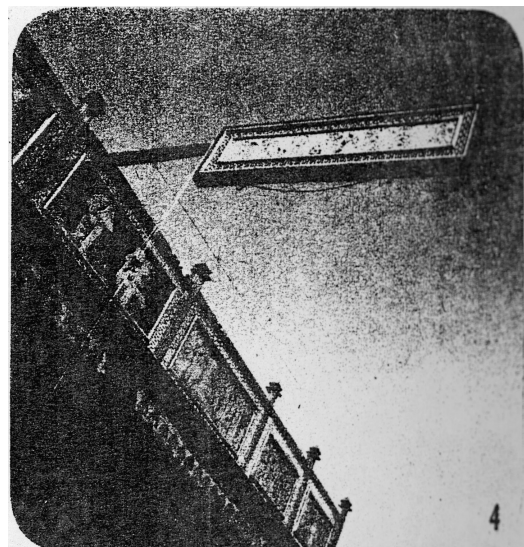
No. 213-3 [2. 店構え全部が木造りの雑貨店]



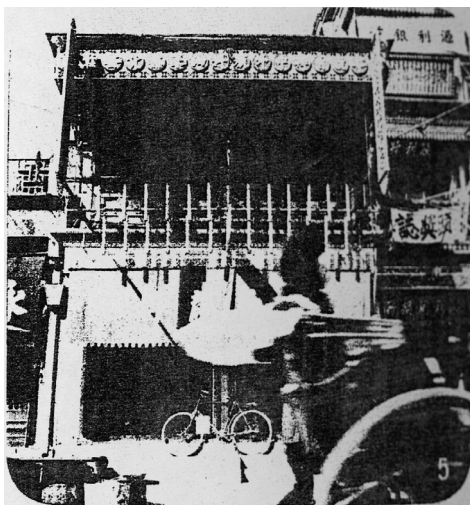
No. 213-4 [3. 金、銀、丹の極彩色の彫刻を施した、目を射るばかりの雑貨店]



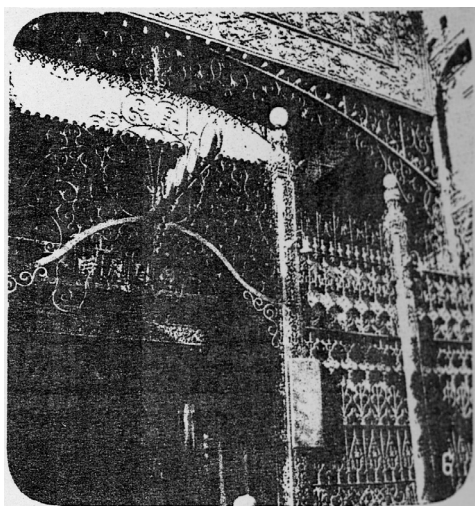
No. 213-5 [4. 洋品、呉服を商う店]



No. 213-6 [5. 染物顔料の小売と問屋も兼ねた店]



No. 213-7 [6. 主に洋品、呉服ものを扱っている小デパート組織の店、金具を以てところせまきばかりに張りめぐらし、前庭を通過してはじめて本屋があり、こゝには木彫の美事な装飾がある]



第204号 (昭和12年11月1日発行)

No. 214 「北京一瞥」

恰度仲秋節をひかえた北京は、兎兒爺の人形の小さいのは一寸位から四尺もあろうという大人形が美しく街頭に並んでいて、秋の果物がそのあいだに水々しい色を見せ、骨董やはそのすき間を縫うように、ギッシリと街頭を埋めている。骨董やといっても大風呂敷一枚の店、品物とても安いものばかりであるが、城内隈なくこの小骨董やの洪水である。東に陽があれば東の軒下に、西に陽がかわると西側に、商売道具からげて移

動する手軽なものであるから、われわれ旅行者には、先ず土産物を考える時、何よりも魅力である。

聞くところに依ると、北京の有閑階級（清朝時代の官吏だったものほど多い）は、清朝没落後服飾品、家財道具の売食いをして生活を続けているという話だが、最近また古物やに骨董やの多くなったのは、益々北京人の生活が苦境をたどっているのではないかと思う。

私は正陽門大街の電車通りで、立派な衣服を纏った中年の男が、通行人を捕えて時計を買おうとしているのを見かけたが、これなど考えようでは、盗んだものを始末していたのかも分からないし、何かわかったものではないが、旅行者の私には泥棒とは見えなかった。街頭骨董やの多いのは崇文門大街の、東單牌楼から西四牌楼付近、それから前門を天橋までの間が何といつても一番多く次に崇文門外、朝陽門内、廣安門内にもパラパラではあるがみうけられた。

前門街

二、三百年前の建物がまだいくらか残っているという、前門街の老舗を見ると、お寺ともつかず、お宮ともつかず、文字がなかったら何様をおまつりするところだろう位の疑問が起きそうな構えである。薬やに醤油や葉茶やなど特にそんな風に見えるが、古い時代のものほど、お寺もお宮も庶民の住居も同じような形式であったのだろうと思う。奥行の深いお茶を売る舗などヒンヤリとした冷気を覚え、正面神壇にもならうような、商品の美しく飾られたあたり一寸崇高な気分にならうたれてしまう。

東單牌楼の平屋建の薬やに恐ろしく手のこんだ彫刻を施した正面装飾があるが、この舗は十四年前はじめて北京を訪ねた時、かぶっていた埃をそのままにしてあるのではないかと思った位、そっくりそのままの様子が嬉しかった。

宮殿は遠めにみてもよいが接近し、なかに入ってみると、つまらない。外観もただ大きすぎて絵にはならぬ、恐らくは写真にも迷惑なほど、大きすぎるのではないかと思う。宮殿は夢心地に、俾の上から見た方がよい。何百年の歴史を伝えてくれる、古色ゆかしい門楼も、煤けはげた丹の色も、深みどりの樹間にかいま見た方がよい。宮殿のなかには、私は二度と入ってみる気がしない。じめじめしていて、妖気が漂って暗くて、

今にも何か出て来そうに思えるのである。元来支那の上層階級というのは何も解らぬ癖に大きなものとか手のこんだものでおどそうとする。清朝など、その最も代表さるべきもので、やたらに高価なもの、手の混んだものを残しているが、芸術的に貴高いものといつては、ずっと古いもので、特殊なもの他は何も見べきものがないのである。つまり小かく部分部分を見て歩く必要がないのである。日本のものなら建物にしても彫刻にしても、細かく深くみていってはじめて、そのよさが解るのであるが、支那のものは、出来るだけ遠く離れてみて、真価が解る。このへんが日本と異なる点ではないだろうか。

蟋蟀を売る

東單牌樓の乾物店の店先には沢山の壺を並べて蟋蟀を売っている。蟋蟀は声を聴くのと喧嘩をさせるのと二つがあるが、われわれには喧嘩蟋蟀の方が面白い。満州でも、満州人の子供が、缶詰の空缶に泥を半分程入れたなかに、蟋蟀を入れ、小さな空気ぬきの穴のあいた紙を上から被せているのを持寄り、どっちか一方のを片方に入れると、物凄い噛みあいをはじめる。頭をくい破るところは鶏のシャモの蹴合いによく似ていて残忍なものである。負けると蟋蟀は直ぐ降参するのが多く、ピーと鳴いて翅を抜いたら負けである。

大連では、満州文化協会が毎年蟋蟀の喧嘩大会が開かれていたが、もうやらなくなって五、六年になるようである。

鳴く方は、奉天の青葉町に今はたしか支那宿になっている、青蓮書館の女が、日本で使う金魚入れの硝子に無数の蟋蟀を飼っているのをみたが一匹か二匹が、時々鳴いてみせるだけで、何かうらさびしい情趣のものである。

北京では蟋蟀を飼うのは、ずっと昔からのことだそうである。東安市場付近には、夏から秋にかけて、無数の蟋蟀やが出るといわれ、蟋蟀を飼うに必要なものだけを商っている大きな舗が、東安市場付近にあるそうである。

胡同

胡同は元朝が北京に都した時残していった名前だそうであるが、今日では蒙古の響きはなく、北京というと、胡同が口をつけて出て来る位、北京の香りを持った名

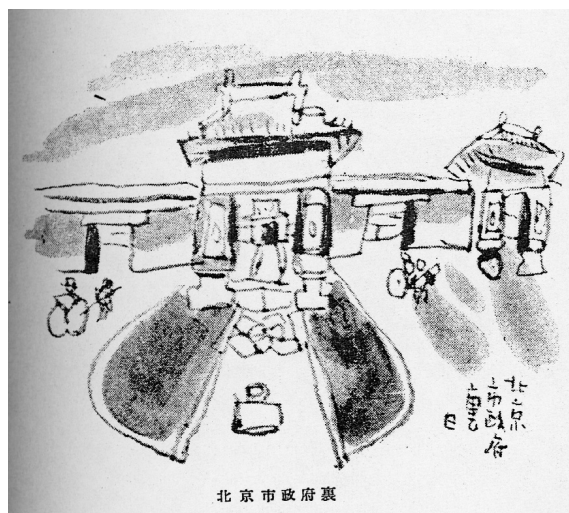
前である。

胡同は小さな住宅街を何々胡同と呼ぶのであって、静けさそのもののような通りは、土塀か石の塀で暗い灰色を思わせる。人通りは滅多にない、時々物売りの音が胡同の静けさを破って流れてゆくと、門扉をカタンと聲させて、少女か太太が出て来て呼止める。と云ってもここでは呼止めるのではない。門扉が開かれる音がすれば、呼止めたことになるのであろう、少女は黙って物売りの近づくのを待っている。

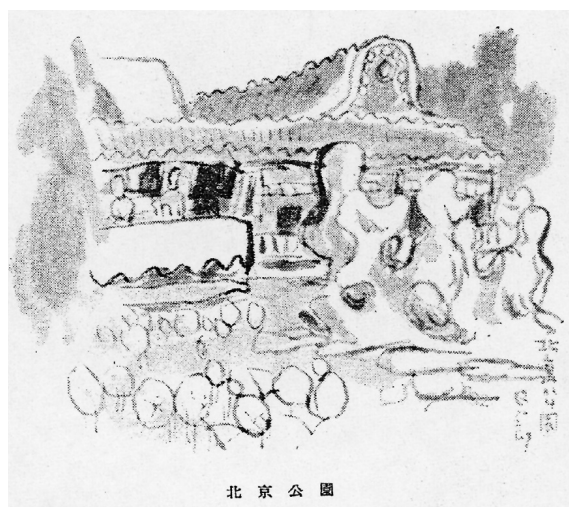
北京の胡同を一日、俚に乗ってそれこそ夢をみているような気持で、静かに走らせたらと思ったが、これは果さなかった。

(文・絵とも一甲斐巳八郎)

No. 214-1 「北京市政府裏 巳」 [北京市政府裏]



No. 214-2 「北京公園 巳八郎」 [北京公園]



第204号 (昭和12年11月1日発行)

No. 215 [満州郷土画譜91 天津の電車 一磨電車]

息ぬきに、剽軽ものゝ天津の電車を紹介しましょう。北支方面では電車は、外国人の乗るものではないように習慣づけられていて、日本人で乗る人は皆無といってよい位ですが、一度、乗ってみると、支那人の習癖から、土地の様子までのぞけるような気がします。

先づ電車の形は御覧の通り、不細工のようで、満州のとは一寸違っています、色は黄土一色、時々前面をアジアのマークのような形に真紅に塗ったのがあります。一輛だけのもたまに見うけますが、大抵は二輛引っぱってあって、どちらに乗っても料金はおなじです。腰掛は隙間のある板張りで、お客さんは支那人でも気取った人は乗りませんから、車内は決して綺麗ではありません。

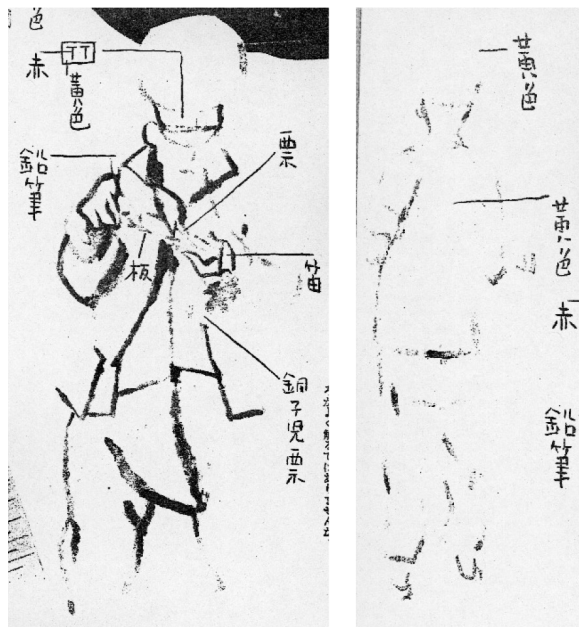
実は剽軽ものゝの電車といいましたが、全くの剽軽ものは車掌さんなのです。見られる通りの呑気な顔をして、右手には真鍮の小さな笛(子供のラッパの音がする)を持ち、耳には鉛筆、左には板に幾種類もの切符をのせたものを、器用に掌には銅子兒の二、三十枚は常に釣銭として用意しているという、いでたちです。客から行先を承ると、先づそれだけの銅子兒を貰い、切符に鉛筆を舐めて書きつけて渡します。切符には八銅子(二銭位)十銅子、十二銅子の三種類があって、駐車場の番号が書いてあり、乗った停留所の番号の箇所鉛筆で記すのですから、八銅子の切符なら何号の停留所まで、十二銅子なら何処までと判っていて、絶対に胡魔化しは利かない訳です。

停留所では、急いで下車することはありません。悠っくりと下りることです。発車の時、ドアを閉める瞬間、例の笛をピッピーとふき鳴らすのが、どうにも子供のママゴトとしか見えません。車掌さんは何処の電車でも相当に忙しい仕事ですが、車内には常に茶壺と茶碗を用意していて、どんなに満員の時でも、咽喉が渇いて来ると一杯やるのです。まあお茶位は空気の乾いている天津のことであり、お茶の好きな国民ですからよいとして、腹がすいて来るとご飯も食うのですから、われわれの持っている常識では何ともただ驚きの他ありません。私は食い余しの、大きなうどん鉢をしっかりと右手に持って食っているのを見て吃驚しました。

お客さんとはみれば他人ごとだとばかり些かの関心も注いではいません。

電車のなかの、わづか一分か二分の間の、ほんの一場面にもこうした支那人の、何処までノホーズに、よく言えば大国民らしいところがよく解るではありませんか。 巳八郎

No. 215-1,2 図中に「票」「笛」「赤」「黄色」「鉛筆」
*印刷の仕上がりが悪く、絵はほとんど見えない。

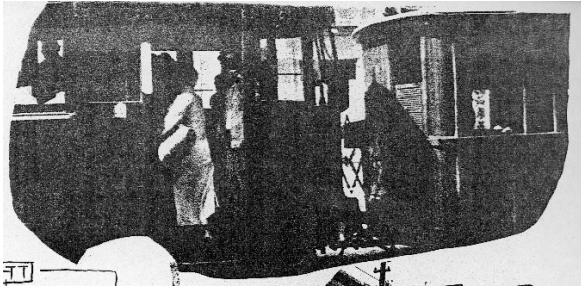


No. 215-3~7 写真5点

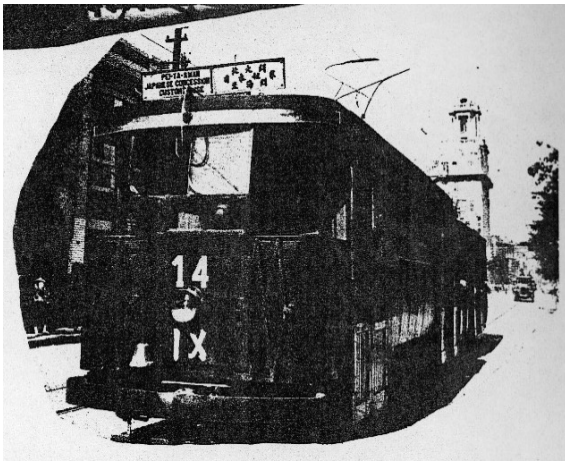
No. 215-3



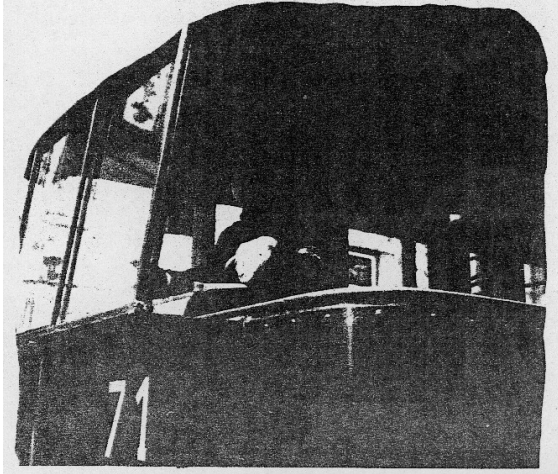
No. 215-4



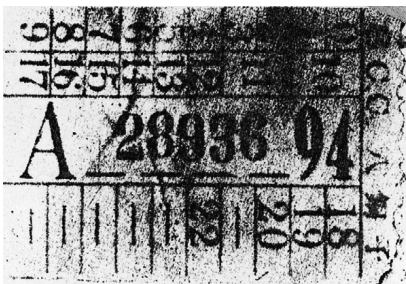
No. 215-5



No. 215-6



No. 215-7 *切符の写真であろう。



第205号 (昭和12年11月15日発行)

No. 216 [満州郷土画譜92 鷹]

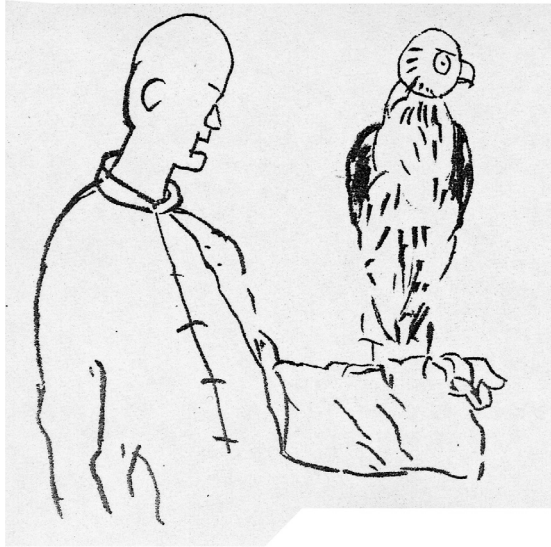
漸く寒くなる頃になると、大連の西崗子には小鳥の市がたち、そこにはあたりを睥睨するかのよう物凄い眼玉を光らした鷹の市も出る。大連の鷹は全部旅順の老鐵山で幼鳥を網で捕獲したものだというが、出生地は何処だか判らないそうである。毎年軒下に十羽ばかりの鷹を並べている、西崗子の日清街七、隆興和油漆舗というペンキ屋をたづねてみると、生後三ヶ月だという鷹が、頭巾を被り羽根を縛られて長椅子の上に並んでいる。これは旅順から来たもので、道中喧嘩をしないようにくくってあるのだという。鷹の値段は小さいのは五銭から三十銭迄、成鳥になると芸のないのが五十銭位で、雀や兎を捕獲するのが上手な鷹は百円位はざらにあるとっている。鷹を扱う時季は九月初旬から十一月はじめ頃迄で、成鳥になると、牛肉を一日に十銭は食うから、五十銭七十銭の鷹は一日も一時間も早く手ばなしないと損をするそうである。去年は六十円損をしたが、日本の陸軍に兎を捕ることのうまい幼鷹を六十円で売った、と大変これが自慢のようであった。 一以下本文鷹の項27頁参照 巳八郎

*この本文については未確認。次回に掲載予定。

No. 216-1

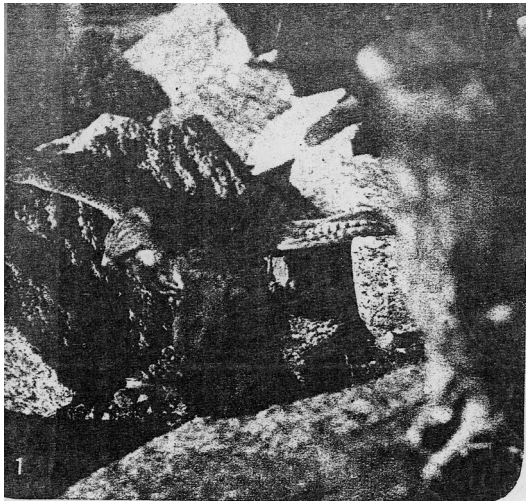


No. 216-2

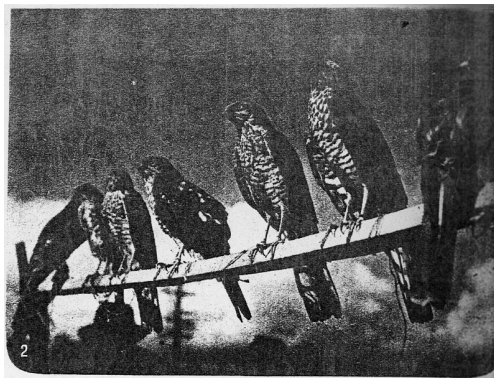


No. 216-3 ~ 10 (写真と写真説明)

No. 216-3 [1羽根を拡げているのは生後三ヶ月の幼鳥]

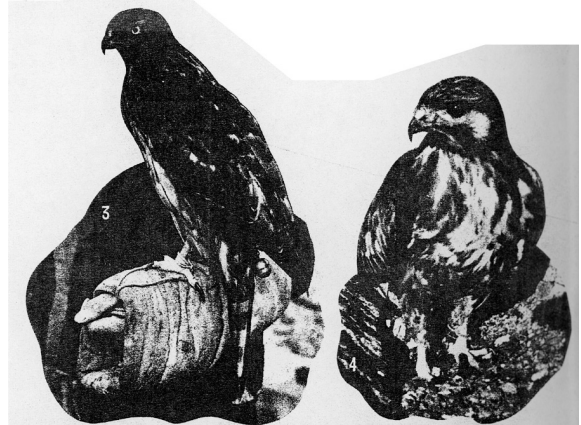


No. 216-4 [2西崗子(大連)新世界大戲院前の鳥市にて]

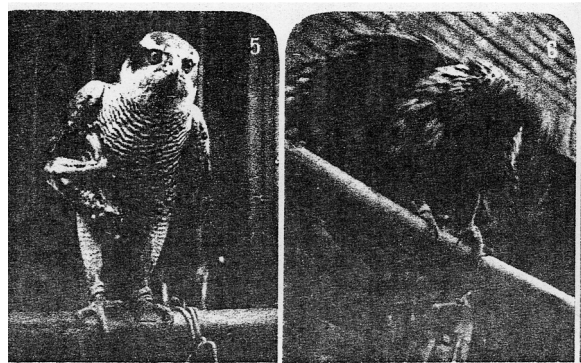


No. 216-5 [3相当飼いならした雄鷹]

No. 216-6 [4 1に同じ]

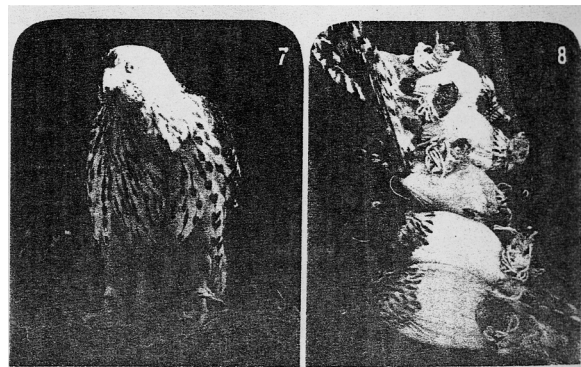


No. 216-7 [5小鳥の肉を脚にくくりつけた“おおか”] No. 216-8 [6餌をつついてる去年生れの鷹]



No. 216-9 [7鷹の幼鳥、五ヶ月位]

No. 216-10 [8喧嘩しないように頭に頭巾、羽根に着物を着せて運ばれてくる]



第206号 (昭和12年12月1日発行)

No. 218 [満州郷土画譜93 満州旗人の家]

旗人の多い吉林でも最も古い名家であるといわれている牛氏の住居は、吉林城内の牛宅胡同にある。町名になっている位であるから名実ともに立派なものであるが、牛氏の家族は正堂東側二た部屋に小さくなって残っているだけで、調度品の如きは大部分が売り尽され、正堂西側の部屋は日本人に間貸して畳敷になっており、側面の廂房、陪房にはやはり、人が住んでいるが、これらは牛家の使用人が古くから住んでいるのかもしれないが房内にはみるべき何物もない。現在みるべきものは外観の大門、儀門、各房の窓の棧、それから儀門両翼の磚や屋根上の彫刻などで、わづかに正堂東側の部屋だけには、五六十年から百年に近い調度品が残っていて、これだけでも房内を窺いするには大助かりであった。

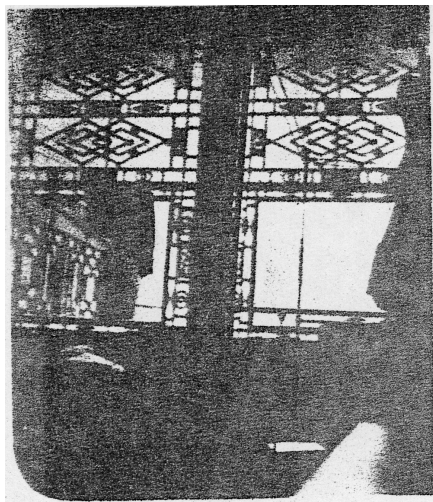
家屋の見取図は大体、郷土画譜八四の「旧家」に似通ったもので、過竈と、過竈前の院子、廂房の箇所がないだけである。

他に同じ吉林の、韓家と王家の写真を挿入したが韓家も牛家と同様没落の旗人であり、王家は何から何まで新しく建てられた、いわゆる成金の、旗人の家である。別に本文「満州旗人の家」に齊齊哈爾の満州旗人家屋の写真があり、記事も参照されたい。 巳八郎

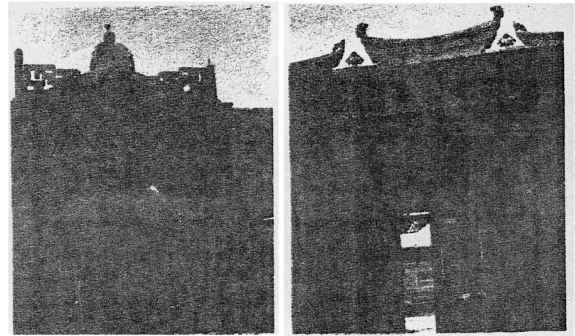
*この本文「満州旗人の家」も次回に掲載予定。

No. 218-1 ~ 16 (写真) *インクがつぶれて詳細不明のものが多いが、そのまま掲載した)

No. 218-1 [牛家正廳東端の部屋より]

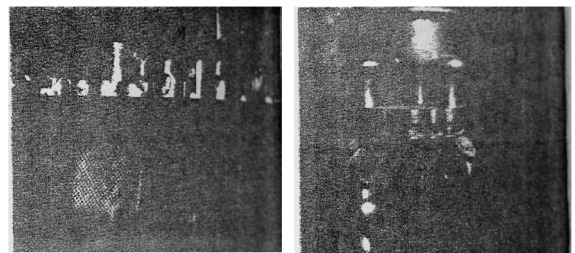


No. 218-2 (左) [牛家・正廳東端、廂房と接するところ] No. 217-3 (右) [牛家・大門]



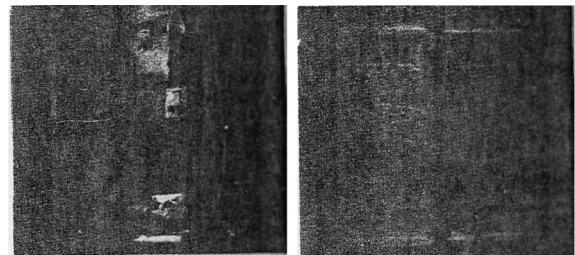
No. 218-4 (左) [牛家・正廳東端の部屋の調度]

No. 218-5 (右) [牛家・正廳東端の部屋にある薫炬]

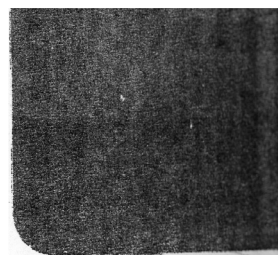


No. 218-6 (左) [牛家・正廳東端の一室]

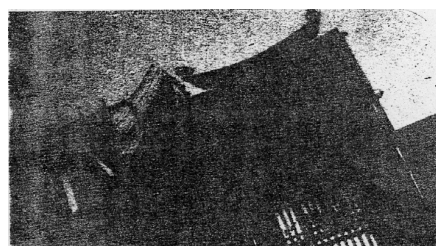
No. 218-7 (右) [牛家・正廳正面扉下部]



No. 218-8 [牛家・正廳正面扉下部]



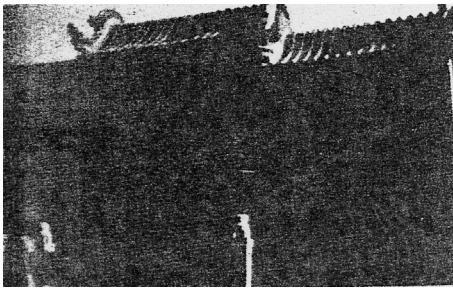
No. 218-9 [韓家・儀門内側より]



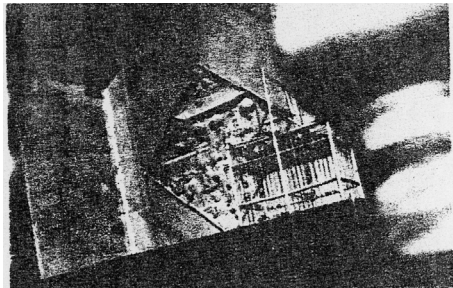
No. 218-10 [韓家・正廳と廂房]



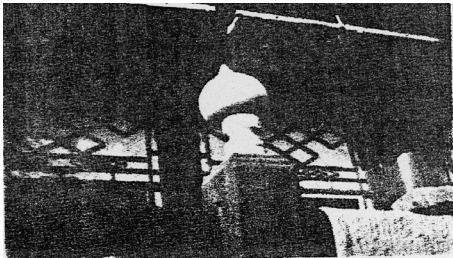
No. 218-11 [韓家・影壁]



No. 218-12 [韓家・正廳東端の壁]

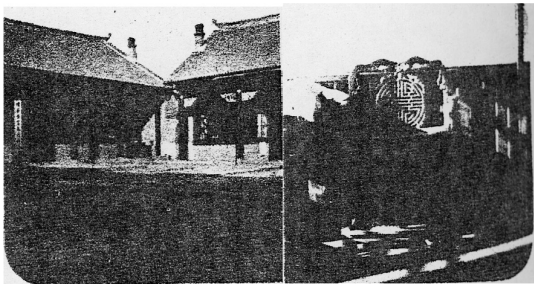


No. 218-13 [韓家・正廳東側の窓]

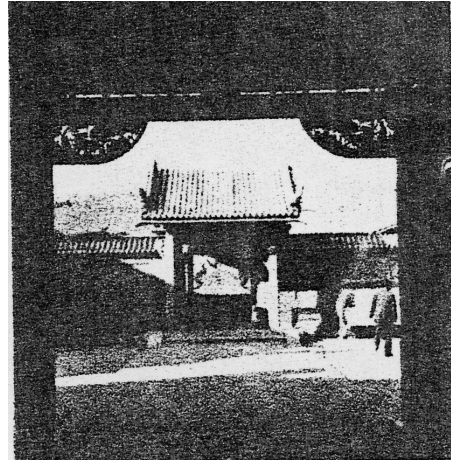


No. 218-14 (左) [王家・左が正廳右が廂房]

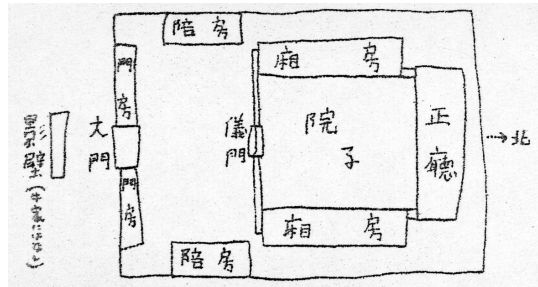
No. 218-15 (右) [王家・東側廂房の一室]



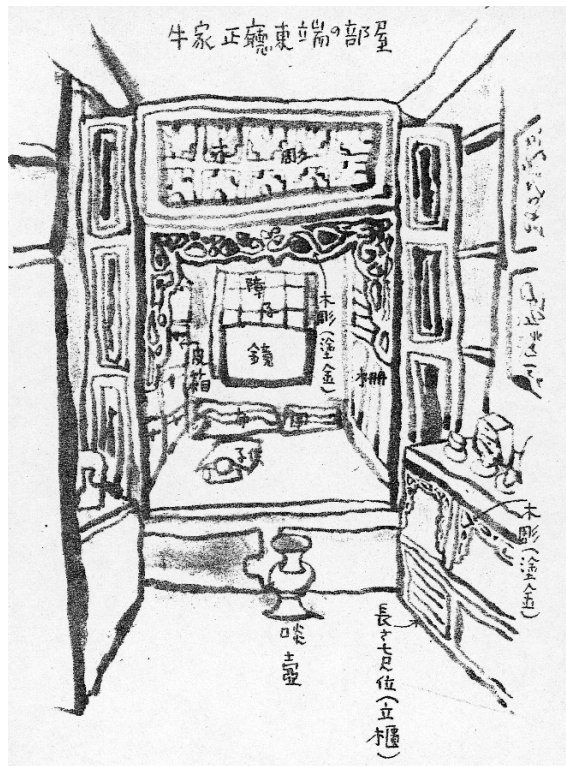
No. 218-16 [王家・大門より儀門を望む]



No. 218-17 [なし]*タイトルはないが、特定の家ではなく旧家の一般的な平面図であろう



No. 218-18 「牛家正廳東端の部屋」



福岡市美術館における「バリアフリーギャラリートゥアー」について

事業の成り立ちと概要、活動事例報告

2024年度実施の「視覚障がい者のための おしゃべりとてざわりのツアー」を中心として

高田瑠美

1. はじめに

福岡市美術館では、2020年度より教育普及活動の取り組みのひとつとして、「バリアフリーギャラリートゥアー」プログラムを企画し、2025年度まで継続的に実施している。この取り組みは、当館の教育普及部門が掲げる活動方針「アートといきる」の5つの具体的活動のうちの一つ、「アクセシビリティの向上」を目指して行うものであり、「多様な背景を持った人が集う場である美術館で、物理的のみならず心理的にもすべての人が安心して学び、過ごせるような空間づくりを目指す⁽¹⁾」という指針に沿って、障がいのある人もそうでない人も、親しく、安心して、より日常的に、美術館を楽しめるよう実施するものである。具体的には、「視覚障がい者のための おしゃべりとてざわりのツアー」、「聴覚障がい者のための 目で聴くツアー」、「車いす利用者のための ゆったり車いす鑑賞ツアー」という3つのプログラムを、それぞれ年に1回のペースで、美術館のコレクションを活用したギャラリートゥアー（鑑賞プログラム）として開催してきた。本稿ではこの「バリアフリーギャラリートゥアー」について活動を振り返り、事業立ち上げの契機や概要をまとめるとともに、具体的な活動事例として、特に筆者が担当した2024年度の「視覚障がい者のための おしゃべりとてざわりのツアー」の実施内容について報告する。また、今後の事業の可能性について検討する一助とすべく、2025年度11月に実施した同ツアーにも触れて、現状のまとめをしたい。

2. 福岡市美術館の「バリアフリーギャラリートゥアー」について

(1) プログラム成立の経緯

当館の「バリアフリーギャラリートゥアー」を構想し立ち上げたのは、2020年当時、教育普及担当の主任学芸主事であった鬼本佳代子であり、同年8月から9月のうちの3日間で、初めて3つの「バリアフリーギャラリートゥアー」が実施された（図1）。

この初年度のツアーについては、実施後に鬼本が、当館ウェブサイト掲載のブログ（2020年9月30日公開）や新聞の取材記事⁽²⁾にて、開催の経緯、ツアー内容などについて記録を残しているが、本稿執筆にあたり、改めて事業を構想した理由や、プログラム成立の過程などについてインタビューを行った。

それによると、ミュージアムにおける障がい者のアクセシビリティに関わる企画は、本事業立ち上げより前に他館も含め実施されており、それはかなり以前に遡る。初期の例に、視覚に依らない美術鑑賞プログラムとして、彫刻作品に触れる展示が行われた1980年代の先駆的な活動などがある⁽³⁾。なお、福岡市美術館においては、2001年の主催展覧会「流動する美術－VII 視覚を越えて・巡りて 日高理恵子/光島貴之の絵画」が早い例となる⁽⁴⁾。その後2004年度に



(図1) ツアー広報用印刷物（2020年）

は、視覚障がい者を対象とする鑑賞プログラムを複数回、協力事業として行っている⁽⁵⁾。また個人としての経験および関心という点においては、社会の中で障がいのある人がどうすれば生きやすくなるかということについて考える機会が元々身近にあったこと、福岡市美術館の次の勤務館（大原美術館、2008～2012年）で国立民族学博物館の広瀬浩二郎から触察ツアー実施の依頼を受けたことなど、美術館における障がい者向けのプログラムについて考える事例や経験が重層的にあったことをご教示いただいた。

そうした積み重ねから、2012年度に福岡市美術館に復職した鬼本が実際に当館における定期的なプログラム開催を検討することになったのは、冒頭で紹介した館の教育普及活動の方針を立てる中でのことであり、美術館のリニューアル準備期間（2017～2019年頃）の時期だった。活動方針の策定について教育普及担当者間で協議する中で、障がい者向けプログラムの必要性を話す機会があり、リニューアル開館後の新しいプログラムとして、視覚障がい者・聴覚障がい者・車いす利用者向けのギャラリーツアーを構想し、関係者、関係機関に協力を仰いだという。なかでも、視覚障がい者を対象とするツアーを行うにあたり鬼本が協力を依頼したのは、見えない人、見えにくい人、見える人が対話しながら一緒に美術鑑賞をする活動を行っている、石田陽介氏、濱田庄司氏、松尾さち氏の3人であった。彼らは〈ギャラリーコンパ〉というユニット名で20年以上にわたって各地で市民活動として鑑賞会を実施しており、福岡で始まった活動は、今では九州内外に広がり、当館以外での経験も豊富な実践者である。今回改めて3氏にもインタビューしたところ、〈ギャラリーコンパ〉のユニット結成のきっかけとなったのは、2005年に福岡市美術館、福岡アジア美術館などで行われた、エイブル・アート・ジャパン主催の鑑賞プログラム^(前掲註5)であり、それぞれが鑑賞の面白さを体験し、継続していきたいと手をあげたところから、現在まで3人での活動を続けてきたとのことである。2005年の鑑賞プログラムは当館の主催ではなかったが、これを機に、当館の「バリアフリーギャラリーツアー」の初年度から、視覚障がいのある方を対象にしたプログラムについて、講師として参加、協力をいただくこととなった（図2）。



（図2）〈ギャラリーコンパ〉のメンバー、松尾さち氏、石田陽介氏、濱田庄司氏（左から。2024年）

（2）「バリアフリーギャラリーツアー」の概要

当館の「バリアフリーギャラリーツアー」では視覚に障がいのある人、聴覚に障がいのある人、車いすを利用する人へ向けた3つのツアーを行ってきている。各ツアーでは、美術館で行っている他のギャラリーツアーと同様に、コレクション展示を活用した対話型鑑賞⁽⁶⁾を中心にすえながら、参加者同士が互いにコミュニケーションを図り、対話をするなかで鑑賞を深めていくことを試みている。

過去の記録から各ツアーの概要をまとめると以下の①～③のようになる。実施体制としては、ツアー全体の案内と進行役を担うファシリテーターの他、スタッフとして当館教育普及担当職員や博物館実習生、美術館ボランティア等がツアーの人数や構成に応じて必要な補助を担うかたちで開催している。

①「視覚障がい者のための おしゃべりとてぎわりのツアー」

実施年	2020年度（令和2）～2025年度（令和7）、年1回、過去6回開催		
対象	見えない人、見えにくい人、見える人		
定員	10人程度（介護者を含まず）	時間	約90分、または120分
講師	石田陽介氏、濱田庄司氏、松尾さち氏（ギャラリーコンパ）		

内 容	本プログラムは、初年度よりギャラリーコンパの石田氏、濱田氏、松尾氏の三人を講師として開催。ツアーでは見えない人、見えにくい人、見える人と一緒に活動する。講師を中心に参加者は少人数のグループに分かれ、グループごとに互いに対話しながら作品を鑑賞していく。鑑賞作品は、展示中の絵画など平面作品に加えて、彫刻や立体作品についても事前準備をしたうえで作品に触れ、視覚以外の感覚を用いた鑑賞も行う。また展示作品のほかにも、所蔵品に関連するレブリカや教育普及活動用の美術教材も使用するなど、年度ごとに様々な鑑賞を試みてきた。参加者が互いの背景や個性を尊重し、美術作品についての会話を楽しみながら交流しようというのが、講師であるギャラリーコンパの活動のベースとなっており、これは本ツアーにも共通する大切な要素となっている。
-----	---

②「聴覚障がい者のための 目で聴くツアー」

実施年	2020年度（令和2）～2025年度（令和7）、年1回、過去6回開催		
対 象	聴覚に障がいのある人。2022年（令和4）以降は手話を使う人、手話を学んでいる人も参加		
定 員	10人程度（介護者を含まず）	時 間	約90分
内 容	ツアーでは教育普及担当職員がファシリテーターとなり、手話通訳を介してきこえない人、きこえにくい人、（2022年からは要望を受け手話を使う人、手話を学んでいる人も参加）と展示室をまわり作品鑑賞を行う。手話通訳者とは打ち合わせを行い、鑑賞する作品や作家に関する情報を共有し、固有名詞や説明に出てくる可能性のある語句などについて、事前に準備をしてもらい実施に臨んでいる。また、手話以外のコミュニケーション手段として筆記ボード、電子パッド等の補助ツールも用意し、必要に応じて使用する。実施時間は、お互いの話を理解し合う時間や、その場の要望に応じて展示テーマや作品情報を補足的に説明する時間など、作品鑑賞以外の時間も必要となるため、時間を90分に設定している。聴覚障がい当事者には、解説やキャプションを読み個別に鑑賞することができる人もいるが、ツアーでは鑑賞の時間を共有することを重視し、参加者の言葉をファシリテーターが受け止め、参加者同士がお互いに考えたことや見たこと、疑問などを交換することで豊かな鑑賞につながることを体感し、楽しんでもらうことを目的とする。		

③「車いす利用者のための ゆったり車いす鑑賞ツアー」と 「車いすを利用しない方の 車いすで美術館ツアー」

実施年	2020年度（令和2）～2024年度（令和6）、年1回、過去5回開催＊ ＊ただし、1回目のみ普段車いすを利用している人、利用していない人が一緒にツアーをする「車いす利用者のための みんなで車いすツアー」として開催。2回目以降は車いすを利用する人と利用しない人を分ける形で実施。また、2024年度については、「車いすを利用しない方の 車いすで美術館ツアー」については実施せず。（実施年、回数は本稿執筆時点。）		
対 象	普段車いすを利用している人／普段車いすを利用していない人		
定 員	各5人程度（介護者を含まず）	時 間	約90分、または120分
内 容	<p>車いすで館内を動くツアーであるため移動や鑑賞の際のスペース確保、通常の開館時間に行うことなどを考慮し、車いすで一緒に回る人数を他のプログラムより少なく定員は5人程度としている。時間も初回実施後のアンケートでの、もっとゆっくり鑑賞したいという声を受け、2回目からはツアー時間を120分とした。ツアーでは②の「目で聴くツアー」同様、ファシリテーターと参加者が一緒にコレクション展示室にて鑑賞を行うが、作品選定にあたっては、車いすに座った状態でも見やすい位置にあること、参加者同士が留まるスペースがあるか等を考慮する。筆者が直接関わったのは実施4、5回目のみであるが、車いす利用者には肢体不自由だけではなく、いろいろな背景をもった人が参加する状況があり、特に当事者や介護者の個別的特性を把握、考慮してツアーを準備、進行していく必要があるといえる。</p> <p>なお、ツアー対象者については初回以降に変更した点があり、2020年度には「みんなで車いすツアー」として、普段から車いすを利用する人と利用しない人が同じツアー内で一緒に鑑賞を行ったが、2回目以降は車いすを利用している人とそうでない人を分けるかたちに改めた。車いすを利用する人を対象にしたツアーでは、名称を「車いす利用者のための ゆったり車いす鑑賞ツアー」とし、車いすを利用しない人のツアーの方は、「車いすを利用しない方の 車いすで美術館ツアー」としている。車いすを利用している人のツアーでは気兼ねなく作品鑑賞できる時間や空間を整えることを重視してツアーを行う。車いすを使用しない人のツアー実施にあたっては、はじめに車いすの基本的操作を知る時間を設け、展示室での鑑賞前に簡単な操作練習を行った後、ファシリテーションを行う担当者、参加者とも車いすを操作しながら館内移動やギャラリーツアーを行い、ツアー後に各自の気づきを共有する内容としてきた。</p>		

(図3) これまで実施したバリアフリーギャラリーツアーの参加者数

	2020 (令和2年度)				2021 (令和3年度)				2022 (令和4年度)				2023 (令和5年度)				2024 (令和6年度)				2025 (令和7年度)				
	当事者	健常者	介護者	合計	当事者	健常者	介護者	合計	当事者	健常者	介護者	合計	当事者	健常者	介護者	合計	当事者	健常者	介護者	合計	当事者	健常者	介護者	合計	
① 視覚	5	2	3	10	3	3	3	9	5	8	3	16	6	3	3	12	5	4	2	11	4	5	2	11	
② 聴覚	8	1	1	10	8	0	0	8	9	2	0	11	2	3	0	5	2	3	0	5	8	1	—	9	
③ 車いす利用者	4	2	3	9	2	—	2	4	1	—	4	5	2	—	5	7	1	—	1	2	3月19日実施予定				
③ 利用しない人					—	5	0	5	—	5	0	5	—	8	0	8					—				
	29				26				37				32				18				20 (人)				

本図①～③は本稿2-(2)の各ツアーに対応。本稿校了時点(3月4日)の数字のため、2025年度③の参加者数については未記載。

3. 事例報告・2024年度「視覚障がい者のための おしゃべりとてぎわりのツアー」

この項では「バリアフリーギャラリーツアー」の具体的事例として、2024年11月30日に筆者が担当した「視覚障がい者のための おしゃべりとてぎわりのツアー」(以降、「おしゃべりとてぎわりのツアー」)について報告したい。

(1) ツアー内容について

2024年度は「おしゃべりとてぎわりのツアー」の実施5回目にあたり、〈ギャラリーコンパ〉の3氏には講師(ファシリテーター)として事前の打合せから参加いただいた。内容を検討する段階で、講師で視覚障がい当事者の濱田庄司氏から、当館の所蔵作家である藤浩志の作品を取り上げることができるだろうかとの提案を受けた。アドバイザーとして招聘された先で藤の活動について知る機会があり、作家と作品について大きな興味を持ったとのことであった。藤浩志(1960年-)は、鹿児島県出身で、日本各地で活発に活動するアーティストであるが、福岡市美術館では過去に個展を行っており⁽⁷⁾、作品収蔵作家であるほか、教育普及活動に利用することのできる実物作品資料として、《ヤセ犬》を2019年に制作してもらっている(図6)。これは、作品を観察し造形やテーマについて考えた後、新聞紙を素材として参加者が自分なりのヤセ犬作りに挑戦するという、鑑賞と制作が連動するプログラムに活用している作品である。「バリアフリーギャラリーツアー」でも制作まで行うことが可能かなど、導入方法は考える必要があったが、触れて鑑賞する作品として2024年度はこの《ヤセ犬》を選ぶこととし、また、新収蔵作品として公開が始まったばかりのモナ・ハトゥムの《+とー》についても、グループごと、全ての参加者が展示室で鑑賞する一点としてツアーに含めることとした。

打合せにより、前半にツアーで美術館の近現代美術コレクション展示室での鑑賞を行い、休憩をはさんだ後半の時間でアートスタジオにて《ヤセ犬》に触れるという大きな流れを決めた。しかし、参加者の制作については、本番までに引き続き検討を重ね、濱田氏には制作部分の具体的なやり方に関する相談やリハーサルにも同席してもらい、最終的に次の流れで実施することとした。

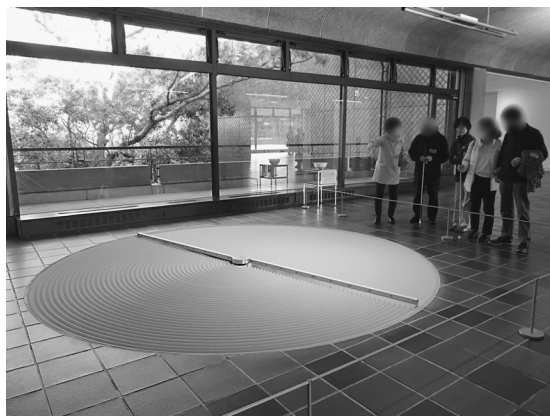
準備	事前に参加者を3つのグループに分けておく。受付後、グループへの誘導、案内を行う
14:00	スタート：講師とスタッフ紹介、グループごとに参加者自己紹介
14:05～	2階のコレクション展示室に移動 鑑賞前に講師3名によるデモンストレーション(10分) 展示作品鑑賞：グループごとに展示室を移動して鑑賞(45分)
15:00頃	鑑賞後アートスタジオに戻り休憩。グループごと振り返りや感想を共有
15:10～	《ヤセ犬》の鑑賞と制作 全員が目をつぶり鑑賞(20分) / 参加者が希望の素材を選び自分のヤセ犬作りに挑戦(30分) 全員の《ヤセ犬》を並べ、各自の説明や感想を共有
16:00	アンケートを取った後、プログラム終了

当日は参加者と講師が3グループに分かれ、職員と美術館ボランティアが各グループに補助として付き添うかたちをとった。展示室の作品鑑賞では、過去のツアーでも行ってきた、見えない人、見えにくい人、見える人が、言葉を使って対話をしながら作品をじっくりみるというやり方で鑑賞を進めた。まず講師3人が見えない人にどう表現したら伝わりやすいかのデモンストレーションを行った後、グループに分かれ展示室にて、見える人が即興的に皆でみたいと思う作品を選びグループ全員で鑑賞していく。見える人は身体をスケールを使って作品サイズを見えない人、見えにくい人に伝えたり、「○○のような形がいくつ、画面のどの辺りに描かれている」、「○色や○色が使われているが、色調からは冷たさを感じる」など、想像しやすい言葉を用いることを意識して、作品から感じ取ったことを共有した。それを受けて見えない人は疑問や印象を返すなど、参加者同士が話しの中からイメージを広げ鑑賞する。見える人は自分の見たもの、感じた印象を相手に伝えようと言葉を工夫し、さらに反応を得ることで積極的に発言するようになる。見えない人、見えにくい人は様々な感覚を動員して情報を集め、イメージを膨らませることで作品との距離を縮めていく。初めての試みに戸惑う人もいるが、初対面の人同士でも鑑賞が進むうちに徐々に関係性が築かれ、リラックスしてツアーを楽しむ空気が醸成されていくのが印象的であった。次に、視覚以外の感覚も用いて参加者全員が鑑賞した2作品に関して紹介し、活動内容を報告する。

作品① 作品と作家について—モナ・ハトゥム《+と-》(1994/2024年)

本作は2024年9月14日より新収蔵品として公開が始まった、動きを伴う立体作品である。床を削り貫いて建物に直接設置された直径約4mの円形の穴の中に砂が敷き詰められており、砂上の中心に設置されたステンレスのバーが一定速度で回転することで、砂に模様を描いては消していくという動きを反復し続ける(図4)。円の中心から直径に合わせて伸びるバーの半分には、鋸歯状の凹凸がついており、それが砂をなぞることで規則正しい半円状の櫛目文様ができ、平らだった表面に繊細な陰影が生まれるが、やがて凹凸のないバーの半分がやってきて通り過ぎるため再び文様は掻き消され、フラットな砂の面が作られる。

作家のモナ・ハトゥムはパレスチナ人の両親のもとベイルート(レバノン)に生まれた女性だが、ロンドン滞在中の1975年に故郷で内戦が勃発し帰国が困難となった後、イギリスで創作活動を続け、現在も同地を拠点に活動している。自身の経験をもとに世界の対立や矛盾などを様々な形式の作品で表現し国際的評価を受けるアーティストである。《+と-》について作家は、「光と闇、生と死、ポジティブとネガティブなど、正反対でありながら互いに関連する二つの力の相互作用を視覚化したもの」と述べているが⁽⁸⁾、文様が生まれては消える反復が見る者に様々な思いを抱かせ、規則的な動きそのものがテーマに深く関わる作品だといえる。作品に近づくと、ステンレスのバーが砂を掻く際に静かな音を発しており、目を閉じてても何かが動いている微かな気配を感じることができる。ツアーでは視覚や触覚だけではなく感覚を使い、「音」や「気配」、作品の動きを感じ取ろうとする「時間そのもの」も作品鑑賞に取り入れることが期待できるのではと考え、グループごと全員が鑑賞を行った。



左(図4)、右(図5) ツアーにてモナ・ハトゥムの作品を鑑賞。かすかな音を感じたり、作品に使われているものと同じ砂に触れてみる。

当日の鑑賞

グループごとに作品の前で静かに鑑賞する時間をとった後、敷き詰められた砂と同じものを容器に入れておき、手で触れて細かな砂の感触をたしかめてもらった（図5）。また、音の発生源となる作品の動きについては見える人が説明しながら鑑賞した。あるグループではバーの動きが言葉の説明では理解しにくいという見えない人、見えにくい人がおり、その人には両手を広げ身体を軸として回転した時のような動きであることを、実際に姿勢をとってもらい伝えたところ、よく理解できたという感想があった。ツアー後のアンケートでも、作品鑑賞については「見えない部分をヒントをもらいながら実体がつかめるよう説明（してもらうの）がよかった」（視覚障がい者）、「見えない方へ作品を伝えるのは初めての経験でしたが（中略）、細かくお伝えしている間に今迄きちんと見ていなかったと反省しきり」（晴眼者）などの声が寄せられ、参加者同士が互いに工夫しながら本作について伝え合い、鑑賞する時間となったことが窺われた（以降、アンケート抜粋部では、「視覚障がい者」、「晴眼者」等で回答者を表記）。

作品② 作品と作家について—藤浩志《ヤセ犬》（2019年）

プログラム後半で取り上げた《ヤセ犬》は、藤の創作の中でも重要な位置を占め、活動の初期、1980年代から取り組まれている彫刻シリーズであるが、当日使用したのは、ヤセ犬のバリエーション5体からなる実物作品の教材である（図6）。犬たちが「やせている」のは、藤が30代にパプアニューギニアで出会った犬たちが発想の初源になっているからである。パプアニューギニアの奥地の村に住む犬たちは、人間にペットとして飼われ安寧に暮らす存在ではなく、かといって「自ら獲物を捕らえる野犬のような鋭さもない。単にボロボロのボロぞうきんのようなヤセ犬」であったというが⁽⁹⁾、村の特別な儀式の際に、人間と一緒に儀式の獲物である野豚を追う役割を与えられた時だけ、エネルギーに満ちた存在に変身し獲物を罠に追い込む。その姿を目撃した時の強烈な印象が藤にとっての美術の核心となり、ヤセ犬のシリーズが誕生した。当初は木彫作品として作られたが、当館が制作を依頼した《ヤセ犬》は、木彫の他、新聞紙、不用品となったおもちゃやぬいぐるみなど、作家が集めた素材を犬のかたちに組み上げ接着して作られている。こうした素材選択や素材の集め方、作品を制作していく過程なども藤のアーティストとしての活動の在り方や、作品テーマつながっている。当館の《ヤセ犬》は素材ごとに異なる質感を持っており、これらに触れる鑑賞をすることで、参加者にも様々な印象が生まれる作品であると思われた。

当日の鑑賞と制作

当日は鑑賞する作品がどのようなものであるかを参加者全員に明かさず、見える人も目を閉じた状態で触覚による鑑賞を行った。グループごとに机に置いた作品を一点ずつ順番に触れ、それぞれイメージしたことや想像し



左（図6）藤浩志《ヤセ犬》（「どこでも美術館」教材）
右（図7）《ヤセ犬》鑑賞後、参加者それぞれが制作に取り組んだ。

たかたちを共有していった。前半の時間で打ち解けた参加者は、「足と尻尾がある」、「いきもののかたちだ」など、感じ取ったことを話し合い共有していったが、細かな形状の読み取りから、全体がどのような作品であるかについては判断が分かれた。しかし、犬や狼のような動物であろう、素材は木やぬいぐるみでできているという感想のなかに、「胴体がとても細くてやせている」といった指摘があり、さらに、「犬だと思ったけど、飼われていて栄養たっぷりの犬とは違う。震災で被災して、日常とは違う環境でやせてしまっているのでは。それを表すために何かたくさんの瓦礫のようなものの集合でできていると思う」など、作品の意味合いについても考察する意見が出され、限られた時間内での鋭い観察に、他の参加者から感嘆の声があがる場面もあった。

触れた後は《ヤセ犬》を一旦全て片付け、見える人にも視覚的に見せることはしないまま作品解説を行い、次の制作に移った。作品を視覚的に鑑賞しないまま制作に移り、見えない人、見えにくい人も含め各個人が制作を行うことは、おしゃべりとてざわりのツアーでは初めての試みであり、準備の段階で検討を重ねた箇所でもあった。しかし、当日は粘土と新聞紙から各自が使いたい素材を選んだ後、先ほどの感触をたよりにそれぞれがヤセ犬作りに取り組むことが出来た(図7)。制作前に、まず展示室で視覚以外の感覚も使って作品をみることを体験し、そのうえで全員が触覚による《ヤセ犬》鑑賞を行なったことで、スムーズに活動が推移したように思われる。最後は、それぞれの作品を並べて発表しあい、ツアー終了となった。

(2) プログラムを振り返って

5回目の「おしゃべりとてざわりのツアー」は、前半にモナ・ハトゥムの作品により、音を感じる、時間の経過を意識するなど、視覚や触覚以外の感覚も広げる鑑賞を試み、後半で《ヤセ犬》に触れる鑑賞と、さらに制作も盛り込んだことで、かなりボリュームのあるプログラムとなった。また、参加者の構成については、家族、知人同士、個人での参加があり、年齢層も中学生から高齢者まで様々であった。そのため、講師とスタッフの振り返りでは、展示室での鑑賞が始まった当初は、グループによっては緊張した様子で言葉を発していた人、見えない人の中にはほとまどいやこだわりを示す人もあったとの報告も寄せられた。しかしながら、ツアー後に参加者にとったアンケートを確認すると好意的な感想が多く寄せられた。(以下、一部聞き書きのかたちにて記録したものを含め参加者アンケートより抜粋)

「しゃべりやすい環境でとても楽しかった」(視覚障がい者)、

「粘土でヤセ犬を作りながら、難しさを感じつつ、けっこう面白いんだなあ、もっと上手になりたいなあと思った以上に感じました」(視覚障がい者)、

「作品をどう伝えたら、伝わって共感できるだろうと少し緊張して臨みました。同じ班の人の素直な感想に、私自身自由に伝えることができ、とても満足しています。また作品作りがとても楽しかったです。自分の手で触れた情報で作るって、おもしろかったです」(晴眼者)

総じて、プログラムが進むにつれて参加者はリラックスして鑑賞や制作に取り組み、それぞれに他者と過ごす「おしゃべりとてざわり」の時間を楽しんでいたのではないかと思われる。このような「交流」に対する好意的な反応は、他の「バリアフリーギャラリーツアー」に参加した人たちのアンケートからも見出せる。(以下、過去のアンケートより抜粋)。

「あっという間に時間が過ぎる程、楽しい時間を過ごさせていただきました。人によって観点や感覚が違い、目からウロコの様な事もありました。濱田さんが『音を感じる』とおっしゃっていた事も、興味深かったです。」(属性未回答、「おしゃべりとてざわりのツアー」、2021年)

「思った以上に、周りの人達（見知らぬ人達）が気を遣ってくれた。」（「車いすを利用しない方の 車いすで美術館ツアー」、2021年）

「今回初めての参加でした。説明を聞いたり、他の人の感じたことを聞いて、自分が見ていた作品の違った部分や伝わってくるイメージがすごく楽しめました。」（聴覚障がい者、「目で聴くツアー」、2022年）

「バリアフリーが整っているので、ゆっくり安心して観ることができました。（中略）ふだん1人で来ることが多いですが、数人でいろんな話をしながら見ることで発見がありました。」（車いす利用者、「ゆったり車いす鑑賞ツアー」、2023年）

「1人より、ツアーは楽しいです。」（聴覚障がい者、「目で聴くツアー」、2023年）

以上のように、他のツアーに関しても過去のアンケートに感想として多く寄せられるのは、参加してみると他者と交流しながら美術館で時間を過ごし、作品鑑賞することが新鮮で、率直に面白かったという言葉である。ツアーでは、参加者同士が時間を共有する中で、自然と自分と異なる他者の状況を想像し、気を配る場面が表れる。互いを尊重しながら思いを伝え合おうとする時間は、自らの価値判断の枠を押し広げ、無意識にこれが「普通だ」と捉えている視点を見直すきっかけになることもあり、それが人と作品を鑑賞する楽しさにもつながっているといえるのではないだろうか。もちろん、好意的な感想以外に、今後もっと頻繁にこうした機会を設けてほしいという声や、レプリカでも良いので触れる作品を増やしてほしい、利用のしやすさや展示の見やすさを考慮してほしいという、障がいのある人がそれぞれの経験から発した要望や、障がいのある当事者以外の参加者からの改善提案も寄せられた。美術館職員にとっては、こうした意見や感想は、今後のプログラムをブラッシュアップしていく貴重なヒントとなる。その意味で、「バリアフリーギャラリーツアー」というプログラムでは、主催者が何かを一方的に与え、教える側に立つのではなく、参加者や関係者から学び、教わる立場にもなっているといえよう。今後も、プログラムに関わる者同士が情報交換し経験を得ることのできる、フラットで双方向な場を築いていくことを意識していきたいと考える。

このように当館が行ってきた「バリアフリーギャラリーツアー」を振り返ると、事例としたおしゃべりとてぎわりのツアーに顕著なように、美術館で出会う人たちの、美術を介した柔らかな交流を生み出すことが重視されているといえる。施設や設備面の物理的なバリアフリー化を進めるだけでなく、「バリアフリーギャラリーツアー」のその先に、様々な人同士が、互いに異なる背景があることを受け止め、他者への想像力をもちながら、作品との出会いや美術館プログラムを楽しむことがより当たり前になり、日常となっていくこと。それによって、これまでそれぞれの理由で美術館に行きにくい、利用しにくいと感じていた人にも気軽に美術館を利用する広がり生まれていくこと、それが本プログラム全体の目指す方向性であるといえるのではないだろうか。

以上、限定的な報告とはなるが、福岡市美術館における「バリアフリーギャラリーツアー」成立の経緯と概要、事例として2024年に行ったプログラムの内容についてまとめ、筆者自身が関わる中で感じたことや考えたことについて述べた。拙稿は自身も準備段階で試行錯誤し、どういったかたちで行うのがより良いプログラムになるのだろうか、という迷いが多く生まれる中で実施してきた、僅かな体験の中から記述したものである。しかしながら、「参加者も交えて、楽しめることを考えながら、まずはやってみましょう」という〈ギャラリーコンパ〉の講師3人からの力強い言葉や、実際の参加者から受け取った反応は、手探りでプログラムに向き合うなかでも大きな励みとなるものであった。

4. これからの可能性について

最後に、事例としたツアー開催後、2025年11月末に実施した「おしゃべりとてぎわりのツアー」についても簡単に触れておきたい。2024年度のツアーは鑑賞に加え、制作活動も盛り込んだことで、それまでの構成とは

異なるプログラムとなったが、2025年度は改めて鑑賞体験の充実を図ることを考えた。検討の結果、2025年は展示室に作品と関連する資料や素材を用意し、それらに触れながら作品を鑑賞していくかたちをとった。具体的には、油彩画や日本画（屏風）については、普段、館外で行う教育普及プログラムで活用している美術教材も一部使用し、各作品の特色を知るための支持体や画材の見本を用意した。また、複数の構成物からなる立体作品については、主要素であるブロンズ彫刻やその他の立体物について、配置や素材を説明するための触図（触知地図）を館内で新たに作成した。

触図や触れる教材については、他のミュージアムにも先行事例があり、筆者も視察する機会があったが、いくつかの事例に接して感じたのは、触図や触れる教材などは、精巧な物、情報が整理された完成度の高い物を作るだけでは、うまく機能しないのではないかとということだった。つまり、どういった場面でそれらが必要なのか、活用して何を伝えたいのかという、使う状況と目的についても考慮することが重要であり、物として整ったかたちや触れられる物があるということだけでは、触れる人の「鑑賞の楽しみ」につながりにくい面があるのではないかとということである。

それを踏まえ、2025年度のツアーでは作品に近い場所で触れる資料や素材を全員で共有し、その場で用いながら鑑賞することで、参加者同士の話の中で自然と情報の補いが起こることを期待した。当日、資料を示す際には教育普及担当職員からの説明も必要であったが、参加者からは、触れた感触や得た情報を作品と結びつけ、参加者同士の会話に反映している様子が見受けられた。実施後には触図や資料の導入について、見えない人、見えにくい人だけではなく見える人にとっても、絵肌や画材などに直接触るのは新鮮であり、楽しみながら作品への理解が進んだとの感想を得ることができた。また、こうした触れられる資料はツアー時だけではなく、コレクション展に常時あると良いのではないかとこの反応が参加者からあったのも、重要なフィードバックだったといえる。

過去の参加人数を見ても分かる通り、「バリアフリーギャラリーツアー」は1回ごとの人数規模が大きなプログラムではなく、プログラムによっては定員に満たない回もある。これはツアーの開催情報が効果的に当事者に届かず、需要を喚起できていない面ももちろんあると思われるが、年に1回行う、その日限定のプログラムとしている現状のやり方が、障がいのある人が望む美術館利用のかたちとは距離が離れているためであるのかもしれない。例えば2025年度に試みた触れる資料や触図などを充実させ、ウェブサイト上での周知や、関わる職員と美術館ボランティアなどの人的研修を経たうえで、コレクション展示の通年の作品鑑賞ツアーとして、希望に応じて開催できるようにしていくといったことも、美術館のアクセシビリティ向上のために有用であろう。既存の活動の応用でカバーできるものについては柔軟に対応を試みつつ、取り組みの可能性を検討していきたい。今後も、これが最適解である、というプログラムの定型を固めるのではなく、当事者の声を聞きながら本事業を継続していきたいと考えている。

（たかだるみ 福岡市美術館 教育普及係長）

<註>

（1）福岡市美術館ウェブサイト内、教育普及の「活動方針」として掲載（www.fukuoka-art-museum.jp/education/ 2025年3月7日時点）

（2）福岡市美術館ブログ「やってみました！バリアフリーギャラリーツアー」（2020年9月30日公開。www.fukuoka-art-museum.jp/blog/12536/ 2025年3月7日時点）

「福岡市美術館の『バリアフリーギャラリーツアー』を取材した（上・下）」西日本新聞（2020年11月17日、同18日付、各朝刊）。

（3）1984年に開館した彫刻に触れ鑑賞できる私設美術館、「ギャラリー TOM」（東京）の活動や、公立館としての最初期の試みであった兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）の展覧会（「美術の中のかたち―手で見

る造形」展、1989年より継続的に開催）など。

(4) 展覧会「流動する美術—VII 視覚を越えて・巡りて 日高理恵子/光島貴之の絵画」(会期：2001年1月25日～3月25日、主催：福岡市美術館)。展示は日高理恵子と、視覚障がい当事者である光島貴之、2名の作品展であった。

(5) 鑑賞プログラム「第19回国民文化祭・ふくおか2004 つなぐ！ひとまちアートフェスティバル～障害のある人たちの表現活動から」(2004年8月8日及び21日、視覚障がい者のためのギャラリートークを福岡市美術館近現代美術室にて行う。春日市などが主催し当館協力事業として実施)／「エイブル・アートジャパンによる『言葉による美術館賞ワークショップ』」(2005年2月6日、福岡市美術館常設展示室にて行った視覚障がい者と晴眼者が参加した鑑賞会。〈NPOエイブル・アート・ジャパン〉主催事業に協力する形で実施)。『平成16年度 福岡市美術館 活動の記録』p.22参照。なお、〈エイブル・アート・ジャパン〉主催の鑑賞ワークショップは2005年2月6日の福岡市美術館の他、福岡アジア美術館でも同年9月4日に開催された(松尾さち氏提供資料による)。

(6) 「対話型鑑賞」という語は、狭義にはニューヨーク近代美術館で1980年代半ばに開発、展開された美術鑑賞教育メソッドであるVTC (Visual Thinking Curriculum) と、その発展形であるVTS (Visual Thinking Strategies) が1990年代に日本に紹介される際に、訳語として造られ、使われるようになった用語である。しかし日本では、厳密にVTCやVTSに基づくものではない、参加者の対話やコミュニケーションをベースにした鑑賞についても、広い意味で対話型鑑賞と呼ぶことが発生し、定着しつつある。この状況を把握したうえで、本論では広義の意味で使用する。現在、福岡市美術館では、開館日の午前と午後に行う定時のツアーと、希望に応じて学校や一般団体等を対象に行うツアーの、ふたつのギャラリーツアーを美術館ガイドボランティアが担う形で実施している。これらのギャラリーツアーでは、ガイドボランティアがファシリテーター(鑑賞を巡る対話の整理・進行役)となり、参加者へ発話を促し、対話を通じ鑑賞を深めていく対話型鑑賞をベースにしたツアーを行っている。また、〈ギャラリーコンパ〉では、対話型鑑賞という語の成立ちと使われ方を考慮し、自分たちの活動紹介については「対話を通じた鑑賞」、「対話による鑑賞」という説明や表現の仕方を採用している。

(7) 「第6回 21世紀の作家—福岡 違和感を飛び超える術！藤浩志展」(会期：2005年1月5日～4月3日、主催：福岡市美術館)

(8) 福岡市美術館『季刊誌 エスプラナード218号』、2025年1月1日発行、pp. 4- 5参照。作品、《+とー》は、1994年に福岡市内の天神地区を中心に開催されたアート・プロジェクト、「ミュージアム・シティ・天神 '94 [超郊外]」で初めて広く公開された後、世界各地でバリエーションが発表されてきたものであり、30年を経て福岡市美術館に恒久設置のかたちで新たに制作された。

(9) 藤浩志 『「野豚を追うヤセ犬」より1987年パプアニューギニアにて』、作家のウェブサイトより引用。(www.fujistudio.co/yaseinu 2025年3月20日時点)

<参考文献>

A 相良啓子、広瀬浩二郎『「よく見る人」と「よく聴く人」 共生のためのコミュニケーション手法 (岩波ジュニア新書 975)』(岩波書店、2023年)

B 古賀弥生『【研究ノート】文化政策の潮流と社会包摂型文化芸術事業の実践』(『地域共創学会誌vol.8』、九州産業大学、2022年) pp.51-69

C (著) 鈴木智香子、伊東俊祐／(編) 米津いつか『ミュージアムの事例(ケース)から知る！学ぶ！合理的配慮のハンドブック』(PDF版)、(独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター、2024年)

D 『劇場・音楽堂等 アクセシビリティ・ガイドブック』(PDF版)、(全国公立文化施設協会、2020年)

E (編) 中西美穂、一般社団法人HAPS『公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための

コア人材形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ（報告書）』（一般社団法人HAPS、2024年）

F （編）文化庁×九州大学 共同研究チーム『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』（PDF版）、（九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、2019年）

G 遊免寛子「兵庫県立美術館の教育普及史—兵庫県立近代美術館時代—」（『兵庫県立美術館研究紀要vol.11』、兵庫県立美術館、2017年） pp.50-60

対象者を軸にたどる福岡市美術館の「教育普及活動」の 変遷：①1979-1994

崎田明香

本稿では、福岡市美術館（以下、当館）の「教育普及活動」が、開館から約46年の中でどのように変化してきたかを、活動の「対象」に視点を置いて、明らかにしていく^(註1)。

本来、美術館の「教育普及活動」は、活動の主体となる利用者の存在があって、初めて成立するものである。現在、当館ではさまざまな活動を実施するために、利用者となる「対象」を柔軟に捉えながら枠組みを設定し、活動内容を考えている。この方法は、すべての人を対象とする美術館の「教育普及活動」の理念とも密接に関わるものだが、46年を振り返ってみると、この理念が当館の中で認識され、共有されたのは、開館からしばらくしてからであったことが分かってきた。ここでは、利用者の変遷、狭義には当館の「教育普及活動」が「対象」として据えてきた人々の変遷を軸にしなが、当館における「教育普及活動」の歴史を振り返っていきたい。

具体的には、1979年から現在までの約46年を、教育普及活動の「対象」の変化から4つに分類し、考察していく。4つの分類は以下の通りである。年数のまとまりが一定ではないが、教育普及活動の中で「対象」の位置付けが変わり、活動の理念が変化した年を起点に筆者が設定したものである。よって、当館が正式に規定したものではないことも付記しておく^(註2)。

【第1期】1979年～1989年

【第2期】1990年～1994年

【第3期】1995年～2012年

【第4期】2013年～現在

ここからは、順を追って、この4つの期間の当館の「教育普及活動」について具体例を提示しながら考察していくが、本稿ではまず【第1期】【第2期】について論じていく。

【第1期】1979年～1989年

1979年11月3日に当館は福岡市中央区にある大濠公園の中に開館した。初代館長の劔木亨弘は参議院議員から文部大臣を務めた人物であり、開館記念式典の写真には、来賓を含めた多くの人が館内を埋め尽くすように、開館を祝う様子が残されている（図1）。開館当時、学芸課には3つの担当が設けられた。古美術担当、近現代美術担当、普及広報担当である。古美術、近現代美術は、所蔵品に即した専門性をもった学芸員が配置され、現在も同様の名称で学芸員が配置されている。一方、普及広報担当は、その名のとおり、美術を一般へ普及し、広報することを担当したが、同学芸員らは展覧会企画も担当業務としており、あくまで美術史を専門とする学芸員が「普及広報」も担っていたというのが実情だったのである。

開館に向けて制定された「福岡市美術館マスタープラン」には、設置目的を「…市民の要望を満たしながら、今日の情報化社会の造形文化を推進する近代的な美術館を目指しています」としたうえで「普及活動」について、以下のように記されている^(註3)。



図1：1979年11月2日 福岡市美術館開館記念式典の様子（一般公開は11月3日から）

市民の美術に対する関心をさらに高め、市民がより積極的に美術文化を創造して行く母体となるため、今日の情報化時代にふさわしい活発な普及活動を展開する。

- ・美術センターとしての内外の美術情報資料の提供
- ・教養・実技に関する各種の美術講座
- ・各種の美術図書の刊行
- ・学校教育と結びついた児童生徒のための普及活動
- ・美術館友の会活動の推進

マスタープランにも複数の項目が示され「普及活動」にも力を入れていたことが分かる。当時は大きな柱として、ボランティア活動、映画会、そして「教養講座」「実技講座」と呼ばれる市民向けの講座が開講されていたことが福岡市美術館の年報に記されている^(註4)。

ボランティア活動については、開館前の1976年から募集を開始しており、1974年に先んじて開館した北九州市立美術館でのボランティア導入を参考にしたと伝わるが、当時のボランティア募集に関する資料は残念ながら残っていない。筆者が確認した最も古い資料は1986年の第3期ボランティア募集要項であるが、1970年代後半から80年代の「教育普及活動」の「対象」の設定が、この応募資格にもよく表れている。それには「福岡市及び福岡市近郊在住の女性（年齢不問）で毎週1日ないし2日定期的に参加できる人（傍点筆者）」とある。北九州市立美術館も初期のボランティアは女性限定であった。同館の活動を参考にボランティア活動を構築したことを鑑みれば、資料さえないが、当館でも第1期（1976年）、第2期（1978年）についても募集は女性限定だったと推察できる。子育てが一段落した主婦など、昼間に時間があり、経済的にも余裕がある女性がボランティア

の主たる「対象」とされていたことが分かる。なお、ボランティア活動については、本論では詳しく扱わないが、現在まで継続的に行われている「教育普及活動」の柱のひとつであることは強調しておきたい^(註5)。

「教養講座」と「実技講座」の開催

次に、市民向けの講座に注目したい。1970年代から1980年代は、地方で公立の美術館が次々と計画され、建設ラッシュを迎えた時期であり、市民への質の高いサービスを提供する新しい時代の美術館像が示された時期であった。その時代に、美術館の教育普及活動の中心に据えられたのが「教養講座」「実技講座」と呼ばれる市民向けの講座である。いずれも、一般市民の文化的教養を深める目的が中心に据えられ、講座の対象とされたのは、美術に関心があり、一定の文化的教養を持ち合わせた「大人」であったと考えられる。

当館でも、開館当初から「教養講座」と「実技講座」が開催されている。前者については、大学教授や学芸員等が担当する、いわゆる美術史の講義であり、その分野の著名な大学教授等が講師を担当していたことが年報にも記されている。第1回の「教養講座」は1980年2月16日に開催され、講師は九州大学文学部助教授（当時）の菊竹淳一が務めた（図2）。同日、第1回「実技講座」も開催され、彫刻家の小田部泰久を講師に、石膏デッサン教室が行われた（図3）。当日の写真からは、多くの「大人」が熱心に講座に参加していたことがわかる。同様の形式での講座は、この後も継続して開催されていくことになった。



図2：第1回 教養講座 九州の仏教美術について（講師 九州大学文学部助教授 菊竹淳一） 1980年2月16日



図3：第1回 実技講座 石膏デッサン教室（講師：彫刻家 小田部泰久） 1980年2月16日

なお、この時期の当館の「教育普及活動」について一つ補足しておく、開館の1979年から1994年までの資料がほとんど残されていないことが分かった^(註6)。「教養講座」「実技講座」に関しては、図2、3で掲載した第1回のみ各講座の写真が撮影されていたものの、他の記録は写真を含め残っていない。一方、同時期の展覧会については、記録写真を含めて多くの資料が保存されていた。この点について、当時、学芸課に勤務していた学

芸員2名に筆者が聞き取りをしたところ、1名は「この時代の学芸員は展覧会を主たる業務と捉えており、各人が担当した展覧会記録は残すという意識があったが、普及広報活動（当時）については、重要度が低い業務と捉えていたことは否めない」と述べた。一方で、もう1名は「普及広報活動については、開館当初から学芸員の業務として認識されて」おり、学芸員が無関心であったことは否定し、記録の有無については当時の担当者の裁量に因るとした^(註7)。

建築のゾーニングと教育普及活動

当時の日本の美術館における「教育普及活動」を美術館の建築的側面から論じるのは、教育普及草創期から東京都目黒区美術館で美術館教育に携わってきた降旗千賀子である。降旗は1970年代後半の美術館建築のハード面に注目し興味深い指摘をしている。降旗によれば、1970年代から80年代に開館した多くの公立美術館において、「美術館自体のコンセプトが、来館者にゆったりとした鑑賞を促し美術館での滞在時間を広げ、喫茶やレストラン、ビデオ鑑賞、くつろぎ、美術図書閲覧、実技体験など、作品展示以外のサービス機能が拡大された」という^(註8)。それによって、来館者は「美術を見せていただく」、美術館側は「見せてあげる」という上位下達の間から、「来館者がいかに美術館を楽しむか」という、来館者側から美術館の利用を考えるという転換を生んだと述べている。それは、美術館における「教育普及活動」の必要性が認識され始めた時期とも重なっている。降旗は次のように続ける。

実技が行われるスペース＝実技室は、建築サイドが描く美術館のゾーニングでは、展示と極力離れた位置に作られました。実技は汚れる、埃がたつ、うるさい、などを理由に展示機能とは最も離れたところに実技を行う部屋がつけられます。……こうした美術館建築の常識として設営されたゾーニングによって、教育普及活動が決められるという現象があったことも否めません。建築によって、行う内容が決められてしまうということです（傍点筆者）^(註9)。

降旗によれば、当時の美術館建築のゾーニングから、教育普及活動の位置付けが見えてくるということになる。その仮説に沿って、当館について検証してみたい。当館の設計者は、ル・コルビジェに学んだ、日本のモダニズム建築の巨匠として知られる前川國男である。前川は1975年開館の東京都美術館（新館）や、1976年開館の熊本県立美術館など、国内でも数多くの美術館建築を手掛けている。

1979年、開館当時の当館館内図を見ると、1階に「教養講座室」「版画印刷工房（傍点筆者修正）^(註10)」「実技講座室」が置かれていることが分かる（図4）。図面から分かるように、3部屋ともにロビーや入館者の出入口からは死角になるところ、つまり最も奥で人目につきにくいところにある。さらに言えば、「美術史などの継続学習講座や少人数の講演会・映画会などの他、ビデオ制作室としても使用」するための「教養講座室」は、3部屋のうち最も手前に、「洋画・日本画・版画・彫刻など、幅広く実技指導講座を開催」するための「実技講座室」が最も奥に配置されている^(註11)。

一方、展示室は1階と2階に置かれた。2階は講座室等と図面上の反対側の位置に配置され、館内で互いに最も遠い位置にある。1階もロビーを挟んで離れた位置にあり、来館者は1階、2階のいずれの入口からも、3つの講座室等を見ることなく展示室へたどり着けるような導線が施されている。

実技講座では、画材の臭いや、埃などで汚れることは避けられず、そういった教育普及活動のための部屋を人目につかない場所、つまり展示室から最も遠い場所に設置するという降旗の指摘は、当館にも当てはまっている。

また、1970年から80年代に開館した公立美術館のうち、板橋区立美術館（1979年開館）や、埼玉県立近代美術館（1982年開館）、世田谷美術館（1986年開館）なども、開館当時、展示室とは異なる階や、展示室から

【第2期】1990年～1994年

当館では、「大人」を対象とした「教養講座」や「実技講座」は、1989年まで継続して実施された。その内容と対象に変化が訪れたのは1990年であった。

こどもを対象とした活動の開始

1990年から「夏休みこども美術館」という、「こども」を対象にした所蔵品によるコレクション展が開始される。「こども」を対象にした展覧会の企画意図については、当時の資料がほとんど残されていないが、当館で初の教育普及の専門学芸員となった鬼本佳代子によると「青少年（子ども）に対するプログラムがない→専門家が欲しい」という当時の学芸員のメモが残っていたという^(註12)。学芸員たちがこどもを対象にした活動への意義を認識する一方で、具体的な方法が定まらず、戸惑っていたことが想像できる。なお、先に紹介した開館時のマスタープランに「学校教育と結びついた児童生徒のための普及活動」という項目もあるように、学校団体等でこどもが展覧会を観覧する機会があったかもしれない。しかし、当時はまだ「こども」を積極的に美術館の利用者として捉えるほどには、「教育普及活動」の理念が広がっていなかったと考えられる。

そのような状況の中、当時の学芸員たちが、自分たちが最も経験のある展覧会という方法を選び、所蔵品展「夏休みこども美術館」を企画したことは理解できるだろう。さらに「夏休みこども美術館」は学芸員全員が持ち回りで担当するという強制力を持った企画だったという。今回、「夏休みこども美術館」開催が決定された背景やプロセスについては詳細を明らかにできなかったが、大きな転換点であったことは確かであり、更なる調査が必要だと考えている。

「夏休みこども美術館」について注目すべき点は、この展覧会によって当館の「教育普及活動」に「こども」という新しい対象が加わったことである。全国的にも1989年には横浜美術館で「子どものアトリエ」プログラムが開始されるなど、この時期を境に「こども」が美術館の利用者として意識され始め、同時に教育普及活動の「対象」とされる動きがあったようだ。それを示すように、1985年におかざき世界子ども美術博物館、1993年には浜田市世界こども美術館、と館名に「こども」と付いた美術館も開館している。当館で「夏休みこども美術館」が開始され、教育普及活動の対象として「こども」を謳うようになったことについても、おそらくこのような美術館を取り巻く状況が影響していたのではないかと考えられる。

「こども」を対象にした活動は「夏休みこども美術館」だけにとどまらず、当館では同展に合わせて「こども造形教室」が新しく開講された。当館の季刊誌「エスプラナード69号」（1992年7月15日発行）に掲載された募集案内には「子どもと保護者がいっしょにあるいは別々に絵や立体造形で本物そっくりの作品を作ります」とある。応募資格は市内在住の小学生1名と保護者（成人）1名で、定員は小学生20名（1・2年生7名、3・4年生7名、5・6年生6名）、保護者20名の合計40名20組とされた。講座は夏休み期間中の午後1時から4時に合計4回実施され、実費として4,000円が徴収されている。常設展を鑑賞するコースや、保護者のための鑑賞コースも設けられており、美術館の教育普及活動をこどもとその保護者へ広げようとする意図が読み取れる。

一方で「夏休み、親子で楽しみ、かつまた美術の勉強もする」という内容説明もあり、「美術の勉強」が示すのは、当時の「教育普及活動」が学校の教育活動を手本にしていた可能性である。

対象とする「大人」の拡大

当館の「教育普及活動」の変化は「こども」への対象の拡大だけではなく、「大人」の意味する範囲も広がっていく。その前提として挙げられるのは、1990年代に文部省が目指した「生涯学習社会の実現」である。この当時は、社会教育施設や、市民講座、図書館・博物館活動を推進し、美術館を含む文化施設の役割が見直されていった時期であった。

当館では、1991年に、大人を対象としていた「教養講座」と「実技講座」の名称が、それぞれ「福岡市美術館セミナー」「福岡市美術館アトリエ」と変更されている。当時の資料には、対象とする「大人」について、以下のように明記されている^(註13)。

福岡市美術館セミナー'91 (傍点筆者)

1. “初心者の方々のためのわかりやすい美術史入門”を最大の目的として、「福岡市美術館セミナー」を開設する。
2. このセミナーは、年間を通して1つのテーマで、10回開催する継続講座である点が特色。内容には^(ママ)巨匠シリーズで、あわせてその周辺も紹介しながら、わかりやすく美術史を理解していただき、美術館への親しみを増してもらおうのがねらい。
3. 今回は、日本の古美術の素晴らしさを知ってもらいたいために、雪舟や利休、光琳、柿右衛門、歌麿等の巨匠を中心とした「日本美術への招待」というテーマとした。
4. 1992年度は、“印象派の巨匠”とか“20世紀の巨匠”といったテーマで、所蔵品とからめながら、よりわかりやすい親しみのもてる、多くの市民の方に参加してもらえるセミナーにしていきたい。

「初心者のため」「わかりやすい」「親しみのもてる」等の言葉が繰り返し使われている。ここから読み取れるのは、開館から実施していた講座を、より多くの市民が享受できるものにするために、美術館のもつ敷居の高さを下げているという態度であろう。

他方で、「古美術の素晴らしさを知ってもらいたいため」という表現や、何度も登場する「巨匠」という語が象徴するように、専門的で高尚な美術史の世界を市民に教えてあげようという、上から物を見るような表現が散見される点は見逃せない。美術史的な知識を深めることは現在でも教育普及活動のひとつではあるが、当時はそれが主たる目的とされていたことがよく分かる。

時期を同じくして名称を変更した「福岡市美術館アトリエ」については以下のように説明がなされている。

福岡市美術館アトリエ'91 (傍点筆者)

1. 市民の方々の中でも近年、美術の鑑賞だけでなく、創作活動にも励む方が増えています。本館も、それらの方々のために、開館以来、「実技講座」を実施(年間4～5講座)して好評を博しております。「福岡市美術館セミナー」の新設にともない、「福岡市美術館アトリエ」と改称し、より一層の充実を図ろうとするものです。
2. 特に、市民の文化サークルや、カルチャーセンターなどには開講されていない各種の版画教室を中心に、さらに昨年に引き続いて夏休み子ども美術館の一環としての「子ども造形教室」にも力を入れていきます。

多くの市民が享受できるよう、講座の対象者を広げていこうという点は「福岡市美術館セミナー」の名称変更と基本的な考え方は同じであろう。ここで注目するのは「カルチャーセンター」という言葉である。1980年代後半から1990年代前半にかけて、日本の経済的成長を背景に「カルチャーセンター」が隆盛し、美術館に対する知的興味や関心が高まっていたことを、愛知教育大学名誉教授のふじえみつるは次のように指摘している。

カルチャー・センターなど民間の教養講座で美術を学習する人たちも増え、美術館での鑑賞に対する意欲や関心も高まってきた。また、海外旅行をする日本人が増え、欧米諸国の開放的でサービスの行きとどいた「ミュージアム」を体験した人たちから、それに比べて閉鎖的な日本の美術館に対する不満も出てきた^(註14)。

季刊誌「エスプラナード62号（1991年5月15日発行）」で、「福岡市美術館アトリエ」では「一般には学習するのが難しい版画やヌードによる人物画を中心に計画します」と紹介されている。ふじえの指摘に沿えば、当時、市民の間でカルチャーセンターに代表されるような教養講座、実技講座のブームがあり、当館を含めた国内の美術館も、そのような社会の状況に影響を受けた可能性は否定できないだろう。さらに、当館では、「一般には学習するのが難しい版画やヌード」等の実技を学ぶ機会として、同アトリエが特徴づけられており、カルチャーセンターとの違いを明確にしなが、実技講座の提供を志していたと考えることもできる。ただしこの点については、当時の学芸員の証言が異なっており、断定するにはいささか気が早いようにも感じる。いずれにしても、「福岡市美術館セミナー」も「福岡市美術館アトリエ」も大変人気があり、定員を大幅に超える応募があったことは分かっている。

講座名称の変更と内容の現状維持

しかしながら、名称が変わり、対象とする「大人」の範囲が広がった一方で、講座の内容そのものが変化したのかについては疑問が残る。つまり、「教養講座」「実技講座」から「福岡市美術館セミナー」「福岡市美術館アトリエ」と名称は変わったが、その内容は従来通りで変わっていないのである。

例として、1990年の「教養講座」と1993年の「福岡市美術館セミナー」の応募条件を比較してみよう。「教養講座」は応募資格が市内在住（又は在勤）の18歳以上、合計4回で定員50名、費用は無料だが、「福岡市美術館セミナー」は応募資格が「福岡市及び福岡市近郊に在住の方で継続して10回受講できる方」になり、定員は250名に拡大、テキスト代として費用3,000円になった。また、1990年の「実技講座」と1991年の「福岡市美術館アトリエ」だが、対象はいずれも「市内在住（又は在勤）の18歳以上の方、ただし学生を除く」と同じで、実費は2,500円から3,000円～6,000円に値上がりしている。また、どちらも各分野の一流の講師から、美術史や実技を学ぶという内容はそのまま継承されている^(註15)。

「教養講座」については「福岡市美術館セミナー」になったことで、定員が50名から250名へと拡大し、4回から10回へと回数が増え、「継続して10回受講できること」という条件が加わった。定員の増加だけを見れば、対象者の拡大と捉えることもできそうだが、他方で10回の継続受講という条件は対象者を狭める可能性もあっただろう。いずれにしても応募資格を美術館が厳しく規定していることから、美術館の「教育普及活動」の主体が、利用者ではなく美術館側にあることも暗に示されている。更に言えば10回の継続受講を条件に、一流の講師の講義をうけるという点で、特に同セミナーの受講者は、未だ教養ある大人に留まっていたように思えてならない。この変更を見る限りでは、対象とする「大人」を、真に多くの市民へと拡大したとは言い難いのではないだろうか。しかしながら、当時の社会状況や、「教育普及活動」の理念に対する理解がまだ充分でなかったことを踏まえれば、当館の「教育普及活動」が次の局面へと展開していく過渡期だったと位置付けられるだろう。

このように、【第2期】とした当館の1990年から1994年の「教育普及活動」を特徴づけるのは、対象の広がりである。大人については、教養豊かで学問的な経験が高い者だけではなく、美術の初心者を含む層へと対象を拡大しようとし、新たに「子ども」が活動の対象として加わった。また、その背景にあった、1980年代の日本社会の経済的発展やカルチャーセンターに代表される社会教育、生涯教育のブームについても、切り離して論ずることは出来ないだろう。

本稿では、当館の「教育普及活動」の歴史を対象者の変遷をたどりながら、1979年から1994年までを二つの時期に分けて考察してきた。社会教育施設である美術館が、その社会的使命を果たすために、移り変わる時代の背景を色濃く反映しながら、「教育普及活動」を発展させていった経緯が明らかになった。しかしながら、当時は「教育普及活動」の理念が曖昧であり、美術館から市民への上意下達の構造が残る時代であったことも浮かび上がってきた。

今回、紙幅の関係で論じる事ができなかった1995年以降の当館の「教育普及活動」については、別の機会に継続して論じることにしたい。

註

1. 開館当時、当館では「教育普及活動」ではなく「普及活動」と呼ばれ、現在の「教育普及」が示す概念と同義ではなかったことは補足しておく。開館に向けて策定されたマスタープランでも「教育普及」ではなく「普及活動」という用語が使われている。また、現在の学芸課には、筆者が所属する「教育普及」係があるが、当時は「普及広報」担当とされた。ただし、本論では混乱を避けるために、当時「普及活動」と呼ばれていた事業についても、基本的に「教育普及活動」として記述した。
2. いつから「教育普及」という用語が当館で使われたかは断定が難しい。残された資料や、元学芸員の証言から、おそらく【第2期】から【第3期】前半（1990年から1996年）頃ではないかと推察される。
3. 「福岡市美術館年報 No.1 昭和54—57年度」福岡市美術館、1983年3月31日、p.6。
4. 前掲書「福岡市美術館年報 No.1 昭和54—57年度」、pp.33-34。
5. 福岡市美術館ボランティアの歴史については以下に詳しい。鬼本佳代子「福岡市美術館のボランティア活動についての一試論」、『福岡市美術館研究紀要第4号』、福岡市美術館、2016年、pp.7-13。
6. 1979年から1989年は年報に書かれた講座等の日付や参加人数が記録されているがその他の資料はない。1990年から1994年は当時の「普及活動」に関する資料が全く残っていない。
7. 1980年代に福岡市美術館に学芸員として勤務していた2名に、2025年12月に筆者が対面で質問し回答を得たもの。
8. 降旗千賀子「美術館の教育普及活動のこれまで—ハード面からの視点で—」、『全国美術館会議 第19回学芸員研修会報告書「教育普及再考—美術館の利用者とミッションをつなぐために—」』、全国美術館会議、2005年、p.23。
9. 降旗千賀子、前掲書、pp.23-24。
10. 当時の館内図に「版画印刷工場」とあるが、正しくは「版画印刷工房」の誤り。
11. 諸室の説明については、前掲書「福岡市美術館年報 No.1 昭和54年度—57年度」、p.11を参照。
12. 鬼本佳代子「福岡市美術館〈夏休みこども美術館〉の歴史の変遷とその効果について」、『福岡市美術館研究紀要第1号』、福岡市美術館、2013年、pp.34-45。
13. 参照した資料は、ワープロで活字化されたもので、当館の資料室に保管されていた。当時の学芸員に確認したところ、おそらく決裁文書に添付された資料と考えられる。
14. ふじえみつる「美術教育を軸とした学校と美術館の連携について」、『愛知教育大学研究報告46（教育科学編）』、愛知教育大学、1997年、p.155。著者名は同論文における表記に従った。
15. 応募資格の内容は福岡市美術館の季刊誌「エスプラナード56号（1990年5月15日発行）」p.7、「同65号（1991年11月15日発行）」、p.7、「同74号（1993年5月15日発行）」p.7を参照した。

仏教の講演や講義を行い、数多くの禪に関する著作を英語で発表した。代表的著作にZen and Japanese Culture (『禪と日本文化』)がある。昭和二十四年(一九四九)、文化勲章受章。

(24) この「去年塩原家茶」については本稿49頁(本書影印本下巻・一七―二〇頁)「木日庵歳暮の茶 十二月十四日正午」に詳しく記録されている。

(25) 鈴木宗保(一八八二―一九八〇)のことか。号は日庵。茶人(裏千家)。

(26) 乾豊彦(一九〇七―一九九三)のことか。実業家。旧姓は高橋。五代・乾新兵衛。乾汽船株式会社社長、広野ゴルフ倶楽部理事長、関西ゴルフ連盟理事長、日本ゴルフ協会(JGA)名誉会長など。

(27) 現在、福岡市美術館所蔵の伝・尾形光琳《金銀泥梅花図》(所蔵品番号6―B―35)。金泥と銀泥で梅の絵を描いた作品で、「伊亮」印(朱文田印)が捺され光琳の筆と伝える。そして光悦風の書体で「誰言春色従東到/露暖南枝花始開」という和製漢詩(『和漢朗詠集』所収)が書かれている。

(28) 酒井億尋(一八九四―一九八三)。荏原製作所専務。昭和三十七年(一九六二)より同社長を務めた。島山一清の長女・睦の夫。

(29) 肥後和男(一八九九―一九八〇)。日本史学者(古代史)。昭和八年(一九三三)、東京文理科大学(後の東京教育大学)助教授、同十八年(一九四三)、同学教授。同二十一年、公職追放。同二十七年、東京教育大学(現在の筑波大学)教授など。著書に『日本神話研究』(河出書房、昭和十三年)など。

(30) 芳賀幸四郎(一九〇八―一九九六)。日本史学者(中世文化史)。昭和二十五年(一九五〇)東京文理科大学(後の東京教育大学)助教授、同三十九年、同学教授。同四十六年(一九七二)大東文化大学教授。著書に『東山文化の研究』(河出書房、昭和二十年)など。

(31) 谷口吉郎(一九〇四―一九七九)。建築家。昭和五年(一九三〇)、東京工業大学(現在の東京科学大学)助教授。同十八年同学教授。出光美術館、東京国立博物館東洋館、東京国立近代美

術館など多くの建築の設計を手掛けた。

〈主要参考文献〉

『人事興信録 第二十五版』(人事興信所 昭和四十四年)

『昭和人名辞典Ⅲ』(日本図書センター、平成六年)

『日本人名大辞典』(講談社、平成十三年)

『角川茶道大事典』(角川書店、平成十四年)

『新訂増補 人物レファレンス事典 昭和(戦後)・平成編』(日外アソシエーツ、平成十五年)

谷見『近代数寄者の茶会記』(淡交社、平成二十二年)

- 明治大学工学部建築学科、神奈川大学工学部建築学科で教授を歴任。昭和三十三年（一九五七）、日本芸術院賞受賞。同三十八年、紫綬褒章受章。
- (6) 谷川徹三（二八九五—一九八九）。哲学者。法政大学文学部哲学科教授、同学総長などを務めた。昭和六十二年（一九八七）、文化功労者。
- (7) 正しくは山田健太郎（二八九七—一九八〇）。号は瓢庵。美術商。昭和十八年（一九四三）、東京美術倶楽部の監査役、昭和三十四年（一九五九）、同第六代社長、同取締役会長。昭和五十二年（一九七七）、同会長辞任、相談役。父、保次郎の後を継ぐ。
- (8) 本書影印本の「人物略解説」七三九頁に「重松 柳瀬文化会館専務理事」とある。
- (9) 本書影印本の「人物略解説」七四一頁に「谷口隊長 陸軍大佐（柳瀬山莊駐屯）」とある。
- (10) 秋山光夫（二八八八—一九七七）。美術史学者（日本近世絵画史）。昭和十七年（一九四二）、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）学芸課長。同二十年、日本美術協会専務理事。同三十年、金沢美術工芸大学教授、その後学長を務めた。著書に『日本美術論攷』（第一書房、昭和十八年）など。
- (11) 田中仙樵（二八七五—一九六〇）、本名は鼎、別号に三徳庵。茶道家。裏千家の前田瑞雪（二八三三—一九一四）、十三代家元・圓能齋鉄中宗室（二八七二—一九二四）に師事。明治三十一年（二八九八）、大日本茶道学会を創設した。
- (12) 東京の料亭「八百善」の八代当主・栗山善四郎（二八八三—一九六八）のことと思われる。
- (13) 「松榮主任」と読めるが、不明。
- (14) 菅原通濟（二八九四—一九八二）、本名は通濟。実業家。日本初の自動車専用道路の建設、鎌倉山の別荘地開発やバス路線整備、江ノ島電鉄の買収と近代化など多岐にわたる事業を展開。さらに松竹大船撮影所の誘致と周辺開発にも関わるなど多方面に活躍した。古美術蒐集もよくし、自邸のあった鎌倉常盤山の名を冠した財団法人常盤山文庫を設立。コレクションは現在、東京国立博物館等の寄託先で随時公開されている。

- (15) この「子息」は菅原通濟の長男・壽雄（一九三〇—二〇〇八）あるいは次男・春雄（一九三〇—二〇一九）と考えられる。壽雄は父の没後、常盤山文庫の二代目理事長、春雄は三代目理事長を務めた。
- (16) この「根津美術館満田君」とは、陶磁器研究者・満岡忠成（一九〇七—一九九四）のことか。根津美術館のご教示によると、昭和十六年（一九四一）十月より同館での勤務歴があるとの情報が得られている。
- (17) 井上恒一（一九〇六—一九六五）。中国文具・書画、料理店「晚翠軒」店主。
- (18) この「鼠志野山の尾」は、本書影印本上巻・一七一—一七三頁「熱海夜雨莊於松永別野小田原二続く 昭和十二年一月四日」に記載の「志野 銘鈍翁、山の庵」のことと思われる。その中で本碗（現在、個人蔵）は、政齋が「粉引茶碗」（現在、福岡市美術館蔵《粉吹茶碗銘「十石」》（所蔵品番号 6-Ha-56）と引き換えに耳庵から譲られた旨が記されている。
- (19) 松永亀三郎（一九一五—一九九七）。実業家。中部電力社長、同会長、中部経済連合会会長、中部航空調査会理事長等を務めた。松永安左工門の甥。
- (20) 吉田吉之助（生没年不詳）。東京の美術商「水戸吉（水戸幸）」。
- (21) 宮川竹馬（二八八七—一九六四）。実業家。東邦電力株式会社の技術部次長などで実績を残し、昭和十二年（一九三七）、専務取締役。同十四年、政府の電力国家管理政策により設立された日本発送電株式会社理事となる。戦後は松永安左工門とともに電力再編成案の作成に携わった。昭和二十六年（一九五二）、九電力会社が発足すると、四国電力の社長に就任した。
- (22) 稲村坦元（二八九三—一九八八）。曹洞宗の僧侶、歴史学者。埼玉県の郷土史研究において多くの業績を残した。晩年は永平寺副監院、埼玉県郷土文化会名誉会長を務めた。
- (23) 鈴木大拙（二八七〇—一九六六）、本名は貞太郎。仏教学者。帝国大学（現・東京大学）在学中に鎌倉円覚寺に参禅し、居士号「大拙」を受ける。明治三十年（二八九七）に渡米し、仏典の英訳、英文出版を行う。帰国後は学習院教授、大谷大学教授などを務め、欧米の大学で

山荘内 春草盧ニ疎開して、今日満一ケ年は夢と過ぎた。この間の苦惱は自他共二筆紙に尽されぬ物ばかり、幸ひ長男丈未復員のままなるを心痛以外

親辺丈は無事に過ぎしは仕合、然し愛顧を得た人々中悲しい変化はあつた。相澤刀自の疎開先の死去を初め親しい人々の数は書にしのびぬ。

小磯將軍の収容に次ぎ、岡部長景子又、巢鴨冷窓に呻吟されている。それらの哀愁と疎開一年を憶ひ、其方々に因縁ある品々にて、唯一人手にふられし薫を

慕う 茶碗ハ 自作墨商 銘神路山 茶人 岡部子、三津浜別邸、金林寺、子爵銘 魚見松にて自作の (丹頂)箱

裏悦子の歌 「とふとりのつはさゆるらにうかへこく 悦子」 茶杓 自作小磯、山、將軍夫人の歌 明くりくをろの無らさ起のやま 銘 若櫻

床にハ鎌倉時代 地蔵尊 伝画 を掛け 過ぎし知己の追幅 方々の罪の軽かん祈りに、過去、将来あり方に迷想深く憶出を過した。

◎財団法人松永茶道研究会 許可報告

四月六日

桜花 爛漫の好季節、松永家では、茶道研究会、法人組織許可完了、其第一回委員会報告が正午前から開催された。(この茶道研究会後の柳瀬文化会の先身である)

この会が成立当時予にも委員の一人として推薦承認書も交付されしが、浅学其任にあらずと、其まま放置した。同時に在京ハ元より中京京坂知名の教習者にも顧問

役承諾書を送せられた関係上、春陽郊外佳景の山荘には、それら関係者多数参集を想像し、草盧周辺の清掃奉仕後正午頃参入した。

予想は、はずれた。多数と思ひし委員顧問の顔ふれハ 誰の四人) (堀口捨己、肥後和男、芳賀幸四郎、根津満岡 外山内桑田藤沢諸氏のみ。

会場ハ広間 床ニ 光琳着色 赤飯、鱈、汁、入麴椎茸椀、焼物信州組鱈、香の物 紅椿の大幅 食事 お祝儀冷酒

食後、松永会長ハ、会の進行報告と今後会に運営上の抱負、美術茶器鑑賞、茶道の革新 それに対する文献の研究、機関紙発行等々縷々数十言の長講談に、得意

の翁に引かへ、初出席の自分は、失礼ながら眠ケを催し折角の要旨を開き洩した。但し要点ハ主として理想論に偏しい、然し博士達を前に滔々たる論旨に敬服す

報告 終り新館広間の 明後八日 釈迦尊 因果経、書院 藤原時代 鎌倉期木製 陳列を托させた 下誕を前 床に 断欠幅 鍍金三銘銘 金網盤上に

側ニ 時代華麗ニ 盛花 金 芦屋 水指 古竹よせ 茶入 利休在判 薩摩 茶杓 慶首座、筒 手桶 大棗 袋 漢東 原叟

茶碗 高麗 銘出雲、已上の 飾附にて耳庵翁お手前濃茶を振舞れた。此間 又茶方式の講議つくることなく敬聴した。

要するに、茶道文化会は、内部から漏る、財産税回避策ハ屯も角、翁自身のお道楽及他より研究資料の吸集が目的の一面でもある。何れにしても開会式にハ淋しさを感した

道員組の内、光琳椿ハ田中親美翁旧蔵、茶碗ハ魯堂愛蔵、金網盤ハ井上候伝来予の旧蔵であつた、翁の数年前の蒐集力旺盛時代である。

◎春草盧の朝会

四月十四日

三日見ぬ 間の桜かな、吉野、染井は早や花吹雪となつた、食料飢饉に迫られても、自然のみは陽春に萌立つている。この際朝会でもと、急に思ひ立

昨夜松永翁のお越を乞ひ 耳翁 安太郎氏 床ニ 俊成の昭和切、お快話を得た。朝七時二 桜ちる云々の二首切

食事ハ 朝鮮足附 膳にて 向 嫁菜 器ハ 赤菜 粥、お薩、人參 釜目絵 京菜入し 汁 三州味噌合せ

薇頭木の芽 香の物 芥菜、干大根 已上の通り至極の簡素にて汗顔、猶食事が終りハリハリ甘酢 菓子ハ蓬団子

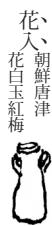
水指ハ 伊賀 茶入、南はん 袋 續漢 茶杓 舟越伊豫 茶碗、古刷毛目 共蓋 芋の子 東 元節銘壽 建水春慶曲

已上にて濃茶供した。老夫人、田中刀自ハ東京行、藤沢君ハ風邪にてお親子丈花も省略、窓外落花繽紛、庭前花吹雪に色彩る、何ぞ花を要せんやと

◎耳翁お返の茶

四月十五日 昼

、而生、庵に入席すると、床二澤庵和尚冊「むめの花たつ袖ふれしほひにて
用紙砂子歌一首 春や無かしの月にとほやわ



澤、庵短冊に花の意
充分こもりし上白、袖葉ナダレ 「花なほばかに思て深からん
とこそ胸に浮ぶ

金 古阿弥陀堂 懐石 信玄 仕込 若菜の 土筆頭 藤菜、天草和布 汁 合せみそ、小煎
唐金ふた 弁当 胡麻あへ 向 胡麻あへ 浦キの花 銀手附鍋持出し

焼物貝柱 碗 素麺 椎茸 青菜、強魚、八ツ頭 香物 白菜 酒器 鈍子、備前徳利
織部杓鉢 古漬 杯椀 唐津

菓子 蕎麦だんご 朱の小椀二 已上の如く初春にふさわしき、取り取りの野の若菜料理
小豆飴かけて 心に込められ、耳翁と只二人への持成丈心から、主

人無事復員を祝し お神さんにもお相伴を乞いて 水指、黄瀬戸 茶人、宗白 耳附
心おきなく頂戴した 筒

花人に良く 茶杓 宗中作 茶碗、熊川銘ほととぎす 蓋置庸軒作詩アリ 建水
似た姿 八十一才の作 外箱上二威鏡道トアル 曲

已上にてお濃が至極良く練れ拝服した。水指ハ黄瀬戸とあるが、伯庵風の袖葉あり、茶人は光
澤なく滑紙手二似て不意作でもあらんかに見え、高台あるも目珍く、茶碗は大振り上袖

白味勝 諸々に黒く滲あり、高台も高く、土見多し 然し何れも良い品々で
銘杜鳥もこの滲みより名附しならんが箱書威鏡道に意味不明 あった。

扱広間に 動座 一休和尚筆 香炉 七宝 唐物籠 方卓上二 書院寂蓮の
すと (梅の画讃) 火舎 香炉 花人 歌の巻

右、門切と称する この外 遠棚に時給硬箱など飾り 長板へ、仁清水指を備しのみにて
元冊子を巻に改し物 炬に文字入釜を掛け 淡茶を省略され水菓子

など数々の持成があり。母堂の話の内、主人逝き十五年を終、明後廿五日ハ命日にも当る雄造
も無事復員しました喜びに改めお越を願いたいとの事、思なしが、床の一休筆にも、故人

梅露君の 供養気分もひそみ奥ゆかしき心さへ浮び、厚いお持成を謝し辞去した。
出京序ニ広尾旧宅に立寄り一泊の上、翌日知己の雑用を手間とり又一泊す。

翌廿三日ハ朝九時畠山家を 玄閑迄と訪いに、意外にも、大威、大田、官舎、太太とある。
玄閑表札は所はずされ

さては、お当方も官省に接取せられしかと、一時タヌライしが、縮切れし呼鈴にて門が開かれたは
奥さんであった。挨拶もそこそこいかめしい表札の意味を尋ねると、トウトウ追い出されます

マー一寸お上りと進られしが、只ならぬ空気に、之にてお暇をつけると、それでハ主人に伝へますお待
くださいと待つ間なく、主人ハ少し用もある是非上れとて止むなく、部屋に通ると、主人ハ手紙

でも認め中、側にハ顔見知の白髪のお老人が居られた。

主翁ハヤ一暫く、私の方も愈々追放され、今日には引越た、表札通りの有様、そこで一時下
の二階に移る事にしたと、話の内奥さんに命じ、手元にある茶箱を開き淡茶を進られた。
其折主人ハ(藤原さんもあの問題で外出も出来ず、お茶にも招けず)其退屈を慰んと思ひ

先日雅朱刻のよふな密刻の茶箱仕込を届けて置いたが、今又籠の茶箱を改め、それを届
けお取替して、少しでもお慰したく、今手紙を認中であると、何と云う御友情の厚い事かと

強く胸を打れた。主人は猶君も一応見てもらいたいと取出しは時代、藤組 古代紐つき
内部ハ 鍵取 仕込 茶器ハ籠の侘に 祥瑞、杏形胴紐五郎大夫在名水もシタル名碗、丸文
古代裂張、対しての組合 描割枯木二鳥の絵、祥瑞独得の様よふ

此の茶碗に 対し完備した茶箱であった。 一服 頂戴したいと所望すると、最だ藤原さんと
自分は無仕附にもこの茶碗 共に吞た積りで、三人で喫み合お届

するも意義あると、水飴を菓子、奥さんのお手前にて拝服した。
不思議な縁でこの日はからず、藤原さんへの茶箱送りに出合つたとは、自分なが妙な廻り

合でもあり、お主人方の雅量の豊さに感慨に耐なかつた。このお厚志を記念にお暇する
と奥さんはマー今日お豆腐を頼み今来ましたと引留られ、その用意中

お別に庭でも一巡せよと、主人と共に庭に下り立つ。明治大帝行幸に因りあるここ龜ヶ
岡宏壮な庭園も、今日を名残りに暫しのお別かと巡遊しながら感慨無量

庭内南端の 一隅にハ現に新居が建造中、下の二階家にハ畠山二清の表札も掲てあった。
部屋に帰ると食事の用意も備ふ

葉山からの鯛のカラ揚、蓮根の酢物お酒、豆腐の飴掛ヲロシ生薑は特二目珍しく
も美味、お国名物河豚のヌカ漬が九谷の鉢にと云ふ、珍味の馳走、そこに又

愛婿酒井氏が、愛孫学校卒業祝二赤飯持参両祖父の喜びを共に祝し
つつある際、山田憲太郎君も久々として来訪。共に振舞れ、久し振、旧知

にも会い午後二時過ぎ食塩迄贈られ、辞去した。
水戸幸のお茶に親み、迹又藤原翁に対する、一斎翁の茶箱服合を得た

事、畠山家の邸宅追放など悲喜こもも胸にいだき、殺人的の車上を、日
没過ぎ漸く二泊東京より帰山した。

○憶出の独茶

三月廿六日

堀口 氏と茶杓問答の折、丹精こめて茶杓を削り呈上すると話されしが、いつか忘れていた、処が今日来荘と共に自らお持参を得其厚志を謝した。

上包二 拙作竹茶杓筒共 あり 早速拝見すると、月の夜の空の色かも朝あけの捨 とあり
銘月の如しと 筒四方削二歌一首 海のいろかもほのかに深く

昭和廿二年二月 蓬里愚痴捨庵 一方へハ 捨庵作、徹 と谷川徹三氏の
仰木老 如月 サインある

流星が ご丹精二細書きの筒歌二深くお礼を申上た
扱茶杓ハと見れば、逆竹が用いられ随て貝先迄種は無論ないのみか、節上より

貝先迄自然の上皮が可寧に削られてあるには、少なからず奇異に感じた。自然の持つ竹の味、それが筒迄四角に削られしとは、これが茶杓研究家堀口老の作であった。

三十六回

茶会集第九集も 昭和廿六年 書了
十一月廿一日

誤字拙文自恥

雲中庵茶会集 十

埼玉疎開後終戦を迎ながら、都内の灰燼と食糧の欠乏

は、幸ひ我家は戦禍をまぬがれしも復帰の意慾なく

廿一年と年改りてもなお武蔵野々趣に親み、松永耳翁

の茶三昧に恵れつつ、時には東京旧知の方々が戦後の

うつをはらされる為の茶事に招れ出京するなど茶

事も復興のきざしあり、それらの記事をまとめ

廿三年兩月までがこの冊におさめたのである

P 41

P 39

○松永家若衆招くの会 昭和廿二年二月廿五日 夜

戦禍を さげ、この山荘に仮住して既に、一ケ年に満たんす。此間耳庵翁の厚意に依り、山
莊中最も風光佳景、本邸より遙に離れ、閑寂な一室を与えられしこの春草

盧八原三溪先生寄贈になる河村隨軒遺構である。老夫婦住よ、分に過る程二
翁の徳を日毎感銘している。同時に令息安太郎氏お夫婦方の、ただならぬ日頃の温情

を報る為、幸ひ来荘中の令妹お夫婦を交へ夕景からお出を願った。
この際老夫婦ハお免をこうむった。

安太郎氏 同千代子夫人
田中精一氏 同英子夫人

お招きするとして、何一ツ不自由の山里、
まして道具に至りては

床に 寂室和尚
出山釈迦の画讃

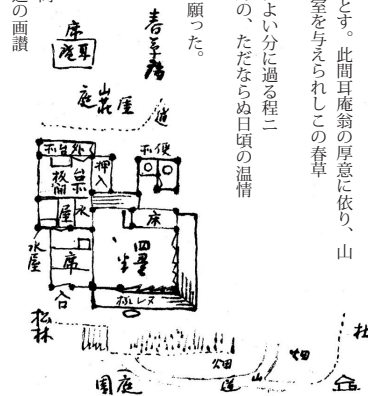
花入 自作竹筒 花山 椿二 釜、天猫 粗末ながら
銘雲雀 早梅 霰 食事 向 嫁菜胡麻
あへ、絵唐津に

吸物 椎茸、和布 根来碗に五目飯とお若衆に物たらぬ粗飯を 菓子 味噌手製
自園青豆 呈したのみ 松風

水指ハ 伊共蓋 茶入 南はん 袋 漢 茶杓 自作
賀 芋の子 東 銘枯野 茶碗、古刷毛盃、
銘(翁)

建水曲にて濃茶を供した。お若い方々でも、流石耳庵の
指導下日々趣味もあり、一時の静談を乞ふた。広間で八探幽筆天神像を掛け
今日天神祭を憶んだ

ここで春草盧の略図を示す



○吉祥寺而生庵の茶 三月廿二日

戦争 に狩り立られ勇造君と前後し、中支方面に苦難をかさね、雄造君引揚に遅れ、昨冬無事復
員されし水戸幸主孝太郎君から先月来荘の際、日を期し一日耳庵翁と共に越を

乞いたいとの事が、今日出現し耳翁と共に、渋谷經由井之頭而生庵に出向
赤坂仲ノ町本宅ハ不幸戦禍に焼失せるも、ここ野水庵は安体益々広い庭園も幽邃

雅興を深めている。両君出征中にも、趣味深き母堂に依つて、苦難の数年、良く家業を健
持せられた。さて、寂びた庭より春を迎ゆるきざしが萌へそめている園内を

P 42

P 42

八時出立と申され、俄の事として未明から釜の用意はしたが、時刻になって顔をみせず煮は落ると云うのに、アレ程時間の無理を申しながら、無茶人連にも九時に迎いに掛ける有様、それ澤庵狂歌ノ意義は深かった。お茶の終りし後も急ぎと云いつつ内本老も腰を落つけ十時過ぎ出立。翁丈述に残り文化会事業の結果

及余に対し、前日東京の際、畠山君に会い、其際畠山君から仰木君も、モ一東京に引揚げ製作を初めたらよさそうに、あのまま過ぎずハ残念だと、貴老の事を心配していた私からは、また本人に製作欲が出なよふだが、原因ハ資材のない為ならんと答へた、畠山老からも貴老の技術をこのまま終らすハ甚だ遺憾至極と言っていたなど、厚意ある閑話に短い冬の日お昼頃帰られた。降伏の社会状況にあきたらず、道義の廢退、同胞相はむ現実、小百姓生活に無念を過すのが今自分ノ希望、厚意をよせられる方々にハ萬謝する

○無茶な献立

二月九日 夜

P 35

老妻の東京行きに一人やもめ暮しの淋しさに、夜話かたがた耳庵翁を訪ねると、茶の湯催と見え、道具や食器が取揃へてある。翁の話では、明日正午、小

林逸翁初め長尾欽弥一家、鈴木宗甫夫婦を招く、小林翁丈今日大阪急用不参、其の為今夜からの準備中ト。道具組ハ、去る一月初の信実や碓氷藤花人、其外雲鶴茶

碗など、堂々たる組合、処が驚きしは懷石の献立。焼物替りに、豆七輪に七輪を掛け、各自それぞれ持出す積り仰木さん如何です、良い趣向でシート、過る生沼津

の浜の小料理屋で使った野卑な七輪土鍋を見せられた。信実歌仙、碓氷藤花の前に、七輪土鍋の煮食ではと、客はわかもと一派、如何に無茶人と教寄問衆知と云へ、あまりの無法に速座に中止を勧告すると翁ハ仰木さんもお承知の通り、故鈍翁が帆立貝を七輪に掛ける出された事あり、何にも不都合あらん、近來知人間に、名食器のみ使い、型にハマリ面白くない

益田さんハ流石大茶人であった。私ハ私の趣向で今の金持茶人に覚醒させると鼻息の荒いこと。鈍翁イタラ目の折は名残の佳茶であった。型破りもこの迄悪に落れば

議論外と、寒い夜を引揚げた。処が翌夕聞けば、献立もスツカリ更りましたと藤沢老の話。凄しい頭腦の持主にも、茶に限らずこの筆法發揮が翁の性格である。

○耳庵翁且座席の茶

二月十六日 雨

P 36

耳翁 徒然の茶ハ日毎に行はれ、所謂茶喫相手も成べくを辭退しながら、今日ハ又神戸乾新兵衛氏(中念珍)さんがお越ゆへ、是非との事で正午参入す

乾さんは、現に山莊疎開中の田中刀自の令弟なり、名古屋高橋正彦氏の末弟、乾家の当主である。合客ハ乾氏に令姉、予の三人

初面会の乾氏ハ四十才前後、磊落船達な紳士と見受る。広間にハ

令兄旧蔵の光琳筆金銀泥梅の幅讀光悦二 誰聞春風到南、春色花初開とあり

正客に対し因りの物 懷石ハ向 平目の細切 器 鼠志野 汁 小蕪 鮭の淡塩、生椎茸、地紙形 地みそ 人參、蓬連草、

焼物 生鱒 鴨味そ漬器 鮪平目 刺 器ハ天啓 香物 黄瀬戸銅鑼鉢、酒器 躰子、あんかけ 染附四方 身 器ハ赤絵 白菜 黄瀬戸銅鑼鉢、粉引徳利

菓子 お手製 と云ふ お献立も目珍く頂戴し 床二 西行の歌 炬にハ、姥口鑿付勝虫、ドラ焼 さて雨の路地を小間に移と はつね云々 の釜が掛り

釣棚二 無地呉須 と云ふ 名器に適幅、お主人 香器 拝見、お当家人一番丈正客の喜び我らの出座香一炷の後 眼服又新にして

水指ハ 木地 茶入 道安松の 茶杓 道安筒書 片桐石見守 と上部の道安作、あまり、曲 藁 桑山猪兵衛殿 依所望に書之

例のない割筒に、お叮嚀な筒書、飯空の人物桑山猪兵衛宛送筒も、誰かの戯あらんが、道安茶人二道安茶杓の中よさ、

茶碗ハ 伝光悦赤にて お濃を頂く、翁の濃茶丈ハ、入念の練りと、お氣性からイツも上々の銘新玉 練り方にて拝服す。濃茶終りて、田中刀自代点にてお淡は

水指 尹部 茶入 唐物亀甲 茶杓ハ牙 茶碗 青井戸、替 干菓 手製、烏帽子 青貝 空中在名小筒 みそ松風、

扱水指 ハ益田家蔵品の内、近來の得物のよし、茶碗青井戸はなかなか良くも偽空中が飛び出し、如何にも興をそいだ 乾氏ハ令兄令弟蓬庵氏と共ニ、先代の趣味の血を

受られ、近來高貴な美術品茶器蒐集と聞く。其の正客振りに接し前途を祝す。春雨瀟々裡に午の名香器の佳香薫郁座中に満、塵外の雅興之に過あらんや

○捨己翁より茶杓到来

二月十八日

P 37

茶杓 数本を拜見其に研究したが、翁から茶杓研究ハ仰木老こそとも可然と云はれお邪魔した。

この捨己老ハ建築家として、最近博士号の持主、其外造園茶道批評に自己の見解意識を雑誌にも発表し特に茶杓研究の一人者と自任する人。そこで自分は、

トンドもない難題、私は萬事無観識の上、茶杓鑑定認別など、凡六ヶ敷い物に至りては、然しお同よふ、茶杓削りは自己満足に愉い物ながら、サテ削つて見ると猶更其作と判定の六ツかささが判る。書画家にして壯年晩年と違のある物、殊に自然の一半を以て削る際ハ

竹その物が持つ自然によって太くも又細くも止むを得ない場合が多い。素竹其物に依つて作意に左右される。壯年の作にハ色気もあらん、晩年となりてハ猶更其も俱ふ、或ハ又茶碗

に依つてハ、その茶碗に対す、多少の長短もアロー、従つて之が遠州だ石州又ハ不味作とか、侘茶人では利休を初め宗旦、古織庸軒でも、多少個性と癖はあつても、たやすく

鑑定の至難を感じられる。遠州の如きハ泉州堺の住甫竹なる物に下削を命じた關係ハ、カイ先に特徴が凡一定しているではあるまいか。私ハ已上を見解から、先ツ茶杓の作行に対し簡書

書風などに依り、之れならば考定し初めて得心する外あるまいと思ふ。何物によらず古來市価ある物程偽作の多い中にも茶杓ハ特に難事と思ふ。

只 耳翁所持、氏郷作茶杓丈ハ、売立の為名古屋より、東京一日の展覧の際、私ハ確信して、翁に推薦した外、茶杓についてハ、已上の見解上、こん後真所当りのご高説を聴以外ナシト

答へた。想^一 学者として文献上から判断する捨己老等が如何しても鑑定の不能なるは謂迄も

花入 一本是非お切り願いたい。実ハ三度竹筒拜見し、かねて所望したいと考ていると、世の中に自己過信と學者程、度しかたはいはない。

今一ツ 茶器について書きたいは、耳翁、この元旦初めて茶に用られし光悦風茶碗である。元旦以来、来訪茶友に対し毎事この茶碗を用いられしにつき、昨夜寂仙君来遊の

夜話中、話ハ光悦茶碗に及び、数日前谷川徹三博士よりの消息中、耳翁光悦を拜見したが、作行殊に胴廻りヘラ目などから光悦とは思はれぬが意見を知らせよとあつた。

然し 私にハ意見ハ出来ぬが、実ハアノ茶碗ハ、箱に光悦作とあり、筆者空中光甫と迄あり、銘新玉とある、最近三井家より出で、水戸吉君より旧冬備十六万金で買受られし

事丈ハ、蔵番宗匠の私は承知と、初めて翁の秘められた、内容と知つた。只嗚然たるのみ謎ハ解けた。水戸吉への蔵品払い、十万金の鼠志野茶碗の水戸吉の買振の春早も

そこで気の毒なのは、翁元旦の初使に、鑑定を求められし折、余は光悦でなく、ノンコーでもなし、一元当りの作ではと、口をスベラした事である。初めて聞ハ銘新玉もあるも、元旦初々

凡光悦にても茶碗を用ゆるなど、寧ろ広間に於る、淡茶に用いてこそ誇るべきにとも、当時翁の茶の行方を、いつもながら怪んだ程にて、今この話に依つて、光悦ならざる事を確断した。

○服部山楓氏の茶信 信州上諏訪 湖畔より 一月廿四日

消息に依れば、余ハ今信州諏訪湖畔の湯にて、中信連峰の雪峯に親んでいる、客次炬燵裏から、猶去る九日耳翁山荘で正客をケガした際、懐石食器其、田舎家にふさわしかりしが、茶碗光悦赤、道安松の茶人の大佐ハ、正月よりも極目にお使得たら感興深からんに

然し利休百会中正月十三日尻フクラと黒茶碗、同じ十五日二古瀬戸と木守とを用いている。セメテ

茶人 丈なりト確した茶器を取合せたらと思ふが如何、尤もこれは貴老に対し、釈迦に説法、他言無用他言無用とあつた。余は服部さんの見解につき一理あるが、利休が正月中は

黒茶、赤木守を使いしは、其前既に元旦なり以来新春の茶器を用いたと考へたい。それ以後ハ招客の顔ふれにもよる事と思はる。利休百会の研究も及ばぬ自分ながら斯く考

ている。茶笥蓋置、寛に至る迄、ただ一日にして新春の氣ハ漲る青竹の用意あつてこそ寿之新玉氣分ハ茶道のみならんや、耳庵翁新玉も広間に雲鶴、粉引の朝鮮茶

碗并用より、小間と逆転したらば違存なかりしに、十六万金に引ずられたのか、茶道革新の禍いではあるまい。イヤ、トンダ愚説を書いた物ダ、猶山楓氏から凍豆腐が届いた。

○内本宗韻歸路の茶 二月六日 朝

九州 水電社長であり、九州一の茶人と自任しつつ、一面芭蕉研究の俳人でもある、内本亮老が先夜から松永翁を訪ね一泊した。耳翁から明朝八時内本君は帰途につくが、其

前貴庵で淡茶一服是非所望との例の難題。然し九州一を自負する内本老でもあり、旧知の人を送るにも望るまもお受した。

扱道具とてなく、和尙、俄に上洛とり急きしま隣りにも其まま前日掛けしままの消息、高桐にて待人候、紹有坊まいる、宗彭とあり、一首

見られに早くお出やれせうゆう、花入、信菜、豆、花山椿、水指丹波、矢筈

茶、宗旦、在判、茶杓ハ、自作銘、茶碗、空中作、この茶碗ハ翁より、小棗一燈箱、茶杓ハ、風、銘宵待、所望にて用ゆ

茶杓 自作銘、茶碗、粉引鉢、箱鈍翁、建水にて濃茶を呈した。心まりの粗茶汗顔かたわれ月、草庵にての次第、茶の終し頃、曲の次第、茶の終し頃、

埼玉県歴史跡課長稲村坦元氏も来られ、幸いとして淡茶を供し欲談数刻の後お開きをこふ茶の一時時窓外禽鳥の音律幽に合和し興を添へしは山荘の餘韻であった。

○畠山家年賀に茶に出合

一月十三日

元日來 東京出を思い立ち漸く今日予定通り実行出来た。東京出は交通難で数ヶ月ぶり、田舎お爺の土産は薩摩芋、一里の道志木を経て五反田駅下車。

畠山家玄関ハは日曜ながらお客でも催しか物々しさ、玄関にてお夫婦にお目ると、兎も一寸お上りと進られ居間に通ると、先着の老紳士がいられる。先づ年頭の詞を述べた後お主人ハ良い日に来られた。実ハ今日米進駐の大官連が、日本家庭の生活状態が見たい為止午から招くことになり、その接待兼お説明を、ここに居られる、禅学の大家鈴木大拙師にお越しを願

たと紹介せられた、大拙師ハ著名の碩徳語学又堪能の禅師である。自分ハ初対面を得た、頭髪雪を頂くも容姿端麗な方である。主人ハ飾附も終った一巡見てくれとの事、之こそ望む所とお主人の殷石苑 寄附 乾山筆 寒山背後の墨画にて乾山の得色 丸炉 文字ハ真形 案内にて先づ 図が掛る 現はれている

御殿と称する 床に名物、筆白鳥、水にの大横物 六十一才 この白鳥の姿勢筆致の豪健さハ唐画 大広間 探幽 筆白鳥 芦 研究に平生を没入せる狩野派中興

の祖と喧傳せる丈あり、狩野派の下火となりし現在にも猶探幽丈ハ市価を落さぬ由縁はこの幅と接し改め考定されるのである。主人の話によれば、私ハこの幅を求る際、餘り高価なりし

に世評を賑した程だと、書院 追羽根蒔絵 袋棚二 京人形、など外人趣味品が陳列されあ 硯箱、江戸中期 時絵小筆寄、それより茶席に

床二 牧溪筆淡墨 表装 中二重蔓 上下銀 一風 濃浅黄地 水屋にて 道具 破蓮に飛鷺 茶地金襴 欄 二重蔓金襴 組ハ

花入 古銅、九州、花山梅、水指 利休信楽、茶人 唐物竹四君子刻、名物 共蓋 茶人 黒漆ツブシ

本茶入、仁清、茶杓、光悦作、筒書、本阿弥、茶碗、古秋井戸、建水、備前、二重タメ、光勢

已上 凡ての道具組拜見した仕合、扱牧溪鷺の画は荒い絹の為か画面に感を得なことは伝来を尊ぶ以外二ないが、牧溪であるや否やに留むる外なく、

花入 九州は豊公時代より名物として、茶人間に尊重せられる名器、只然し当時ハ時の数寄権位者が、一卜度取揚るや、ただちに名物を称へられし例多く、今日其伝統を尊ぶのみ、此花入は形式の良さからも、其一例と見る、茶人の尊ぶ花入ハ銅器の場合特に其の傾向が多いよふ思はれる

古秋 井戸は、あきらかに、箱書にもあり、大に参考になった。其理由ハ、去年塩原家茶の折、小貞入と称する茶碗が、萩窯で焼製された物ならんやと疑問せられたが、此

井戸を見るに及び、土味釉薬作行からも、愈々断定すると共二、古秋時代、斯迄井戸茶碗の作焼見る点からも、今日井戸と伝られる多くの物の内、相当多くは、萩窯焼製

の物ならんか、予の想像するは、明治末より国焼窯跡ハ勿論、朝鮮にても民間人は元より総督府時代官の手により、古陶跡発掘研究されしも、朝鮮では、至る所井戸焼製

窯跡の発見に至らず。従つて、朝鮮在住研究家一部にも、内地茶人間の井戸と称する茶碗を朝鮮窯として尊重するを疑問視している。この点からも

今日 この萩井戸により、初代朝鮮渡来人陶工の手により、萩にて焼始されたのでハあるまいが、こん後大きな問題を残す物である。畠山家のこの茶碗も、古来の箱書なくば

或ハ本井戸として、通称専用される程の、姿釉薬、高台緑の一名カイラギ等寸分井戸其ままである点、只見込置目の多過ぎる丈不意の点がある。

望外 女宝器拜見に手間取どり、お当家の迷遣惑と旧宅要件もありお暇すると、奥さん初めお主人より、柏屋を招き女中連に食事も出来た、是非居間に喫つて行けと引留

られ即時二膳が連 向 鮎糸作り 鮎の刺身が 切子の 貝柱、サヨリ、鮎、巻海苔と ばれた 子との甘酢 高杯

色とりどりの寿司と云ふ、高級料理、最後ハ蛤吸物飯と種々の馳走になり、ジン数杯よい気持でお暇すると、之又良一箱、洋菓子一箱の外淡茶迄、正午の多忙に振舞れ

し上、玄関にて、長い包のお土産頂戴したは、恐縮千萬であった。 広尾旧宅に帰り包を改ると、鐘詰六個、生鱈一尾であり、重ね重ねの厚情を謝し、同夜ここに一泊の上、雑用数件をすまし帰廬した。

○堀口捨己老と茶杓問答 一月廿二日夜

大寒 前に八目珍暖さに、連日畑に薪と昼の疲れに夕食を終つた頃、仰木さんお内ですかと堀口捨己老が来訪、いつも夕方お邪魔するが、今日ハ松永さんを訪問し、翁所蔵

お床内 の豪華、炉中の見事なるは、流石敬服しながら、爆竹水指はよいにしても、茶碗住吉松あるのもお床の住吉図に対し、お人念すきし上、茶人中次に至りては、他に對し住吉用丈、甚だ以つて不釣合、翁もお理窟本山丈に困った物、沢山の鬼藏家丈、我ら無一物者は、正月初々こんな批評を考へて見る、連客ハ一家総出であつた。

○耳翁藏品弘の茶

一月三日

P 28

耳庵翁 から東京より水戸吉君が来るからお茶を共に上げたいと招かれたが、連日の事でもあり一寸考へても見たが、水戸吉君は、この柳瀬ハ初めなり、戦災後も会ないので、

出掛て見るとコム長靴姿に先客宮川日登理事の居られるので、彼れは耳翁の進めるお番茶も辞退し、私ハそれよりお品を拝見が愉ですと、彼一流の無慮慮な挨拶

そこで主人ハ先着の正遊武市の両君に命じ、倉の一山を廊下に出すよう命られた。自分ハ一寸変三考へた、扱ハ茶なく不用品の売払と感した。

翁ハ仰木さん共に品別を見てホシートの事にて共に庫前に行く、凡二百点なる、中にも立田と云ふ時代時給硯箱、唐瀨の香鉢など惜き物がある外他ハなくともよい物のみ

唯一ツ予の作品時給籬の乱盆があるに何となく胸を打れしが、今の松永家にハ不用品かと思ひ返し吉之助君の踏値で買受けん、彼れに依頼した。間なく耳翁が顔を出すと、

彼れは、旦那さん、この位の所でハ(腕フセ)も出来ません。私の踏値でお売なさいと話合がつき、僅か三十分で値附ハ終つた。立田ハ二万円、唐瀨ハ一万五千円が最高、籬の乱盆ハ彼れハ予に二

五〇〇と耳打した。総高十二三万翁ハ不満であつたが、流石水戸吉良く買ふ物と翁に進め商談決定した。正月早々茶に招かれ道具弘に立合も珍な事。

扱 取引終ると 水戸吉 予二藤沢君のお給仕にて 向 皮鯨の 器ハ 鼠志野 汁 三州みそ
食事 主人 木瓜形 小籠

焼 焼物 塩鯛 大根輪切 器ハ染附 香の物 お酒ハ扱にて
焼煮 織部の皿 強魚 サハ煮込 八寸細昆 外 瓢形

お正月なのか松永家として八目珍お献立に相伴人ハ仕合、今一ツハ昨冬長岡での水戸吉君の振舞答礼でもあらん。食事ハ終り広間での茶ハ

床掛物 前日 花入 又同 書院 白翁の 茶、薩摩 茶杓 前日 茶碗、鼠志野
通り 花入 よよ 能面 銘望、月、茶杓 通り 刻松垣

已上にて お濃茶が一巡すると、水戸吉君ハお主人、お席二この茶碗をお売なさいよと、これに答へて耳翁ハ何心なく十一万円なら売ると答られた。水戸吉君ハ速座にヨロシ

買いましたと答へしにハ、耳翁初席一同啞然として、予又男らしくお売なさいと進め、翁ハ目をバチクリされる内手打なり大取引ハ成立した。吉田君の度胸にも感服したが、元

この茶碗ハ、翁が茶を始められ間もなき折亡兄魯堂所持なりし時代、鼠志野ハ普通志野程顧ざりし際、予は切に進言し不性無性に四千五百金で買入仲介した茶碗

処が二年後某大家売立二、同じ松垣であるが、この茶碗より低位にて四万某で落札した事があり、それ以来翁ハ次第に重用せられ、他の教寄者からも薦買されるよふになり、鼠志

野も市価を昇げた。食器にハ鼠志野もママ名品あれど、茶碗ハ数少なく従つて愛用されて来た。何れにしても一個の茶碗十萬金の商人引取りにハ宮川日登理事も驚嘆し

ていた。喜びしは水戸吉君、他の品ハ正造にまかせして、この茶碗、硯箱踏鉢三点丈ハ自ら携帶帰途、途中我春草處にも立寄り、小供時代によく老妻にも頼まれた関係ありお会した

いと久し振りの面会二今ハ五十の吉ちゃんかと感慨無量であつた。

扱翌四日松永家から、前日のお礼をかね時給籬乱盆は貴所懇望とも見受ましたので、水戸吉とも相談売留し改め進呈すると届けられしハ意外でもあり希望をどけた。猶立田硯箱も、翁秘藏備前矢管水指と共に六千八百円にて予が推薦せる物水指丈でも今四五萬の値

○自宅飯後の催

一月十二日

P 29

正月の 山荘は落ちつくした頃に寒林と化した。麦一色の武蔵野ハ今霜柱に盛る即ち麦踏み姿の乙女や老婆の悠々たる長閑さを見る。東京よりの買出しは朝来リクを昔に引きも

も切れぬさま日々繰返している。松永家ハ流石日々茶客を集め六日團さんと一写を、七日ハ田山方南、井上晚翠主瀬津君ら、九日又服部山楓に株屋の室老など、其程度相伴役も、小作

百姓の冬は用なく招れるまま参加したが、道具組は元日三日と凡同よふである扱耳翁も近々堂ヶ島避寒の為、今午飯後の茶を催した。

扱出を乞いしは一山の 即ち 大僧正耳庵翁、田中刀自、の四人
お弟子連 本山夫人、藤沢寂仙

名器 豊藏の耳翁に対し 床に この朝切りし 二花野梅二 を挿した。 お口よこし迄と
物持たぬ我とて 青竹一重切 ヤシヤの若芽 向大根人參クルミアエ

器ハ 五山窯 昆布巻 器 染附 天婦羅 貝柱 煮込 御殿山焼赤染蓋物
散梅絵 鮎の 百合根 手鉢 野菜 重込

御酒、銚子 お菓予 時代茶目 器にて 動座を 水指、南はん、茶人箱に御殿山産トアル
子 願い

語れば、イヤ、宅ハ正月用意で取込だとの答へ、我々とてもそれは同じだと八思ったが言はず愚
其内包からハお歳暮だと出されしハ

仙厓和尚 席の絵 真黒い幅 讚二 厓公は何日席人皆笑、厓亦笑、とあり、明日を迎ゆる厓年を
期に送られ物ならんと、其好意を謝し、早速壁に掛け炬辺

にて淡茶を呈した。この咄の振舞として、何の除夜気分を表し得ざるも、満足々に引揚げ
られた。食後厓和尚の飄逸洒落の幅を眺めながら、老妻其一碗を啜り廿年を終る

△三元耳翁の茶

一月元日

P 25

歳は改 った。一ト月遅れの田舎とて何の正月光采さえ見えぬケサ
見渡す武蔵野の風景にも枯木と化した杜、青松に囲まれし平林寺の松林との対照と共

に拓けし耕地の麦の芽さしの色調は自然の風致と共に閑寂さをそえるのみ、只去年の今日と更なるは復
員壮年の野良を耕す姿の多さあるのみ。

気分的 にも松永家又ハ改年の挨拶すべきと、朝の雑煮を終り、茶も啜て十時に出掛く
老お夫婦、安太郎氏一家お揃い、朝の屠蘇の終りし所、我らにも屠蘇を振舞

れた後、お雇として早朝から出勤の藤沢氏に命じられ、久木庵、即ち且座席にてお茶振舞
との事 (合客ハ田中刀自、老夫人 安太郎君とぞ)

年 免んじ予が先達、露じ伝い久木庵に。処が、圃水も露地の落葉と共にうすもれしまま、気
分的にも手水の水丈位ハ浄めてあるべきに、翁の常説にも不似合を感じ入席すると、

床二 西行の、はつねと題し 詞書あり 「うすこをりとけぬるよにくもわなく
色紙 ついたちの日云々の いけのかかみ二ハかけりなしつ」 又一首

「くもなきいけのかかみによらずよお 二首認めあり元日に申分なきお歌掛りお主人のお得意さへ
むすへきかけにくくミへける」と 察られる。ただ新仕立表装の見苦さ、お説明によると

旧臘八百善所蔵手鑑中より捲上げ表装申付、昨夜届きよし。従つて初使である訳
猶この筆者が西行であるか否やハ、浅学の私にハワカラヌ

水指八曲 お香が 香合、黄瀬戸 茶入ハ 道安の 茶杓 失 茶碗赤染 建水砂張
あり 一文字 松 茶杓念 茶碗赤染 菓子干柿

さて茶碗ハ初めて拝見する物、お主人はイトモ町重なお披いワリ、茶焚使いも口頭に見ぬ入
念さわ、お貴重品ならんと拝見を乞ふ。作風は光悦振だが、光悦と断ずる勇氣ハない、横に
見る段々のへら目にイヤ味があり、暫し見入る内、翁ハ遠慮なき判断をされたが、軽々しくも
ならず、ノンコウならず素人作でハ無論ない。そう考へるとお主人ハ光悦として求められしと見

ゆ。元日早々速断を控へ、翁又タレ作と発表なく終った。

元日とて広間ハなく、元日早々のお厚意を謝し退散した。

落ちの俄百姓の自分は、午後丈ハ骨休に安息せんと、老妻の疲れも考へ、炬燵にもぐり、小
都児らの乏しき正月生活の様や、幾十年振りの借家の正月などを迷想の夕刻

△突然 松永老夫人が、藤沢君 茶一服 ヨンデおくれと 急襲 された。お主人同よふの振舞
同伴で仰木さんお 九州訛りで 止むなく炬に火を入れ

床に 除夜 厓和尚の 席の 絵 水指ハ 木地 茶入 時代寫、 袋 利休濃東 茶杓ハ 舟越伊豫作
到来の、 釣 挽タヌ 赤地モール 片身替 銘杓

茶碗、鼠志野、鈍鈴銘 菓子ハ、正月早々、朝の干柿が頭にありしも 濃茶を 振舞った。お二入
山の尾、生権昔のありしを甘焼にて 共満足に見へし

が、この俄催に、木香も高い木地釣に銘寿の茶杓、大疵ながら鈍鈴が、残念がられし程に
作行と型の堂々たる茶碗を使いしは、お客のお世辞にまさる悦であった。

暮れから 日頃なみなみならぬ程、我らを初め、在京の小供の食料迄、乏しい貧農ながら補給を
續けてくれる、隣部落森田老夫人に開知裏を開んで食事と案内して置いた

為、叔母さんハ叔父丈が一人来て、松永夫人の引揚を待っていた。心なしの無茶人方より
お世辞もない素朴なこのお爺さんとの夜食の愉が深く、前日正月用配給酒をアツカんに天婦

羅、赤の飯にて粗菜さしくべ会食したのは、近頃ない愉い食事であった。米さんの帰りに家内
はお叔母の分として重箱詰を持せ、夜をふかして帰らした、斯くして元日ハ終った。

○耳庵翁広間の茶

一月二日 午后

P 27

元日 から暖い良いお正月、お昼前、田中の老母がお長男と年始に来られた。これ幸いと、安
太郎君に、名古屋から上京の亀三郎君のお兄弟を招き、粗末ながら重詰を開き、配

給酒を傾け尽し、昨夜菜さん土産のウドンの温いのを呈し一同紅顔よい気分が帰られた。
お茶丈ハ午後母屋で振舞との事で遠慮した 藤沢宗ハ病臥

扱午後二時 母屋に参入 広間へ通さる 前日広間 信実の歌仙 花ハ 砧青嵐鳳凰耳
するとお 扱が今日となる 巻頭住吉 花妙蓮寺紅椿

茶道具ハ 釜、古芦屋 縁 黒曜峨 水指 紹鷗好 茶、入、中 茶杓 宗甫 茶碗 志野住吉
馬地文 時絵 古竹ノ桶 茶杓作 茶碗 絵大筒

怪げな空合の夜は明けた。雪ですよと云ふ声に、それは初雪と雨戸を操と、深くはないが野も杜も一面の白紗また降り続けている。

春草處からの雪、薄化粧におふわれし武蔵野は、何と云ふ景色であろう。杜も野も一色に彩られ、刈述の稲の株には綿帽子を列へたよふに、其の白紗に黒く浮出る鴉の群れは、牧溪などに見る唐画の姿、花に若葉、月に良く、雪の眺の景色に、一人あかぬ憶にふける七時前耳庵翁からのお使いに、消息文に木炭を添へ

昨日八よのお茶拝服一同感三入候、又名々にお茶巾中下難有く初雪降りし間お寒くも可有炭少々為持、其内雪見かたがたおたつね申候、こちらにもお越は入候、廿三日朝耳更

仰木様
(初雪に炭まひらする寒さかな) 月並月並

と老人への思いやりは初雪と共に風流感が、少しの炭にも心こもりうれしき思い、我無沙羅の翁の一面にこの温情があつてこそ、多くの部下を駆使せられ、部下又隨服する所以である

朝の行事を終り雪ある内に、炭のお札をかね、山莊雪景色を探らんと思ふ折柄、寂な山道に人のケ配、朝まだ早いこの頃、誰人ならんと、木の間を見れば、雪道を杖をたよりに耳翁初

老夫人田中刀自と其令息精一君に藤沢老の一連である
雪見の為の急襲に、一寸マゴつきしが、これぞ何よりの好客と、緑先に招き雪景色を賞

せられ間に、幸ひこの朝、永貞、立信筆、雪中の富士、の横物「ちはやふる神よの雪を見ることは、宗中」

を其のまま、贈れし炭火の火鉢を用意して、押よせられた上は、お茶一服は、まぬかれぬと、小間に招し、内朱四方盆に、フツ切飴を進む。翁ハ懐中から布に包みし椎茸五ツを取

出しお土産と提出れ、田中の老母又、静岡から精一君土産の蜜柑のソソ別け、後にて聞けは、老夫人より、主人がアマリ、ケチですから、内所ですと之又椎茸を頂いたよふた。ここにも面白い

お夫婦の半面がある。贈り物ハ其多過によらず、内容にこもる温さである。

床に、澤庵和尚、小書ある、祥雲寺伝来、炭の恩恵に、香林院、旧殿天、箱、筋金を懸く

水指ハ、備前、茶人、道安好、茶杓、又自作、翁簡書、茶碗ハ、空、中信衆、にて、茶を練り、種垂、自作写、銘浦島、銘浦島、銘浦島、初めると

思ひかけぬ、老妻の急遣の、出来ましたと、運び出したは、上出来であり、であった。さて、對話中余ハ、澤庵細

耳庵に乞いに、元一時僧族であった云ふ。藤沢君から、色々解説を聞きしも、雑学に無知識の自分には、其解説又不明瞭、無学はかなしいかなである。

然し、白髪の子客、予又髪に雪を頂く齡い、窓外の雪と共に、翁の一字にも、何らか一脈あ

妻相手に又一服啜り合ふ。拙句胸に浮ぶ、初雪に新羅万象うす化粧

午後三時、から又母屋より招かれた。淡い雪は午後からの晴れで解けているが、途中の山内ハ、ソコココと残雪。お指定の且座席に通ると台い客は朝とよふ。進られるまま先入すると

床二、其角に点字を乞いし「めすらしき、詢に初雪には此上ない適幅、ものがふりたす寒かな」(もの持たぬ人こそ寒しけきの雪)とて

言ふべき感懐である。水指ハ、備前の、茶人、利休所持、予の、茶杓石州、茶碗、克徳翁作黒衆、矢筈、写、銘不出来

已上、にてお濃茶ハ連日の手練丈まことに、扱、おそばでも揚上たいが手に入らず粗末ながらと運、結構に拝服した。菓子干柿にて、扱、はれしは、向膳を染附に

吸物、蛸、大根の煮込、香の物、漬、新大根、と云ふ、思掛ないお振舞に頂き、お心入を謝した。猶喜しく感じ、柚子味、網手徳利にお酒迄、たは、志野誰袖の香合である

型ハ小さいが、其出来のよき、お自慢あつて然るべき香合、茶碗不出来ハ克徳翁遺品中の名作、元お合客田中刀自令兄正彦氏愛品であった。了

八年と一ヶ月、永い戦争、最後ハ無条件降伏と云ふ悲惨な国情ハ数百万の人命を損し、国民ハ悲嘆にくれつつ、貧者ハ食ふに食なく、富者のみがアヲル闇市に物価は高昇する年

この悲憤状態は、こん後益々深刻を続けるであろう。この過酷を続けながら、昭和廿年を送る。

昭和廿一年 除夜囲炉裏の茶 元日前夜の急襲

有史、以来かつて見ざる屈從降伏を甘受し、国民永遠に忘れたい、この廿年八月十五日と言息しい年、に最後をつける除夜の今日、去年迄は旧宅裏門祥雲寺の名鐘の除夜をつくる響に

一年の邪念を払ひしものを、今は平林禅寺より遠く武蔵野を伝ゆる梵鐘さへ、皆無なる燃料に釜かけるにすべく、改る初春の用意さへ、おぼつかないまま、寒さを凌ぐは、早寝の外なく

夕暮の、仕度中、松永さんからお茶頂戴に出掛くるとのお使なりしも、寒さと疲れの老妻にも、婦人ハ婦人の元日の用意に迫れる最中、お断りしたのに、それにもおかまなく早や閉室

当りから大声に二人連で覆はれ、例により茶と菓字は持参した、お茶一服願たいと無理難題。夕餉仕度にお湯さへなく、至極迷惑と思つたが、そんな事に理解ない無茶人、お連ハ田中の精一君

胸に浮んだは台所の囲炉裏端、そこで兎も角と、煮物の鍋を手取釜にかへ、粗菜さしくへ、案内した。お湯の沸迄松の花や粗菜をたしなから、除夜にハお家でこそお催もあるべきにと

寒さは 連日続く、用水桶は元より、田圃一面硝子張りとも見ゆる厚水、これを又里の童子が
寒足のまま、パタリパタリ踏破き鳴々として嬉んでいる。都育に出来ない勇氣も頼むしい。

老妻は久し振り京子お産の喜に上京した独身生活ハ、釣釜に芋粥の美味さ、
この日信州松本在二疎開中の縣君が、耳翁を訪ね来遊した。これを機会に共に一服

上たいとの案内に母屋に出掛く

床ハ二三の且座席

床へハ 数日前
相阿弥、真相の印ある山水、讚に曰ク

悠々山中、宰相似新画裏跡 筆者ハ相阿弥とは考へられぬが、竹林中の茅屋一放牛の悠々たる
青雲不見収 河南隱者完玩□□ 構図に筆致ハ名画である。古来如斯画にハ、よく相阿弥の印

章後挿がある。何にしても良い
画であり、この幅も其一例ならん

猶讚ハ一休和尚
の法嗣ト

水指ハ 備前花入
を打割し物

茶入、唐物蓋地
内黒



茶杓古織

茶碗 熊川
建水砂張

と云ふ大龜発
菓子干柿

濃茶が終つて、斗々屋にてお淡を頂く
お菓子ハ田中刀目より手製蒸マン

折柄東京より、水
戸幸正造君来る

家内不在の爲とて夕餉を一同と共に居間移る かねてお主人より秋月筆山水を求めしと聞し二は、
部屋の間屏風に古画の山水が掛てある 拜見を前に、これは何人の筆かを伺い立ると、主人

は秋月と答へられた。一見した自分は、不思議でならぬハ、お主人ハ元より、予より前に実見した縣君らの
讚詞である。何事ぞ、此幅ハ真赤偽物、然も近來出来の硬質刷ではないか。

然し 直感ハシタが速直に断言する訳にも行かず、近來お主人ハ美術鑑定にも大分お天狗でもあり、縣
君に対しては、お主人に向いお求になりましたかと尋しに、ハイ買取ました。然も立派な商人

所蔵三幅ツイ中、無理懇望しましたと、スマシたお返詞二、アー困つたお方だなと縣氏を側二
招き、君も今一度好く見直したらドウだ、紙二は専門の事、この用紙ハ最近の製紙殊に

硬質刷 である事ハ、表の紙中、折れが裏から見えない点も疑ふ迄もないと再見を進めしに氏も初テ
讚語をさとり、予と同意見、ここで初めて、耳翁にも不正品なる事を進言した。

幸ひ旧持主が商人であるから、それとなく返品を進めた。商人の何人かは不明なるも、松永さん
相手である以上相当知名ならんに、奸商の不都合も悪しもの。

お食事ハ、お粥に大根煮ハ、は詢に おいしかった。縣君は一泊、如何山上でも一軒家の空家を氣遣
サンマーの寸切少々 帰宅もすると、まだ東京泊りと思ひし老妻帰宅して来た。

寒月 光々と老松を 今日を限りに菓鴨収容所に、入所すべき筈の近衛文麿公は今朝
透し草廬を照す。 五時狹窪自邸に於て服毒自殺と発表された。五撰家の筆頭た

る名家も支那事変以來三度の首相として、
其の自責の爲と憶わる悲愴とも言ふべきか

翌十七日 午後藤沢君東京行の途立寄り、話ハ秋月ノ一件に及ぶ、偽物と確定したので、之れより
旧持主に返還に為上京する。実ハこの幅ハ博物館絵画主査秋山光天氏にも鑑定を

乞はれ真筆と断定の結果、主人は買入られた。貴下の直感の鋭さに主人も敬服されたと、
自分ハ書画跡に鑑識なきも、直感のままが適申したのみ、秋山君もこの誤認は何かの錯覚

ならんと答へた。猶持主商人と云ふは、栗山八百善彩光庵とであると、彼の常習的、
価も八千金と、お歳暮買にハ耳としてハ痛手ならん

○初雪 冬至と雪見の茶

十二月廿二日

P 21

寒さの 早くおとつれしこの冬は、冬至を前に一入身に沁む寒さ、柚子湯など昔の夢、銭湯行事
の冬至湯も、今は月に二度か三度の営業と云ふ惨な有様。人間の身も心も汚れるままに

飢にあへぐ此頃、中野部落の森田夫婦から、冬至夜、ウドン打ツから、夕方から二人うとん喰にクベし
と真心こもつた案内、乏しいながらもお百姓のたしなみ、この親切に、この夏作に南瓜不作で、冬

至の南瓜もないと聞いていたので、幸ひ食料補足で、トツときの南瓜でも煮て届にふと、家
内は朝から用意をしていた。処が突然、

午後 耳翁お夫婦、田中の刀目、藤沢君らが押掛にて、お茶と菓子は持参した、お宅で一服
頂戴したいとの所望。閑人ばかりのこと無下に断もならず、有り合せの

床に砥平石の墨を掛け 茶入、唐物張抜、茶杓、自作銘、茶碗、無地刷毛
跡、銀瓶、菊の絵、山兔、見込二天目箱

あり にてお持参の 練り お進した。処が、今一服と所望があつたので、フト胸に浮だ、森田への土産に
代代木ノ杜を 煮込で置た冬至の南瓜これに越す菓子は無いと、老妻の怪む

を、銘々盆に青葉をしき運び出したときの耳翁の驚き、この速饗に流石の翁も一棒
を与へられたと、感歎されしは、心よい応酬であつた。この際茶杓山兔の箱書を乞ひしに

翁ハ速座に「山兔うまの耳より長い耳 耳庵のみみにかよふお茶杓 耳」と速誅せられた。箱書を キツかけに田中刀目からタツテ
この茶杓 所望され、二日前削りし

内一本翁 歌ハ 秋の田の刈穂のいほの昔お、刀目の祖父ハ伊勢の諸戸家の出 之に続いて 一子夫人から
の銘を乞ふ 我衣ては露にぬれつつ 世に聞へし豪農を因みてと 亦一本と望

まれ、何れは、水屋のすみに押込められると知ながら、一本差上げた。柳瀬川と 夫人のは
同時に兼て田山方南君から頼れし茶杓に耳翁の銘を乞ふた。銘ハ (ひよ鳥越)

已上のよふな 冬至気分、茶杓の分補余興に、お連中飲をつくして退散された。
こんな訳で、中野からはうどんを届けてくれ、寒い夜食に舌鼓を打厚意を味った。

指導により寂仙老のお手前で濃茶を頂いた。
こう言ふ趣向茶が耳翁最近の日常生活である
ながら家路に帰る

朔風肌をさく山路を迷想し

○禾日庵歳暮の茶

十二月十四日 正午

P 17

塩原禾日庵主 八永らく箱根木質の別邸に戦禍をさげられしが、本邸の接収に今は邸内
旧邸に不自由なご生活と聞きしが、それにも拘らず茶友を招き歳暮の

釜を 懸られ昨日耳庵翁ご夫婦とも招かれた。
零下一度と云ふケサの厳寒に、朝霜を踏メ弁当用意し八時過ぎ一里の道を

志木三、松永夫人ハリヤカーで落ち合い、ヒシメク車上を東京に、時間の早い為一応目白の旧宅
で時刻を過ぎた。この本宅ハ、周囲の戦禍にも幸ひまめかれ幸運であつた。

禾日庵ハ本宅屋下門を這ると服部さんのお迎で、広い重畳洋間に通さる。停電又停
電のこの時柄 暖房装置 聞けば、本邸進駐が自家発電になり、其の配電からと

程なく田中親美翁参入される。お主人出座に久々の挨拶の上、互二今日の催を謝す内
東京一流の耳翁を最後に 禾日庵お主人を交へ五人ハ、

奥さん の進られる番茶を頂く お席ハ 八畳一間半板床の 空中より 宛消息の裏二 紹益の
汲出新物、時代栗盆 広間、床にハ 灰屋紹益 歌二首

「かしこし春の光を松の雪の」次に歳内 四方の空雪みの雲やそのままに 紹益とあり、表装ハお能
身にさむからぬ年の暮可那 立春 冬たつ春の 霞みなるらん 衣裳裂十平絹

まことに歳暮にふさわしく、春待つ心のおふれた、紹益光甫間の茶情深さが滲み出ている。
其の表装の華厳を見るにつけ、紹益と舌野太夫の情熱艶や事さえ思ひ憶ふ。花人は

宗全作 と云れる 花佐介 大鉄炬 織部の 釜、四方共蓋、上い手 寒
藤組 外一種 時代 四方 大板 達磨堂ト文字ある 知作

一同座に直ると 懐石 膳山崎膳 向 貝の柱 永楽作 汁 地みそ 焼雑煮、人参冊切
奥さんのお運び 折敷 ハサビ 器ハ 絵高麗 小芋 青ごさぎ豆

焼物 鯛を 古伊賀 進め魚、鯛の器 天啓染附 強魚、大根煮込 重箱二 番茶肴物
塩焼、三角鉢 刺身 平鉢 豚肉 小熊茶打

器ハ 新物 酒器 瓜形銚子、徳利 和蘭陀 と云ふお献立に食器配合とも、時節柄にも歳末馳
走に、食に飢えたのむである。お手料理の心人に至極美

味頂戴した。永い間井懐石の簡素に慣れし我々として、殊に風呂釜の面白さは、此
歳末に置風炉と思ふハ愚、お席まで仕出ぬめなかのお催しとして、

上なき仕合である。 服部山楓氏のお炭 炭斗 唐物竹組平、火箸象嵌、釜敷時代長門組、
松頼幽の内食事 直しがあり 羽箆青らん

香合 香合ハ、鎌倉時代金地四方 見返し 菊の この名香合出現にハ、一同少からず感激した。鎌倉ハ幡蔵硯箱
銘九重 錫緑、螺鈿羅に菊 折枝 と手法と図案の一致は、見るから凡同時代の物と思はれる貴重
な香合であった。予ハ想に明治の中期、バリ博覧会出品の手箱が不幸海上遭難の為、伊豆沖に沈
没の災に遭失せる事から、或ハ三島の手筈同よ、櫛罎内の一部でないかも考へられた。

禾日庵主が この名香合を惜げなく、この歳暮に用られし温情を謝す内 水指 備前 茶入
動座もなく、居抜のまま 菓子善哉焼餅にて、 水指 備前 茶入
記三棗

茶杓 長闌堂作 茶碗 井戸、書 建水 島 と云ふ禾日庵主独自の佐ひにて、之又
共筒 小振 山中道億 附 物 山楓氏のお手前でお濃茶ハ見事に

練られ一同巡服した。扱茶碗拝見となり、正客はこれは名碗、実ハ私も一ツ所持するが、作行糴
薬共余程秀れていると、シキリに賞讃せられている。予又井戸小貴人と思ひ、改め詳細に拝

見すると、見込の作、高台廻り及釉薬が、ナントなく井戸と思えない点があり不思議に考へな
がら隣席のお主人に向い、結構ですが普通より相違点がありますと述しに

正客は、この茶碗ハ疑問はない、山中道億の目識によつて井戸と伝へられてるのでハないかと、之に対
し主人ハ、イヤ、実ハ私も井戸の積りであつたが、自分の手に入り仔細に研究すると、作行萬般が

朝鮮窯でなく秋窯である事を確認した。今仰木君が、作行釉薬に疑問の点ハそこにある。私
は井戸でなく、秋窯と断定して以来特に珍藏している。

此茶碗 の由来ハ、一三年前 大阪俱樂部に於て金沢所蔵家の売立に出た物で、実ハ服部君が、下
見後 切に買入を進られ、相当奮発したが大坂商人に落札した。其直後金沢の鍛冶商

に利附せられた事を聞き、途追い掛け僕の所有に記した訳だと長々の説明に、正客初め又再見
と云ふ研究ふりであつた。然し猶自分には秋とは断定せられなかつた。元来秋井戸と称する程の

上作が、世に本井戸として伝称されつつも、この茶碗丈ハ、其地土と云い高台の月ノ輪のヘラ取りからも
釉薬の発色からでも、唐津当りではあるまいかとも想像せられた。何れにしても愛すべき良い茶碗である。

釜を懸られ、降伏後初の歳末に茶友に対する、禾日庵ご一家が、一玉となつてのお催につき一同ハ
厚きお厚情を謝し、お番茶水菓子などの持成し後、お暇した。耳庵お夫婦ハ日白一

泊として、予丈坂上にてお別し広尾に立寄ると、嫁のお産が今朝あつたと共二、四国に移住した
筈の久子一家が、列車満員で乗車不能で昨夜一泊し、お産に居合たも、凡てが因縁、この喜

を老妻にも伝へんと、急ぎ帰途についたが志木着ハ六時半寒月霜を踏んで、草履に帰りし
は八時近く、山荘寂として声なく、聞ゆるは杜の梢の葉すれの音のみ。

○縣君を迎へて耳庵翁の茶

十二月十六日

P 20

床に 二三日前山下孟茶にて 尺八 花時鳥のと 残花 が良く挿れ、名残のままの 茶入 金馬、茶杓 織
見付し半枯竹にて速製の 菓かれ 風炉釜、水指鈎

茶碗 柿の蒂 菓子松風 已上にて濃茶 十二月下旬の鉄風呂二木地鈎と云い、茶杓銘よむぎに至りて
銘宗見子 は、茶論家として餘りに矛盾、殊二度々最近ノお道具

とて、乍残念興味 △翌廿八日ハ (菅原通済氏同子忌、根津美術館満田君)
堀口捨己来遊 予も相伴

道具組ハ、前日同よふ、只菅原氏の目的ハ、予が数年前亡兄旧蔵たる巾凡六寸、竪四尺五寸程の
雪舟筆杜子美観賞の爲であり、この幅ハ小点なるも無類の名作として知らる物にて

予が翁の爲、無理に推挙した幅である 之より先 團男も突然来荘せられたので、今度の戦禍を
菅原氏も賞讀一時過ぎ退去さる。 見舞共に久々茶に親しは仕合であった。

○藤沢君耳庵の茶

十二月三日

P 15

藤沢君 が上の耳庵席にて金を掛けるからと案内を受けた。老妻同伴との事であったが、未知
の合客のある為遠慮した。

(合客)と云ふハ耳庵お夫婦、文務省の田山信郎 (方南)
晩翠軒主井上氏と予

床二 貫行家の集 囲炉裏 松永釜 水指鈎 茶入新兵衛 茶杓 空中 茶碗 瀬戸織部
冬の部 緑黒柿 銘白露 銘白露 銘鶴太郎

已上 ハ藤沢君耳庵移転に対する、祝言により、名幅から茶器全部提供せられ、茶碗鶴太
郎など、最もふさわしき銘である。茶ハ寂仙君のお手前、茶が終り広間へ動座

耳庵より母屋迄の山道ハ、松林間に長岳寺旧蔵奈良朝古塔など、三溪翁指定場所に据ら
れあり、紅葉は既に散りはてしても、それ丈静寂さがある。

食事ハ テーブル上、味噌汁、小芋の煮物 と云ふ、簡素である。田山氏丈合酒少量の特配もお主人
飯二碗数ノ子、香物 の心入れ

相当の名器数点がある。 漆画丸盆文字アリ 金銅 鳥獸文 鍍金、金装ノ同鐸頭、
其内最も目珍しきハ 輪ノ桶 朱漆綴 直刀

四方鍍金、青銅角牙嵌入 この外 新羅出土 唐時代蛤貝 合子 などがあり其展示が
旗頭 透蓋三足 香炉 銀平脱水鳥 あった。

田山氏ハ墨跡の権威者、井上氏ハまた壯年なるに、古筆画の趣味深きとは聞及びしに、楽浪遺
物に興味を持れるとハ敬服の外なく、業ハ中華料亭なるも温厚な人物である。

井上氏の研究ハ、其形式寸法から図様に至る迄熱心にハ耳庵翁も満足され、無筆墨蹟を掛られ、淡
茶を運られた。短い冬の日、夕陽西に傾き平林寺の晚鐘を聞く頃散会した。

○耳翁革新の茶

十二月七日

P 16

霜ハ 日一日と濃くなった。山荘の黄紅葉も落ちつくし、松林常盤木のみとなり、一抹の寂寥を
感じる。閑日月の無意味な生活の内にも、秋から山なす落葉ハ、農家にとり貴重

な肥料となる。食料不足、肥料の欠乏の際は、特に其必用を感じる。疎開人を苦しめる百姓
の中にも、森田老夫婦は貧農ながら、僅かなから食糧の補給を与へてくれる。

これに報ゆるのが、山内一部の落葉である。清掃後の落葉こそ、彼れえの奉仕であった。
勤労後の日々は一碗の喫茶に世相風雲のあり方を沈思するのみ。

数日来 戦犯者として、要職頭官が、相次いで招致せられ、去る三日ハ藤原岡部子らにも及び
昨六日ハ近衛公等が疾風の招致せられ、霜深き收容所に沈吟せざるを得ないと

は、国策に誤りしとは謂へ、国際情勢に対する、止りやまれぬ大戦の不利を感ふ時、悲
憤と同情に堪ないものがある。無聊に処在なき耳庵翁より今日又喫茶相手に招かる

今日の茶ハ 翁と藤沢君の 耳翁を先頭に予 夫人二老妻、お話ハ 東京より来た豊。

床を見るに何物もなく、フト墨跡窓、蓮子に 花太郎庵 椿一輪と云ふ異様さ、それにも
信楽踏花人が懸り まして奇異に感じたは

二ジリ口踏石上に白布が敷かれてあった。お主人にこの次第を伺い立ると、翁譚然と曰ク
近來ハ人手なく、いち草履の仕末も出来ない。お客の手数を、わらすも気の毒と考へ、私

草履は抜捨この白布を踏で上がれば弁理と考へ、今日藤沢君と合議の上実行しま
したと。茶道革新と簡素化を主張されるとは云へ、之れは又あまりの改革、

席人には古來人手ハ用ひず、各自、後客の為、草履ハ妨ならぬよふ竹簀子が用意せ
られている。明治以後富豪の茶にハ、お出道具屋店員とか植木屋などに命し、殊

更こう言ふ習慣つけられた所謂悪風である。何にも白布をしく迄もないのに、譬ハ一時の氣
まぐれにせよ、餘りの不可解の改革である。茶人の蓋を逆扱いにさまざま手法には、改悪とも云

へよふ。扱水指ハ鈎 茶入ハ 茶杓 銘狼子ハ予が 茶碗ハ 八勝館主 已上にて 利休再
金馬 今朝作りし物 手造黒 生の翁

春草盧の冬籠りは来た。疎開者の内速先引揚げられしは、谷口大佐一家、続いて田辺氏一家の引揚げと共に冬の山荘は寒さのおとづれと同時に淋しくなった。冬籠りに必用ハ何より

燃料の確保である。木炭など有る筈なく、周囲の枯枝、杉の落葉と粗朶の用意に、日々の仕事畑のお芋も試作ながら、初霜下る月の初めに採り入れ、凡一俵半の収穫を得たが、多収穫

種と肥料不足で、味ハ至極かんばしくない。それでも自作丈、尊くもある。台所の広い板敷を幸い、山主の許可を得大炬を切り、自在に釣釜の用意も出来た。

三ヶ月に渉る堂ヶ島静養中の耳庵翁も数日前帰山せられ、至極お元氣は喜しく、今朝早く藤沢君と立寄れ、之から志木研究所に出掛け、午后ハ本田さん宅にてお茶く

ださるとの事、都合よければお出と進られお受した。昼食後晴れし道を一里志木に着き、浅原某と云ふ社員と共に本田さんの社宅に出掛け、研究所ハ一万余坪の広大な用地其南端が

本田さんのお住い、社宅とて茶席などハないが、近來藤沢氏の指南で茶を始られている。先着の藤沢君が伴頭にて、席に渡辺岸岱筆龍の絵が掛り

火鉢 眞益 型の如く備られ 隣室六畳に移ると 二三筆 円窓に一体和尚の歌を 敷物など お主人の汲出 床に土肥 写せるとかけてある

炬にハ 阿弥陀堂 水指 木地 瀬戸の袋銀 茶杓ハ 予の贈りし 茶碗 唐津にて、お菓子 小ぶりの新釜 茶入 皆口 袋欄 茶杓ハ 自作銘古寺 粟入善哉小丸椀二

て濃茶が練られて洋服した。稽古始て間のないと言ふお主人のお手前アサヤカさは、流石一事業を司とられる丈と感服した。続いて藤沢君の代点でお淡を、茶碗一人里筒(一人箱)茶器水

指元のまま、干菓ハ夫人お手製のヲトシ焼、替茶碗ハ米金作志野橋祝であつた。社宅仮住にも、こう言ふ茶趣ハ漲っている。器物の高下ハ論ずる愚なる、茶趣の妙は主人

の心構へ、愛知春井在旧名望家にとりなりし、温厚篤実な本田さんの風格豊なるを敬服した。多忙の劇務の中に、栗の善哉干菓子のお手製ハ、お芋のお絞りにのみ続ける我れ人とも、面恥し

く、夕餉もと引留められしを辞退し社宅を出た。処が耳庵翁より、晩秋の野色を味はんと、志木から雑木林に入り、道に迷い、一里の道を三里もさまよひ、帰宅せざるは、暗い夜道を七時過ぎ

○文化会第二次会

十一月廿三日

P 13

新嘗祭 雨後の秋晴れ、初冬にハ目珍しい暖さ。今日は耳庵翁主催の柳瀬文化会第二次集會が催された。この文化会の主旨は、翁晩年蒐集せられし美術品及現柳瀬建物を財団法人組織の上埼玉

県に寄贈シ、お一家は、小田原板橋在建築中の新居完成次第、温い同所へ永住される下準備とか聞き伝えていた。戦後財産税と徴収ハ、各富豪財産の大部が徴税化する急迫制度を免れる手段からで

もあるよふだ。正午前早くも終戦初めて、田中親美翁も来られた。久し振り藤原家以来である、其後の東京の近情を聞く内、時刻となり、予にも同席せよと、母屋からのお便に、会員外であるが出席すると、

親美翁の外、海東鈴木の中配電正副社長、秋山光夫博物館館長、田中仙樵宗匠、栗山八百善老、栗田老、重松、松本主任と云ふお顔振れ

先づ広間にて、各自携帯の弁当開き、お馳走にハ祭日のお赤飯が并に、膳に汁、小芋の煮メ天婦羅と、数々の振舞い、床にハ光悦の短冊、露時雨もる山陰の下紅葉ぬるはをらむ秋のかたみにと云ふ

宗達下絵の掛られている、移と 床二 白描 画像抄 懸り 古銅花入 象耳二妙蓮寺椿一輪が挿れ 食後奥の新館広間二

書院へハ 鍍金の 炬にハ 霰松、永 水指ハ 寄せ竹 茶杓宗旦、茶碗 斗々屋平替へ 柄香炉 釜が掛る 茶入 無地 中次 一閑張り 茶碗 宗慶作里筒にて

藤沢君のお手前にて淡茶が進らる 筆者ハ、奈良法眼鑑貞とかで、お主人、堂ヶ島にて八百善主人 この間床の幅が更られた。古画山水 から、斗々屋茶碗と共に得られしと、茶碗ハ大疵あるも、夏茶碗用

の良い出来、掛物に対して、秋山氏の有益な画説あり、一同歎を尽し四時散会し、田中秋山栗山三氏ハ 山内秋色を觀賞しつつ、我春草感前に慰む帰途につかれた。親美翁ハ戦後の作品として写経扇面

型五葉を予に贈られた。文化会と言ふても他に何の議題もなく過ぎた。紅葉ハ今酣(風なきにおちる紅葉や雁わたる)

○耳庵翁と交合の茶

十一月廿七日 正午

P 14

宵からの冷雨は猶続く朝、母屋からの特使藤沢老の話によれば、この秋雨の静寂を幸ひ、貴庵で一服頂戴したい、午后ハ主人の催で返茶を差上るからの申込、一寸急速とて戸マドツタがお引受した。

席にハ 大石良雄よりお茶の案内に西条から到来の 云々の消息を掛け 釜、天明筋釜、水指 丹波 神崎定次郎宛 枝柿少々お届けする 香林院旧蔵 矢筈

茶人 道安好松 茶杓 霽庵作 茶碗 高麗堅手 菓子ハ お秋の急造にて、至極上出来にて濃茶 粟自作 銘ドン栗 銘千歳、不味箱 を供した。広間にハ

光悦巻物切 葱下 一 さらは志徒くもい路やかはるら無 の横物を掛け、鎌倉刻 袋棚に 時代の小硯箱を置き 絵 まつ濃し多草秋ふけにけり

晩茶などを供した。合客ハ(耳庵翁お夫婦 午後となり、お約束の返茶ハ一時中止 藤沢、古谷老人であった。)すると断の使、さてハ一杯喰ったかか

気にも留づに過ぎ内、又々 三時お 越しと案内に 夫人を初め田辺夫人母子二 久木庵 即ち お便で、山で花を見れた 出掛ると 予と藤沢老のお話で 且座席へ

など翼を休める未明の暁、霧に包まれ咫尺も見えぬなかり黎明を伝え、丁度朝陽と共に、この羅端の張帳がきけると展開される野火番の全望、点々する農家の防風林、平林禪寺の松林より南西に流れる柱には、黄褐色の雑木林を交え多彩の色調を添へ、麦畑の斜面と人間川を上流に荒川にぞそぐ柳瀬川の帯よふの柔くうねる堤に放牛の悠遊たる様など、大和絵画巻を捲ひるげし実感そのまま、平林寺晚鐘

の、幽につたわる秋雨にハ、牧溪筆の晚鐘其のままの趣きさえ感られる。草庵の縁先より眺むるこの武蔵野、月に良く、氷川の杜から昇る月ハ、草庵の部屋一面に指照し、為二

灯火を消して軒端に聳ゆる老双松の上に昇る迄、あかめ観月に夜を徹する折さハある

この恵まれし環境に身をあんずる我らの仕合にも、終戦にまさる食糧不安ハ、刻々に迫り、主食不足ハ元より食塩さハ事かく苦迫情態、この苦難は我人とも味ふ現在、自分丈ハ自覚せるも、堪へ難ハは主婦の悩み。

今一ツは用水の不自由、この用水も、先頃迄は、松永家を通じ自家揚水の地下配水設備であったが、最近それは不給となり、山下遠く井水を求める外、途なく、凡てが原始的生活に戻る有様、不慮の怪我を床中に養いつつ、出遠佳境の風致を賞しながら、降伏後我国の将来の姿、在滿州消息不明の長男の安否や、我ら今後

に来るインフレーション生活に処る不安など、去来する雲霧の如き迷想にふける

この療養中、堂ヶ島静養中の耳庵翁の便りに、怪我についての見舞文のすへ二、このな狂歌一首あり
元氣にていそぎスヘクル山道は おいおいに老のかさなる山坂は
ゆっくり歩き茶でもおあがり コロ木でもおき急がずと行け

○藤沢寂仙老口切の茶

十月廿日

P 11

山莊主 伊豆堂ヶ島静養中の山莊は、閑寂その物、蔬菜に寒さを凌ぐ薪の用意、他ハ日々々の喫茶
境に国情の行所を偲ふのみ。同じ山莊母屋に疎開中の寂仙君も、谷口大佐の軍人解体後、郷

里三引揚られし耳庵席に移転されしがと招かれ 幸い東京より来合せた豊を同伴した。豊ハ仙樵老同
今日山莊の人々を招き口切を催すから 門の藤沢老とハ旧知である。

お合客ハ (山主二子夫人、千代子、花子兩若夫人) 原、三溪、翁筆淡彩秋景山水
田辺春子さん、佐藤三子 花入ハ予の拙作尺八二白玉一輪が挿

れて双飾り 釜 菊地紋 水指 眞の 茶入 唐物 茶杓 久須貝疎安 茶碗 宗八黒 替
眞なり 手桶 金馬 作 仁清写 菓子

お手の布巾絞りにてお淡が振舞れた。お婦人方ハ寂仙老にお茶の稽古中とて、お手前も人
念に終られ、無我流の自分にハ、よい見学であった。猶三溪翁の幅ハ余程前書にて、

大雅風の筆致である。この幅ハ翁沼津宿舎での作を、松崎町長二伝り、先日寂仙君堂ヶ島
来の際町長より譲られしと、三溪先生の遺筆を前に、雨中の雅会に恵まれし嬉しさ。

○珍客来莊の寸閑

十一月三日

P 11

明治節の佳日、明治陛下のお高德は不安であった天候も例年に見る好天の恵み、本来なれ
は民草おしなべ、お誕辰の佳き日を寿き、輝く国旗を軒端に掲げ、維新の鴻業

を憶ふべきに、国旗掲揚さえ許されぬ古領軍の厳達に旗の影さへ見られぬ此の朝、自分ハ其の指令
に属せず、軒端の柿の実る枝に掲げた。敵の軍門に屈したとハ言へ、国威回復を見れば止まぬ国
民として、老妻は日々少量の食料補給を求めに農家行が日課、颱風雨に荒されし畑の施肥二
夢中の折柄、突然珍客のおとつれ、それは(服部山楓正次氏である。)

氏ハ今母屋を尋ねたが、老翁ハ伊豆行不在、兎も角お互の無難を祝し合ひ、老妻ハ不在ながら、お
湯も沸きお茶でも進る用意中、老妻も帰り、お食事ハ弁当携帯なりしも、母屋から食事の運びし

鯨の干物、大根ヲロシと云ふ、詢に簡素な物にて食事を終られ、

掛物ハ東京からのお遠来の意味にて、室町時代無款の杜子美を掛け、茶碗空中作信楽筒二
て一服淡茶を供して、降伏後の都の様など語られ、敗滅し行く世相に感慨を深める折柄、母家
よりお茶の用意が整い、服部さんに差上りたいとお使二同行する。

今日の母家ハ 奥さん生母の供養とかで、平林寺敬山老師を招かれ誦経がなされて取込申
その為かお床にハ平林寺開祖石室善致師墨蹟が懸られてあった。水指ハ鈞

茶入 不味好 伊川下 夢に蝶 時絵 松花堂其筒 唐軒花押 菓子ハお手に
絵漆卓斎作 金輪寺 逆桶 柅竹 茶碗 の赤染

にてお茶振舞があり、干柿蜜柑などが進られ、四時過ぎ、氷川神頭まで服部さんを見送り、夕陽迫
る頃福善寺の晚鐘を聞きつつ柳瀬堤を草廬に帰る。

この振舞ハ藤沢君のお手前にて、其の挨拶に、お淡を差上げる積りですがお茶ハ代々木の杜の上茶、お望なら
ば濃茶で差上りますが、山楓氏それは結構是非お手数でもお手前を願たいと望まれ、イト可重に練ら

れ、次客の予も相伴すると、意外にも強弾が二ツも底に残っている、流石物に屈せぬ自分にも、宗匠
お手前を恥めたくないが呑み干切れず、そのままお返しした(彈丈残し)茶碗の内部を改めし宗匠、之

れは失礼と平謝りの体たらく、所謂猿も木からの譬へのとうり
慎むべき教へである。

○本田理事長の茶

十一月廿一日

P 12

香合ハ上に牙散入。後席ハ銅羅 引き入れ 床にハ 躑信染、花 水指 備前 茶人 黒棗 茶碗、空中
茶杓ハ 伝朱徳作元節 建水 ハンネラ にて 以上 種靈 不白花押 茶碗 宵待

が、茶碗外三点は、他の借物、御蔵品ハ地下にモグッテいると言へ、まだまだ一、二公用はお手元にあるの
ここに翁の茶道観の現れである。

時代の簡粗は我々にも何の異存は勿論ないが、物にハ丁度がある。ことに其人の地位にもよる、この見
致からでも、今少し趣向もあるべきに、猶花入信染、茶碗信染、建水ハンネラから見ても、其色調
配合には、翁の著作茶録の思想とは、餘りの相違の甚しき二後輩は迷はざるを得ない。
学者を交へ、茶の革新を主張せられ、それが実行にうつされたのが、若しこの前程であるとしたら、地下
の利休居士からも、異儀指案がありそうだ。

何れにしても翁著文献との喰違は甚しい。

○松永夫人留主事の茶

十月六日 正午

P 8

お主人 堂ヶ島行き後の山荘は、夫人の東京行など、家族の連中も羽根をのぼしていたのに、突然襲い
しこの地方未曾有の大洪水に各所被害を生じ、夫人も帰山せられたは数日前

藤沢君を使い今日正午、留主事に茶を催すから、老妻と共にお出でくださいとの事でお受した。
この日堂ヶ島からの便りに、十五日頃伊豆長岡水戸幸へ出掛るから、其頃予に長岡迄来遊如何とあつ
たが、この時節長岡行きハ不可能なのでお断りした。

時刻が遅れ、田中刀自のお迎えを受け、老妻をうながし母屋へ駆せつけると、奥さんハ姿を見
るなり、アンタ方は何をしている、早くしておくれ、私一人でヤッているから大変と。例のお気性、サテハ此調子だと、お茶
でなく、只のお食事がと、縁側を見ると手桶の用意、ヤハリお茶事とうなつた。

台客を見ると 田中刀自、田中の若夫人、田辺春子さん、藤沢君、八名 歳は取りたくない物、ワシは年長
重松老、安太郎夫人にすら夫婦の として正客に祭り上げられた。

玄関 寄附板、不知秋風 鉄大ヤツレ 火の気なく
戸に 春屋一行「遠寺晚鐘送來」の一行に、 風炉釜に ええ附。

お挨拶ハ主人不在を幸ひ、私の趣向で皆さんに、一服差上ります、手不足でお構出来ぬかと、
向コンニヤクみそ酢 汁地みそ加子、椀素麵松茸、天婦羅、香の物、お湯

お菓子ハ、お薩の 名残気分のお献立、お加減も近來お当家に目珍しく、食生活に悩む折とて
お絞りを、おいしく頂いた。お主人では望めん馳走である。お菓子を頂き、動座

元の席に お火が、南はん芋頭、池田蔵 茶人示哲 袱紗包 茶杓魯堂作
水指 ハンネラ蓋 漆桶 夫人への送筒

茶碗、蕎麦、建水 塗曲、已上にてお濃茶を頂く、お婦人丈お手前も見事に
大振 水指ハ鴻の池伝来の名器として申分なく、茶碗ハ数度拝見しながら、土
も柔く、色目よく、茶人ハ平凡、茶杓魯堂作ハ目珍しく、亡兄ハ自家用に削りし事あるも、他二
贈ることハ稀な丈。従つて我らにハ一本の遺物さえなく、それ丈懐しく感じた。

お主人の蔵品ハ地下格納以外、お留主ともなれば、ドコからともなく出で来るのも面白く、お留
主事に拝見するも喜しいことである。山荘移住以來今日の如く和氣に満ちたお茶は初丈、奥さん
亦お小言なく、自由のままの振舞にて、ご満足であった。

紅葉迄にハ、まだ間もある山荘も、初秋のケ配野に田の面におとづれ、日足の早き夕日かたむく頃散会す。

○崑山家より藤原龜彦翁別れの茶二電報来る 十月十二日

P 9

去月廿七日 長雨の後、母屋の留主宅を訪れの帰途、耳庵茶室裏迄来た途端、不覚にも、無
数落ち散るドン 粟を踏み横倒に顛倒、左胸部を強打し、一時起き上ることも出来

なく、帰後後局部の疼痛甚しく、早速医士を招き手当てしたが、田舎の医士で内部の故障の判
る苦なく、数日安静を続け、幸い痛みも薄らぎ、母屋の留主事茶にも列席した。

処が、久し振り入浴すると、それから亦痛ハ逆戻り、左胸骨に異状あらんと、赤十字病院の診察を得る
為今日出京した。胸部の痛む体を車中に繰れ、診察の結果ハ肋骨に疵を生しているとの診断で、手
当を受け二三日毎に病院通いの宣告を受けた。公立病院とて、診察薬費共、僅三四五十五銭とは。

扱帰宅すると家内ハ出し抜け高橋に会いましたかと聞かれた。突然なので、高橋が何者であるかを
思い出せなく、よくよく聞くと松永家の使用人である。落着いて事情を聞くと、アナタが出掛て間もなく
崑山さんから至急電報来た。其電文ハ一二ビルキウニフシハラヨムダ、オイテマツとあり其為高橋

を頼み赤十字迄、電報持せ、わざわざお知らせしましたとの事であった。病院ハ診察から、薬局迄永い時間待
たされ食事も薬局で済ましたのに、高橋がウカツな為出合なかつた訳、折角のお招きに如何にも残念

藤原さんをお招きなされるのは、先夜の返礼ばかりでなく、或ハ当分のお別れ意味も、ふくまれしならんに
と、返す返す口惜き思いであった。

山荘の秋色 荘内唯一のこの春草庵を、山主百庵より附与せられしは、この苦難の内にも我らは何より幸福
である。夏の曇さも林間山腹とて、他の炎暑より凌ぎ良く、武蔵野を渉る涼風に恵まれ、

秋ともなれば、山内紅葉に彩れ、無数の禽鳥の囀る音は松嶺の音とも和し我らの友となる。
刈り揚げし稲穂ハ湿地の田圃とて、矢来を組みて掛る様も、この地方のならわし、巧に組みし矢来の杭に鳥

に着陸后故障しまして其為、八日間と云う物は茶子に待機しました。其訳ハ、修理に要する材料を満州より取よせなくてはならぬ為で、然し長途のお用も無難ではたしました。

当分 隠居の体となりましたので、急に皆さんにお越を願ひ、殊に仰木さんにハ、この前島山さんのお催しの際、空襲でお越しなかつたのに、今度私の催にお練合せくださった事ハ皆様と共に

仕合です。山田さんハ格外急に申上しに拘らず、之又仕合ですと、いつもながら温情あふれるお挨拶の後、近頃は、小清の包丁も頼めず、急なことで材料も調いません、お粗末な手料理を差上りますと。

自らお給仕にて 向 胡麻 器ハ 祥瑞丸文 茄子輪切 小鮭の 蓮花形、椀 馬鈴薯、人参
あへ 器ハ 肥後三島 強魚 エビキス 野菜 器ハ新物 豚肉薄切 器 染附手鉢 葡萄酒の絵

ツマミ 眞菊 したし物 眞菊 天婦羅 器ハ新物 手鉢 トマト附合 器 葡萄酒の絵

小芋の煮メ 自園裁 外ニウキワト 湯針 八寸蟹ムキ 枝豆 香物浅漬 酒器ハ 銚子の外
染附連形平 胡麻かけ 生舟 備前尹部

徳利 粉引ハ 金襴手 葉子 黄粉 二色のお萩、已上にて お炭直し 鎌倉刻時代一輪牡丹
益田さん遺物 杯 井戸 葉子 餡 香合 銘星月夜楓軒旧蔵

炭取 時代和組、鈍角捺、釜敷七宝組 灰器 記録の通りお手料理であつたのは、其材料
羽根野雁、火箸八角象眼、灰さじ 黄銅 南はん、からも、うかがはれるがそれ丈、お心こもり

時局柄にも適い、頂く方にも華美にならず 其の 食器丈ハ祥瑞の外染附連華の鉢ハ肥後焼尹部
殊に名残として申丈なく、訳ても どの組合も美に化せず任をそへた。鈍翁お遺物

粉引 徳利など便出も増し 特に 香合ハ吉田楓軒翁愛蔵にて、ハ、とは寄附一首とも、つながり、興味
お心こもるお振舞 鎌倉期中の優品、銘 星月夜、深く、茶略の妙をと思ふ

中立ハ 広い庭に面した腰掛け、斜面ある中服に響ゆる宝塔の九輪ハ夕闇ながら、金色輝き横に楓と
巨木の間に、この広い庭にも、蔬菜補給の為に菜園と化している。程なくお自慢の銅鑪ハ一点又一点

太と細く声えてハ杜と流れて消く。七点終りて、上水に身を清め
正客順に再入席すると、後座床にハ

「つきを あまのよつきのひかりもあかければ 筆者について親美翁の説では、貫之集とも称するが
よめる くらふのやまもこえぬへらく」 おき風集とも伝へられていると、今宵仲秋の月に遠州目を見

る感傷的消息との関連に、お主人のお得意ばかりか、この情趣にしたる客の幸福云ふばかりなく、窓外
アタラ雲に妨げられし共、この歌にもある通り、月は心の奥までてらし、難行苦境の時局さへ乗り越し

得よと、訓さるやにおもわれる。水指ハ 本地の 茶 萬石衛門作 銘鳥羽田 (友雀毛きいておりぬ山城乃
曲 入 落穂手 鳥羽田の面に落穂ひらふと)

茶杓 澤庵和尚共筒 茶碗 高麗 銘無一物 建水南はん 如斯道具組内に、温客微笑と共ニ
銘虫 箱守守直斎 雨漏 羅藤小 談話を交えながら見事なお手前

にてお濃茶代々木の杜を練られ、巡拝服した。お茶器落穂手ハ、田面の秋を思わせ、鳥羽田に照らす仲秋ニ
茶杓にかよふ虫の音も、ふけ行く秋の情景こもり、物寂びたる中にも、季に応じ時に對し自由自在の宝

器を駆使せられながら、無二物と最後のとどめを射れしは、実業界は勿論、難局の台閣に智謀を發揮
せられし老巧者こそ思われた。名残に本地曲丈ハと言ふならんも、落穂手の寂と、雨漏茶碗ハ堅手

同よふの、然々堂々たるとの取合にハ、型に這るよふもなく、其対照こそ、総合的芸術でもある。
特に南はん繩簾建水ハ拝見する毎ニ其名器であることを感じる。建水として唯一と言ふても過言でない

多難 の要職であるお主人の長途の疲れも忘れ、このお振舞の内、私もイツ何時マッサーから招かれるも知れ
ぬ、今日皆さんのお出を願ひ、嗜の茶に一時を過し、心置きなく氣も軽くなりましたと意味あげな

お話にて、私はひそかに晩雲翁のお覚悟が、うかがわれ、感慨無量であつた。島山さん亦査察史の
要職とて、お同列ニ意義深きお手前を拝服せる光栄を感銘し、厚くお礼を述べ

島山家 に引揚げ一泊した。この一泊ハ般若苑広間を寢室に当られ、歓待いたり尽りで、翌朝食ハ
豆腐あん掛、卵の花の外玉子、葉山からのホーボー煮附 みそ汁と云ふお馳走の後

菓子 羊羹にてお淡を頂き、漸く九時過ぎお暇した。この際奥さんより抹茶二十匁罐、伊勢海
老五尾、お主人自ら又餅米二升を贈られシ上、中食弁当迄賜り、お夫婦のご厚情を謝し

主人の官省お出省を門前に送りお暇した。
藤原翁ハ後招致せられたが、病体の為自宅出頭延期となられた 要ハ翁の徳行の表 からと
思はる。

在京二日間 意義深きお茶に列した外、島山御一家の望外のお厚意により、予定の雑用を
終り、埼玉草廬に帰りは午後二時過ぎ

○本田氏送別の茶、耳翁催 九月廿九日

本田 さんハ元東邦志木研究所長として前所長海東氏の後、引き続き、現在に及んだが、同研究所が
慶応大学に寄贈せられとかで職を辞し、郷里愛知県に帰省せられのを送る為にと、耳

庵主催 茶の催である。氏も近来耳庵翁の進にて、藤沢門下として茶に親れている
合客ハ主客本田氏、鈴木理事、予、田中刀自、一子夫人

玄関 寄附にハ 猪頭仙人の幅 番茶が出て 床にハ 季節の歌物で 鉄風炉 が懸り 懐石ハ
唐絵 且座席ニ あつたが記憶ナシ 釜尾だれ

向 野菜の器 新古 汁 地みそ 飯丼一碗 野菜大福羅 と云ふ 翁近来独創の新態制、所謂時局
酢物 寄物 飯加子 香の物 対応式献立、従つて酒杯なし

菓子 黄粉 ここにて お炭直しハ炭斗藤組唐人傘 東大寺瓦釘 天平 釜敷新 以上にて中立
お萩 執時代細打、羽番野雁、火箸 年記

前日、其別の茶を
備された。
茶杓 朱徳作
茶人 不白花押
茶碗 信楽
空巾作 銘 背
水指 手元用
葉かん 菓子糖

連客ハ 志木研究所長本田氏、同鈴木理事、田中仙熊宗、
粟田天青老 予 已上 鉄風炉釜、香合無地独楽、
にて前茶にてお濃茶を頂き

食事は簡粗な 并飯にて、右の内茶碗空中ハ予の藏品、茶人茶杓もお借ものにて他ハ翁の藏品である。これは藏品の隠匿埋蔵からである。

然しこの不自由中にも、釜を懸け茶を別ち、暫しの別れを惜まれる心境をおもえば、翁の元氣回復をお祈りした。

○藤原暁雲翁戦犯予期の茶 九月廿日夜

終局後 起る問題の内、特に我々の憂慮する戦犯者の取扱いであった。戦争の結果は悲惨の終局を、勝者は戦犯として其罪を問ひ、国民亦其の無法侵略の非をしらすも、其因遠

は国威宣揚に基く愛国心からである。只其の間行き過ぎ停戦の期を逸した迄は主として軍閥者の責任の重大さは、この非局を演じ其の罪を諷すも亦止むを得ない痛恨事である。

マ元帥 進駐以来これらの所置は実行され、現当局者は元より、戦争開始以来の頭官関係ヲ初め關係高官の戦犯として招致せられる事となった。我等ハひそかに、前運輸相として亦重要職に就かれ、国家に貢献せられし、暁雲藤原銀次郎翁の身辺に不安を感じつつあった。

既に小磯国昭將軍、岡部長景子等の招致せられている。自分らは、去る十六日耳翁望ヶ島行直後先づ老妻胃瘵で倒れ、続いて予又其の看護中発熱し枕を并ふこととなり、山上の二人替二

途方にくれしが、幸ひ耳翁出発と同時に一子夫人ハ東京行きの為、千代子若夫大がお留守の多忙と三人のお兄ある中を医士や食事に至る迄、肉身も及ばぬ看護をつくしてくだされ、自分丈は

十九日に至り熱も七度迄解熱し一ト安心の折、この夕電報と言ふ声、発信者ハ、
藤原銀次郎翁 であつた。電文にハ、ハタケヤマクルニ〇ゴゴ四シコイとあつた。

予定した亡兄祥月命日明廿日護国寺墓詣も中止せることと躊躇したが、不安と感じた戦犯招致の相い次ぐこの頃でもあり、何にかそれらに関連の催しではあるまいか、正客畠山さんである以上或は

そんな意味でもとも考えられ、食事の注意サエすれば大丈夫と、お受の急電を打電した。乗車券も安太郎氏に依頼前日求めて置いた。老妻又幸い小康を得、出京にも不安はなかった。

志木駅を九時乗り、先ず畠山家を訪ね田舎土産の薩摩芋自作を呈した。お主人ハ不在、奥さんにそれとなく、藤原さんのお催の様子を尋ると、奥さんは、先達私の内に、藤原お大婦田中中村さんを

お招きした折、アナタが空襲の為お越が出来なかつた為、藤原さんは、私夫婦と共にアナタも一緒に、それに山田の憲さんを加えての事です。特に今日の催しは、現在の世相ゆへ、極秘にどの

ことですが、時刻が四時から故、今晩ハ一泊なさいと進られ、広尾か尾藤泊りの予定をかへ、お世話になることにした。藤原さん行き迄時間があるので、お淡を頂き二部隊に達朗を訪ねた。

途中四谷見附当りから、三番丁竹町辺にハ既に、進駐軍の監視兵が、武装姿で警戒している。其半面、我旧兵士等ハ非武装の丸腰、国威ハ地ニ落ち感概に堪ない。処が達朗部隊ハ既に解隊し、達朗ハ一週前除隊と聞き、私は嘩然とした。迹にて聞けば、嫁の疎開先に帰還していたと

親の心児知らぬとは、この事。病体を引摺りながら、他の用件を終り再び畠山さんへ
お主人も 帰宅され、山田憲太郎君も来着。紗の和服白足袋と云う戦前平和時の服装、
お主人も 同家で車に四人 藤原家お指定の東側茶席前より入門す。

出迎しは旧山澄の店員、浜町一帯の爆撃に横死した一家の惨害を慰問して、寄附前に出ると、清浄された露地の打水、巨木樹林にの奥にハ莊嚴と聳る大宝塔は亡兄移建後既に古彩をおびている 邸外雑然たる四囲の焦土の中に、この藤原家の災害をまぬかれあるは、其の人により幸不運ハあるとして

も、暁雲翁の徳行と、大宝塔内安置の仏陀の加護からとも供徳の程を感じた。それにつけても、お邸内の無難であつたことは、我々迄も大きな仕合、今日の相伴の恵を得られた。

さて今日のお連客は
畠山さんお夫婦、田中親美翁、予
山田瓢庵氏、中村好古主人

お寄附 一間通し上げ床ニ 仲秋の月何方にても初もくろきこと
遠州の消息文 雨ぞとばかり申して空おなめて云々に 一夜の月と■らに見すらん

とこの一首が書き添へあり、今宵のお寄附ニ、これ程の通幅やあらん。数日前関東一円を襲いし颱風後、定まらぬ雨後に対しても、一同お主人のおたしなみに敬服す。地袋上にハ稲穂ニ鳥追の時絵硯箱、見返し水二菊

瓶掛 鉄瓶、汲出朝日の新物、唐物、角切、蓂盆、火入、黄瀬戸、目珍しい下廻りの、名火入で
振出美土呂焼、盆、唐物、長、蓂盆、足附、作行と足付、黄色のさへ、ある。

遠州文の歌意、稲穂の硯箱時節柄お取合の巧妙なるは、
御藏品の豊からでもと徳内、お主人お迎附、前例ハ正面庭に例なるも、今日ハお人口からであつた。

畠山 翁を先送で 古備前 床に とある花入 秋草色数 釜、山城庄兵衛作、布袋、ツマミ、
入席すると 銘唐天、二、が挿され、メン取筒、共蓋

風炉 宗開好 問もなくお主人出座され、今日ハ突然の催しにてよくこそお出くだされました。時局柄
唐金四方 催は如何と考へましたが、私が査察使として満鮮四十日の予定が、八十日の費し

其間各地で出会まして、殊二京城でハ、出立直後のあの大空襲にも遭ました。満洲国から私の為特

に提供された、大旅客機で満洲飛行中故障なく飛び続けましたが、帰途内地米子飛行場

それが為か最近北柳瀬方面にも騎兵部隊の駐屯を見る、山口高射砲隊長の話では、軍ハ既に敵の上陸に備へ、此周辺を防塞地帯に予定しているとの事、落下傘部隊に備ゆる騎兵の存在だと

深刻なこの様相何時戦場化せんが不安はつのるばかり、只運命にまかせ外ハない。

床屋に行くのも町迄のラックさに頭髪も蓬々と伸るにまかせたが、今日の雨に、野良仕事も出来ず、床屋に行く

と臨時休業、帰る道草に、柳瀬堤の野の花を手折り籠二花甘草二節の尾を挿し。

床二三溪翁筆杜子美の絵を掛る。午后母屋の奥さんが郵便物をお届け下、主人も元氣なく不機嫌

で困るとノ事であったが、**耳庵翁** が山ノ下から登つて来られ、お蔭で元氣が回復したので、下の古谷老人を見舞

私も元氣になった心祝に之れを進呈しますと、去る十七日、数万金でも買いますと迄言はれて持歸られし破れ経筒に熨斗にて附て指されたにハ、意外であった。予は元氣回復は私からこそ

お祝すべきに貴重なお品を頂戴してはと、タツテお辞退したが、翁ハ病氣全快祝いママーと切に進らるので、場合が場合押返すもと考へ改めお受して厚意を謝した。

翁ハ又畑の様子を眺めながら、作物に障害ある立木は貴老老思いのままお伐りになつて新にでもなさいと附加えられた。此心境の変化ハ翁心身疲労の作用とし考られぬ

翁ハ愈々柳瀬も危険明日から予定通り貴重品丈、奥多摩に輸送し、他はドラム罐十個に密封し地下に埋藏した事ハお承知の通り。家族移転も期を見て実行するとの事であった。

○八月十五日の憶出

去る六日 広島市に於る落下傘爆弾（原子弾）投下ハ人類事物壊滅の惨害を与え全市全滅の悲惨事であった。この新兵機仕用についてハ、スイス国当りより使用停止の抗議さえある程の恐

るべき偉力にて、独逸降伏前にも使用せざる物であった。続いて九日亦もや長崎市も此兵機を投下し、之亦甚多の死者焼失家屋を生じ米軍の暴虐は我国に對し決戦を迫るのである

事態の ただならぬを知り、十二日危険を犯し東京行を決行した。目的ハ東京一段のこの難局に於いての空襲と、僅かばかりの銀行預金の払出し。最悪の場合を考慮して

途中志木附近には敵機の投下する、無条件降伏勧告ヒラを見る有様、渋谷駅から焼野原ト化し只一軒残る第一銀行支店につくと、多くの人ハ払出して殺投しているが、之を見た自分ハ、此の実情

では必ず（モラトリアム）実行は確実と思つたが、この際国民の自覺なくは、国家は経済的にも破滅を感じ、我預金ハ僅少丈老後の生活にと苦心の物でハあるが、全確払出しは、国民として

最悪に遭遇する共、指控へべきと一部を引出し、四谷三菱行にも同よふの処置を採り、広尾に立寄り帰山した。帰山後老妻にも愈々最後の段階近きつあるを語り覚悟を■した。

p 528

十五日 朝の行事を終り食事の折、安太郎氏が来られ、父からの伝言に、ケサの二一スに八天皇御自ら大放送を正十二時から全国民にお訓なされるから、事重大と思、お夫婦共お出にナリ拜聴せよと

事であった（自家ラジオ故障の為）このお知で、ここ数日の情態から、ただ事なぬと、夫婦共服装を改め母家に十一時過ぎ出掛けた。ラジオの前にハ耳庵お夫婦の外、千代子夫人、田中誠一君母堂

同花子夫人及び田辺夫人二予ら夫婦であった。

御放送ハ支那事変以來八年ト一ヶ月国民揚げて光輝ある国家の為、多くの犠牲をつくしたが、此事態を猶続けるにハ忍びぬ、依つて遺憾ながら、ボツダム宣言に隨ひ、戦争の終決をつけると、切々断腸のお勸諭を拝した。拜聴する刻々のお声を聞く我らは嗚咽にふけた。

ボツダム宣言の苛酷な条文にてこの無条件降伏、こん後の日本ハ領土の褻奪ハ滿州朝鮮ハ元より台湾樺太等を失ひ、本州九州四国北海道の四ツの島を残す丈となり、賠償、戦犯等、耐え難き事態に直面した。

御放送が終つた直後意外に感じたは、耳庵お夫婦の態度である。翁ハ、サー皆さん戦争もおしまい、お茶の世の中になりました、お祝に皆さんに一服差しますとお茶の用意

を命られる。奥さん亦、私ハ明日から戦時服を改め、東京に齒の療治に行きますよと、大ハツヤギに、此の指導 的立場のお二人の態度、何とかこん後我々の行く道でも指示さるべきにと奇異を感じた。

お茶ハ、耳翁のお手前も菓子も翁提供の外、奥さんハ、之れは今迄トットキですと角砂糖其外色々この頃見かけぬ菓子も振舞れ、如何にも愉快であった。

我ら夫婦は、何にか失神した迷想にて山内を、耳庵席谷口部隊宅前まで歸ると、夫人が飛出され、あなた方もラジオをお聞でしたが、私も宅のラジオを聞入りましたが、陛下のお言葉に胸

通りハッキリ聞取れませんでした、ヤハリ降伏でしたかと問はれた。流石軍人の妻女、軍の降伏に迹は無言のまま屋内に這られた。其背姿に我らも強く胸を打れた。これが記憶すべき今日

日の実相であった。

（影印本下巻の頁番号）

○耳庵翁堂ケ鳥逃避別れの茶 九月十六日

悲憤と 慟哭の内、米英軍進駐遣部隊ハ愈々我本領に上陸し、武装解除を断行し、続いて、去る廿八日マッカーサー元帥ハ厚木飛行場に着陸した。

この米英軍進駐に對し、一部国民の恐怖は絶頂に達した。其理由は、暴力と褻奪を恐れただからである。この山荘でも耳庵ハ特にこの点を重視せられ、貴重品の全部の隠匿に全力

を傾られ終戦前以上腐心せられ、健康ハ益々焦衰の度を加へられた。これが為、其静養の為、今日より、藤沢君女中同行堂ケ嶋行を決行せられた。之れが為、其

此間夏野菜の手入れ、トマトの栽培、草庵周辺の清掃、耳翁一家の再逃避準備の奉仕に雨期も過ぎ初夏となった。原三溪大人より寄贈せられしこの春草盧は、河村瑞軒翁が淀川改修工事を掌りし折の翁構想の見分所遺構文に、それに因み三溪翁の指定により、山荘東山中腹武蔵野川越街道を、柳瀬川堤を一望に納る好位置ある朝に夕に霧みては晴ゆく野の自然、雨足を眼下に眺める五月雨の頃、作物の伸びゆく嬉みは、疎開者の身ながら山主の厚意を深く感銘しながら夢と過す。

寂れ行く 山村の姿、多の若人ハ軍に製産に、残るハ老爺か婦幼子のみ、荘内とさやくは山鳩に小鳥の声のみ、夜ともならば、老妻と共に北支の野に、又自居を衝る我が兎の安否を祈るのが今の境界、訪れた。祖先さまたれ勝の実現でもと、机上に神護寺経をここにもお盆会 床に鈍翁筆本来無一物の一行を掛け 藤原時代連片上二

六朝鍍金仏を飾り 三畳壁床 唐金水 茶人 蓬雪好 茶杓ハ 前日藪竹にて作りし 孟蘭盆会を憶ふ 小間にて 寂竹割蓋 無銘の自作

茶碗 松浦家 信楽筒 菓子 仏壇供への 祈りつつ一服の苦味を吸っていると、 旧蔵 銘宵侍 団子の残り

母家からの使で、四時頃からお出掛けなさいとの事、扱ハ耳庵翁も、藤沢宗匠にお茶の稽古日とて、お盆の茶でも出るのかと、老妻に命じ、砂糖抜き塩餅餅を手挽に作らせ、それを土産に用意した。

戦前ハ茶の湯にハ本所四ツ目越後屋を初め、千茂堂、ちまき屋とかの名代菓子でなければと、金持連ハ甘味を誂いし物だが、砂糖如か塩さへ手に入らぬ今の世の中、不自由の内にも心の味にと

処が、これは又意外、何と云ふてもお盆と云ふに、野良にハお百姓の姿さえ見へぬ今日、耳庵ハ仰木さん藤沢君ハ今日畑の草採をして、少し一緒に相手をお願いしたいとの言葉、稽古日と云ふ今日

疎開にお世話を受けているとは言へ、このお盆休み迄茶の宗匠の草採命令はと、暫し嘸然としたが日頃敬愛する耳翁が、第一線に活躍され多くの部下に対し力ナリ苛酷であつた事の噂なり我々にもこの点ハ

うなづかれる経験もありしが、其平面情味に温き事も他に秀れいられるお性格豊なるに、これも戦時のイラダタしきの現れからも考へられる。自分は斯く考へながら、折角ですが今日ハお断りしますと

引き揚げた。ここにも耳翁の日常が如実に現はれている。我々は現在この雰囲気生活せざるを得ない直面した現実である。翌日からは奉仕中の茶畑剪入れが続く、暑い炎天下に

○耳翁経筒取り返し門答

七月十七日

P 526

お盆 直後の十七日ハ亡母の命日、入梅の名残り雨に畑仕事も出来ぬまま、母への偲い出に 床に松花堂消息佐川喜六宛 孟蘭盆会に若い衆の為説経している。貴所の

茶振舞い御入念の事と思ふが山は涼しく、チトお出かけ候間云々の幅を掛け、時代の籠に甘草、野イチゴを掛け、鍍金の仏像を安置し、窓外の雨を眺めながら、茶杓削に餘念なき折、山道を人の来るケ配い。この大雨に村人共かと思いに、之れは又奥さん連に藤沢老を従え視箱二帳面片手の耳翁三人連れ。俄の出来に何事ならんと訝しに、兼てよりこの春草盧備附大金庫が移動も出来ず其まま貴重な器物が保管されてある。場所は台所、老妻ハ雨の中を附近の部落に昼の食料求めに出掛けて不在、耳翁ハ藤沢に命じ金庫の開扉を命じられた。

大茶人 持つて自任する翁としてハ、一応床の幅でも見ての事か、縁側にアガラをかいたまま、縁先に咲く白百合を眺め、お主人庭に花のあるの二部屋に花を挿られるハまだまだお甘い仕方と、故意にもひとしきお挨拶。この程からこの豪傑耳翁にも、時局に焦慮気味が見るかお気の毒な程の衰弱振り。疎開の人とも神経衰弱でもあるまいかと氣を採すが、今日のお振舞ハ其結果でハあるまいか

たとへ翁よりの借家でも今ハ我城郭、無仕附に挨拶なしの台所侵入に私ハ不愉快を感じた。 家内ハ不在取乱した台所の侵入に私ハ整理する迄ハと拒絶したが

こんな事から翁は部屋に這り、これは良いお花よく挿られてあると、褒めるのかケナスノ妙に一人言、只掛物丈ハ読みながらシキリと賞讃していられたは笑止でもあつた。処が

去る五月頃であつたか、藤沢帯同で関西中京旅行を試みられた際、翁ハ多くの器物を持ちながら、予の所有二代常慶作銘独楽とある黒染茶碗、南ばん芋の子茶人二品を小振りであるから、旅持に至極弁りと借用を申込み、旅先での物笑の種とお断りしたのに無理に携帯せられた。帰宅後、茶碗丈は是非お譲りくださいとの所望なりしも、自分にハ常慶作の稀れなことにしてお断りしたが、それ以来度々の所望に断り切れずお譲りした。其折無心の替りにと口辺申ば破れし（金峯山出土共蓋経筒）を揚し上げますと譲り受けしを今日のお盆に脇床に備へていた。

翁は何と思はれたが、その経筒を見るなり、お主人歸りに此経筒を持ち帰るから箱を出してくださいとの意外な言葉に、予ハこれは先日貴所より贈られし物ゆへお感懐いと思ふ、お返しは出来ませんと

答へしに翁ハトドメない、これはお貸した物、今日売物に出れば何万円にも買へる上等品御兎談も甚しいとケンモほろろの言葉。予ハ其不都合をなじらんとしたが、顔赤らめて送我物にして何の業や

あらんと、一時は憤激したが、直二氣を転更し、お用が終つたら、家内の獲物蕎粉で二服経筒別れに差上ますと蕎麦かきを菓子に茶碗空中で一同に振舞いお別れた。暴君なる哉。

○破れ経筒再来記

廿年七月廿日

P 528

昨十九日ハ 夜間にかけて千葉縣白浜南端に対し敵機動部隊により、猛烈な艦砲射撃を受けた。 敵ハ正本土上陸を自守す様相を呈した。

難行ハ、先回よりも困難をなめた。京子とハ渋谷駅で別れ、不在を承知の時刻十時に畠山家へ着く。ゴム足袋姿の百姓祖爺其まの自分ハ数ヶ所廻る予定から、玄関にて見舞挨拶で引き下る積り。を奥さんが飛んで出られ、良い折に来られた、主人も幸い休日之れから話を初める処、ナンデモお上りと無利やり引き揚げられ座敷に通ると、お主人もこの危機をよく来られた、浦田川崎の工場も焼けた（無利やり）

これも運命他の多くの羅災もある事だ、今日ハ其ウツを慰ん為、去る廿五日原宿で老天人を亡われた。このお老人は木下さんと言はれる話の友人と紹介されしお老人との話であった。

考へたハ話が始めると予定の用件ハ不能となる。ここでお暇せんとしたが、葉山から見事な魚が来ている。一番聞いから食事をすましてと引留られ、トウトウ腰をすえる事となった。

話ハ頼政 シテ畠山翁 畠山さんハ宝生流斯界に著名な程素人離れの名人、源三位頼政が高階の宮。ワキ木下翁 を擁し平家の暴政に反抗し旗揚せし甲斐なく、不幸宇治川の二戦に敗北、平

等院扇の間にて自刃した悲劇の一段である、話の素養なき自分にも、この悲劇を表現せる名文。句にいつとなく聞入り最後迄敬聴した。

話の終ると同時に廊下より奥さんが、サ一呼びよせましたよと言いながら這られた。誰れを呼れたかと思ひしは意外にも中村氏であった。予ハ初めこれから中村君の戦況を見舞いたい事を話したが、主人ハ今頃訪ねても中村ハ宅にハ

いないよと言れた事から、予の来訪を知らせ呼よせられた事と思ふ。こう言ふお夫婦の厚意で中村氏にも会い被害の見舞を述べた。中村家も焼失ハ母家丈倉庫及離茶室ハ無難で、今ハ茶席住いのよし、

同じ南平台近でも田中翁ハ無難とハ幸運の人である。猶縣君の三軒アトリエは焼失したと、君ハ長野松本に疎開中である。中村君の話でハ横浜三溪園原家桃山遺構も爆撃で大破したとハ惜き事なる哉。

話ハ、又毛御殿と称する大広間で行はれた丈、旧横山家の能舞台、一段の聴物であった。猶高島屋老番頭君来

五人ハ、奥さんのお 平目 の刺身、雲丹にてお酒 鱈の薫製と 近頃珍しき馳走を頂戴する内、社の専務、即ち主翁愛婿 給仕にて 枝豆、薯蕷が出る 酒井氏が出張先からの帰途立よられ共に会食し無遠慮二

美味を満腹した。食後奥さんのお手前にて中村氏と共に淡茶を頂きしのみか、蕎麦粉外数々の土産まで頂

き、御主人ハ中村氏と藤原家へ予ハ酒井氏と共に、五反田駅二、此途中吉屋出住留主給ヲ余翁の件につき酒井さんの諒解を求め善所するとの事にて別れた。六時過ぎ山荘帰庵した

○式守蝸牛老翁を浦和郊外に慰問 六月廿九日

江戸千家 の長老都下一人者と衆人の許す式守蝸牛宗匠も、既に八十路の老軀に昨生老衰病状の体を見

P 524



予も亦同行す。藤沢君と三人連れ、浦和行きにハ志木駅前からバスの弁がある。然し昨今ハ台数減で難行ハ覚悟である。浦和市行は初めて、途中治道は何の興味なき田舎や畑道のみ、蝸牛翁の仮寓ハ

北浦和裏通りイタツテ粗末な住居であった。突然の訪問として翁は病床に起き非常に喜れた。部屋も二間程で縁側に腰掛て見舞う程であった。宗匠の話でハ初め大森に引移ったが、危険であるからとて、少しの

知合をたより、ここに移るよふになりましたが、少し斗りの荷物運搬で困り抜きしを、服部正次さんの配慮で運送して頂き合しました。処が途中お覽の通り、この浦和も爆撃を喰いまして被害を受けまし

たが、これも不安であるが、この膝でハ運命を天にまかせ外ありませんと、老の病軀をかこたれている。不自由なこの生活にも流石老宗匠杖頭にハ素焼手附湯沸仕込小棚が置かれてある。半身不随の疲軀を 床上二

起坐、諄々と語られた。愛嬢ハ早速淡茶を点られ、老翁ハ香を薫しられる。茶道ト香道の大家のたしなみも懐しい、この仕込について翁ハ面白い挿話をされた。自分が青年時代（九代目團州）に連れられ柳橋の船宿から約二連れられた、

其折舟に持込れた、火鉢兼湯沸がこんな風であったのを記憶して、名優團州の好により指物師清兵衛なる者に命じ新調した物とのこと、流石一代の名優、船宿の釣舟火鉢よりヒントを得、数奇に適ふ好と敬服した。

其折感じたのハ服部さんが野水庵広間で用られた、桐仕込欄も之れより出でたる考案と察しられた。この話の内蝸牛翁の容艶姿を見ている内、自分は團十郎の楽屋裏に於る團州お見るよふな幻想が浮んだ。竹皮

包握り飯を開き、翁七も耳翁ハ進らる。此間三十を四ツ五ツ過ぎられしかの肥満の娘が、姥桜の押印あるカワラ皿に葛餅を進られた。流石茶家の家庭手造美味しく頂き、耳庵翁携帯の三景茶碗銘蝸牛、茶ハ備前、茶杓

宗旦、菓子手製味噌松風にて、蝸牛翁に振舞れ、続いて一同服合した。耳翁のこの厚意に老宗匠も殊の外喜れ、この上の静養と、茶道香の道の為再起を祈り辞去ハ六時疲れて帰る。

○疎開地初の手蘭盆云

P 525

肌寒き 初春三月未戦禍をさけて以来、いつしか初夏を向えた。四月ともなれば花にあこがれ野に山に花見の人々が、冬籠りの娘を味ふべきに、平和の乱れた永い人間の欲望は続き、其結果ハ、東

洋に歴史を誇る我日本の、祖先が築き揚げし多くの文化に資財を破壊せられ、住に家なく、食二 餓え、尊き人命ハ血河の如く異境の土に海洋に流され此身の別離日に相次く世態は、人心狂

乱のみ。独り自然ハ春夏秋冬二永遠の姿あるのみ。我庭前畑のそばに高く聳ゆる吉野桜の巨木は数百年を経て地上より三本となり、山上耳庵席

周辺を囲む老松林に対する雫木の柱に錦を飾る盛花の折にも、花見人々とてなく、独り草履の縁側に破碗を抱へては眺め、鎌を手にして畑中より頭上に散る花吹雪に、海洋上に散り

行く若人の夢を憶ふ感懐のみ、新緑の好季も山荘主耳翁と共に茶味を啜り、空の驪靑に、その日其折つふえ行く多くの被害を愁いて過ぎた。

五月一日 払曉五時と云ふに春草慮出発志木六時二番に乗車上京、広尾の要件ハ後に早朝

と進られ居間に通ると、軍服姿の經理中佐に令息不器氏川崎工場が去る十五日夜の空襲ニ焼失で来合られ其の災害を慰問する内食事の用意が出来たと進られしが朝食後と辞退せるも埼玉からの

遠来と蒸しパン吸物、竹の子煮物などの馳走を受け、奥さんのお手前で淡茶数服頂戴した

廿四日ハ兼面話して置いた藤原運輸相七十の賀が遅れ漸く廿四日急に催す事になり暁山お夫婦

田中親美翁中村氏と予の五名であったとの事を話された。

近來抹茶も不自由ならん神田榎屋迄ハ途中不安幸い持合ありと三十匁一罐の外加賀名物クルミの

砂糖漬一箱を主人自ら用意せられ寄付せられしは仕合であった。食後般若尼庭園を主人の案内で一巡した。日々の空襲下にも庭内到着の処清掃せられている。比沙門庵水屋にハ浅草にて焼出し宗味老が

避難していた。十時近くお主人令息の出社され電車迄送られお別して広尾へ

広尾の留主宅も門前永島洋品店主に留主居として貸与する事に決し一ト安堵した。移動手続も

今日終り今日より埼玉県人となつた訳 東京より帰宅ハ六時半。

○春草慮の日常

空爆の 禍中をさけて以来ハなす事とてなく、日常の食糧にも事かまさま耳翁の諒解にて庭前桑畑を耕し蔬菜畑に改造し附近の部落にこの頃不思議な程正直な老農翁さん命

に教り甘藷や馬鈴薯造りを初め、多少なり補給のタシとお百姓の弟子入り、新耕の畑とて肥料もない瘦畑、堆肥の用意と朝から日没までの労働、草慮附近の無限に広い朝夕の掃除、これが

日課の生活である。耳翁からは上の茶室耳庵席も、高射部隊長に貸与され、自家の空爆

で一家三人母屋に疎開中の、田中仙樵門下藤沢寂仙君相手に、この柳瀬山荘も不安と思はれテカ

美術品や貴重品の疎開準備に道具品の整理が之又翁の日課、何でも奥多摩山谿

が目的地らしく、然し茶丈の愛喫ハ日々喫茶境と云ふ有様で予にも其都度招かれている。

本来無一物にひとしい芸術家の我生活、其の乏しき内より、長男次男の軍務奉公、其家族の援助などと共に堵食自然衛生生活に過す外ハなく、幸ひ野良仕事と空気のよさに粗食を加え健康

は永年の固疾胃腸も消し飛びイットハなく病を忘れた仕合せ。

蔬菜畑と云ふても三畝あまり手入の余暇ハ松永家に勤勞奉仕などで貴重な、其日其日を過す有

様である 五月廿六日 東京大爆撃の夜都内の空は星をあざむく業火の煙に包まれ火の海と化行く様を、この山上から直視した我らは、如何に我軍死を賭し敵闘するも

怖るべき新兵機を持つ米英軍の蹂躪を妨ぐ期望がたえしを直感した。この愛慮の中にも 藤沢君から焼残り品で耳翁お夫婦を主賓に、下の閑室にてお茶を指上

るから相伴せよと案内を受けた

それは六月三日第一師団竹橋皇居新兵勤務中の次男安吾を兵衛に訪ねて帰った翌四日の午后

道具組ハ、一畳腰掛三戸の 時代、閑室常什 この側に尺八花入、が置かれてある 置き合せハ 変ツタ

板の間に 置炉 花ハ山アジサイ 具合

鉄瓶 茶入ハ 黒棗 水指 朝鮮 写仙樵作 茶約 茶碗 無地 菓子ハ お手製の 已上にて

宗守花押 唐津 又同じ 刷毛 葛饅頭

濃茶を耳翁正客さんのお話にて頂く、藤沢氏ハ三月某日戦禍にかかれて以来この山荘住い後初めてのお催し耳翁御夫婦に謝恩の意味と思はれ我々其相伴の仕合であった。

花入ハ耳翁お寄贈、茶入茶杓ハ仙樵匠より戦禍見舞の送り物と茶碗ハ予の寄贈である宗匠のお手前こそ、こん後の娘を期待して厚意を謝す

この頃、山荘にハ松永家縁故の疎開家族は我らの外四大家族であるが、我春草慮ハ、松永家母家を至る事五六丁離れし東山突端丈閑寂の日常を得た。

疎開家族の内名古屋高橋正彦氏令姉多可子刀自(故田中徳次郎氏末子)一家あり、この多可子刀自

にハ生家の伝統茶茶の道にも深い趣味家丈日々交遊を得ることは仕合

東京、其後の情況ハ去月廿五六両日の大空襲に引続き、廿七日蒲田川崎に渉る工業地帯の大爆撃は多くの産業工場を破壊せられた、敵機の関東襲来なき日ハ中京関西西方面或ハ東北地区と寧

日なき決戦情態となつた。従つて東京の不安ハ焦眉の急をつげた。老婆も疎開以來東京にハ一度も出ずに過したが、世田ヶ谷実家に同居せる次男嫁母子も在京の不安で愈々二月先より疎開

中の三女昌子即ち神奈川縣津久井深谷中野町に疎開する事になり、其の別れの為、十七日上京を断行し十八日夕京子母子同行帰山した。不安の交通を排し京子の柳瀬に来るハ事態の急迫ハ

互の不慮の出来事を保し難い為、我らにも永別の意味であった。孫一 郎もすこやかに成長し可愛

くなつた。無心の幼児にも安住の地を求め別離の悲劇を演しなくてはならぬ

彼らが一泊したので老人住の春草慮の一夜も明く過した。翌十八日ハ徴取工として山形縣下工場勤務の

門人豊が突然来りしハ意外にて彼れの近情を聞くと、彼の留主宅中野大和町一般戦火災に遭い

が自宅軒先迄にハ火災をまぬがれた、其為臨休を得て帰京したので、市内一部を巡視しますと

千駄谷、一圓八團家を初め、茂、美代さんなど全焼し、渋谷方面丈祥雲寺より広尾の一部を残し

赤十字の 一劃を残し服部氏も、南平台方面でハ中村氏も其難にかかっていると、見渡限りの焼野原と化し

め戦禍見舞 赤十字 話、この話ハ去る廿九日危険を冒し上京の際見聞ハしたが、こんな事で京子母子に今一泊を進

めた戦禍見舞 出京を決定した 崑山家に対し心斗りの野菜を持つて用意し京子母子を連れ早朝出京

途に乗車券を求めも駅長室に飛込み特別弁儀を得ると云ふ

この間奥さんの病床を見舞ったが、奥さんハ今日慶応西野院長の来診を乞うている、この寒い北側でハ困るから仰木さんから主人に進め、下の書齋に移るよ頼みますとの事であったので、診察の都合で入院を進めて置いた。

席上戦局の見通しにつき、谷川氏ハ我軍ハ勝目ハない、当局が好期をねらって停戦すればよいが、此ままアケ迄闘えバ本土も悲惨の破滅になると考る、然し現在こんな説でも行へば軍部ハ首に縄を掛ける

困った事態だとの話、この説又我らとても同感である。

○空襲時の韻事

三月三日

P 518

めまぐるしき 空襲下にも韻事がある。永くお無沙汰している岡部長景子郎から今在宿かと電話が
あり間もなくお使用で、子爵家伊豆三津浜別邸内に数百年来の老松、同浜特有で

ある漁夫らの魚見松の枯死せる良材にて、記念に製作せる子爵依頼、金林寺形茶人の内一個に
子爵御夫婦に銘と箱書を願ひ預け置きシに銘丈ハお主人早速染筆されしも、奥さんハなかなかお謙遜
で其まお預けして置いた、其茶人が届られ、中に奥さんからのお手紙に永くお預りしたとお詫の上
時柄ゆへ、ツタナク毛筆を探りましたからお納め願ひたいとあつた。

表書

真以、東潮、佐松、作之、子爵の書

（しごとわの満なさをゆらにうすくく明々りくをちのむらさきのやま悦び）

真にみやびの筆蹟
にて認あり長く家

宝となる喜びにたえない。

夜ハ毎夜の燈火管制として、日没前に食事をとる今の情態、数日前附近三光町を襲いし焼

夷弾による被害現状を、畠山お夫婦と実見し其惨害を見た我らにハ、何時我身に及ばかも知
れぬ今日、落着のなき胸一ツパイ、何事も昼間丈の生活、

処が、七時過ぎ突然台所から訪ふ人あり、それは服部山楓氏である。私ハお庭の残雪を見る為、お
処がとつれた、ここで結構とあつたが締切つた玄関に招入れたが、そこも疎開残部の荷物散乱であ
る。山楓氏は風流にもホツケツトより赤、絵の振出し、を取出し先づ召上れと指出された。意外の感に打
たれ、振出を拝見すると、なかなか珍品

角砂糖 が納められてある。扱こうなると自分にも番茶と言ふ訳に行かず、有り合粗末な茶碗
を持出し瓶掛にお湯にて一碗点でると、腰掛から靴を脱ぎ上られる。

茶は幸ひ一罐封じのままあり、空家同然のこの玄関にて提供した。処が又も左のホツケツトより
唐物薄茶器が取り出された。（朱、置口及上土部高台黒漆、時代もあり朱と黒の配合手法

も手造り風、稚拙に見ゆるが名器である。高台裏の操り方も、日本人にハ出来ない芸で
ある。茶運用意で雪見とは言へ、この老人に対し一服喫して空襲下の苦難を慰めんお



心と深く感銘し、次男公用にて甲州出張土産の干柿を進め互に一時の幽玄味にしたる
軍事産業に多忙の寸閑、雪消の夜のぬかみを感じとされず茶友に対する友情の濃
さ、其心に餘裕ハ流石に御先代服部時計店の後嗣者である。

鉄兜と云ふ殺伐姿に奇烈の日を過す半面、この雅客のおとつれ永遠忘れたい事である
このよふな玄関先の韻事を思へば、柳瀬逃避後に望まない娘と、こん後の生活に
悲哀を感じるにハいられない

○柳瀬山荘春草盧疎開

廿年三月廿六日

P 519

都内 在住を許さぬ事態となり三月廿六日疎開残物ヲ馬力一台と我ら老夫婦ハ両手二肩に人の欲程限り
ない者、運命を自然のままに諦られぬ見苦しき、車中の難行苦難を柳瀬に着い頃ハ綿のよふにつかれて

いた。三月末ながら寒い夜であつた。松永家の厚意で、其夜ハ湯タンホ迄入れ一夜を明した。
これからは食糧ハ移動手続き手間どり、東京にて配給ヲ受けルタケ不足に悩んだが空襲丈ハ安心と
思いしに一周後の四月二日の夜突如大編隊ハ伊豆半島より侵入所沢地上より柳瀬上空に対し地軸も
裂る大爆撃を行い時ハ午前一時半、高台の春草盧ハ家屋震動する猛烈さ、安心した道具恐怖ハ
肌粟を生ずる有様。柳瀬川堤防向大和田裏畑中に設置されたる、高射隊附近にハ八九の巨弾投下
に土煙は空中に捲き上る槍烈さに老婆ならぬ共振り上つた。

坂ノ下部落より志木に至る約一里の間に二百有余弾と云ふ凄さに、老婆は恐怖の餘り東京復帰を迫る
程であつた。敵機通過後にも爆発の音響ハ、時限爆弾であつた事を後に知つた。夜明を待つて被害

情況を見ると坂ノ下部隊農家数軒焼失爆破、高射部隊建設物の木端微塵、時限弾ハ四五日
後迄に不即に続く不安さ。これがあつた後、北多摩北端大和田境清瀬部落にも焼夷弾により一部落全
焼の惨害を与へた。こんな有様で山主耳翁の縁先で喫茶位いの外、独茶境にふける外なく（趣嗜好

抹茶丈ハ食糧難でも何とか続けていた）、従つて四月中ハ茶事など皆無に過した。元より疎開地として賞悟
である処が廿四日疎開後初めて、老婆同道東京行きを思いたつた。この出先の折畠山さんから電話アリ
この畠山家より松永家を通して電話にハ打電して置いたが至急面談の必用あり早朝出京せら

れたしとの事電話に出られたは、耳翁であつたと女中の知せに、幸ひ上京仕度中とて用件の何たるは別
に仕度する間もなく出掛ると、突如又非常警報続いて敵機の大編隊侵入の警報乱打に出足をハバマル
た耳翁からもお家内同行な途途交通不能の不安もあるから出発お見合あるべしと勧告されて来た。
警戒解除ハ九時少し后予ハ独り出京断行と思ひしに之又耳翁より切なる中止勧告にて中止した。

迹にて用件の判明によれば藤原暁雲運輸相主客の茶の催につき耳翁に内密の案内であつた。
畠山家に対する去る廿四日（不参なるも）茶の案内謝礼方上京

○中村家雑炊茶 空襲に飛出す 一月九日 正午

p 515

昨日 朝崎玉よりの荷馬車二台 顔見知の夫二人が添い陳開荷物取りの為来り苦勞を続けた荷物送りでホット一息ついた。然しまだまだ残積し道具がある為今日も其の整理中、中村氏よりお目に掛たい珍品が来ている、雑炊を暖ながらお覧へ如何の事、日々の空襲に疎開のことのみ頭を悩す折とて早速お受し十一時出掛。都電ハコソ、恵比須迄徒歩したが、国電又三十分も来ない。漸く南平台に着くと懸老が炬燵にヒゲツテいる。床を見ると雪舟とある花鳥の幅、紙中ハ黒く屏風直しに見え中村家にも、こんな幅があるかと思はれ焼けてもよいと床番のよふである。書院にハ縣君新作写経 台紙の巻 が四五巻飾つてある。縣君の作品に鍍金軸にも電メッキと云ふ時局の影がある

珍品とはこれなるかと少々失望中、雑炊の用意も出来大鍋が卓上に運ばれ、ウイスキーの一杯ハ寒い折とて雑炊と共においしく頂く。この芳香にふけりつつ、夫人の進られる水飴を菓子で

淡茶の 点出し、茶碗ハ新作らしく思ふ内突如聞ゆる警報サイレン。然も非常警報に一同緊張茶碗拝見処か速座に退散 鐘ヶ崎迄来ると通路も非常警戒、敵機五機七機と

編隊侵入して来た。防護団ハ防空壕被難をサケンでいる。之ハ大変と恵比須から裏道伝い帰宅すると老妻はチジミ上つている仕末。正午頃からの快晴の空、敵機ハ上空高く新宿方面より小石川上空に波状投擲 我友軍機ハ敵の編隊に突入 空中戦ハ続き敵の一機ハ小石川上空にて隊を放れ

火を吹いて急降下するのが見えた。敵ハ編隊を乱し品川方面に退去したのは一時過ぎ

以上の如き敵機猛威、は危機迫り、従つて日々の食糧も刻々逼迫し粥食迄も不能となり配給品も一人一日菜葉半切主食一人老人にハ一合八勺それも遅配欠配と迄になった。

○春草盧疎開整理の茶 一月十日

p 516

昨日 関東々海地区に六十機と云ふ大編隊敵機の侵入、内甘機が帝都上空を襲った。こう言ふ時態で東京在住ハ刻々の不安となり、八日崎玉送りの疎開荷物の整理と松永家に謝

詞をかね門人同行柳瀬荘を訪ふ。寒入り後の田舎道寒さと霜にふるえながら、柳瀬川兩岸も凍結している。山荘も来客はなくケートル姿のまま縁先にて謝礼を述べ、耳翁ハ蒸し置き

のお蔭を温め番茶を進めらる。八日の荷物到着が夕暮れの為全部が春草盧二打込だまま故お出を幸いご覧を願たいとて早速整理に着手した。

冬の野を眺めながら携帯の握飯を縁側に腰かけ食事を始めると耳庵翁が来られ今粥の用意が出来ここへ持出し私も共にたべるからと縁先に三ツ又を組み鍋を釣し粗朶を焼き初られた。茶色の 腰衣に袖なしを羽織る翁の姿ハ二祖や三祖の道士とも見える。芋入粥に大根煮と云ふ食事とてさえ人の心と時に取り山海珍味にまさるうまさであった

疎開先に 悩む折耳翁の好意で此落着先き得たのみか、翁の心人に感謝する内、お茶の用意が出来ましたとお孫さんの迎いに母家に出掛ると、翁自ら麦粉をかき菓子二

茶人 独楽の 茶碗ハ、道楽あたりの赤染にて濃茶を練られ夫人と共に拝喫した 中次 中次も時代あり本格的茶人、茶碗赤染ハ形と言ひ頃合と云い、衆

の外窯ながら、自分にハ好きな茶碗である。茶杓ハ予の作であった。戦争に追ら賃し住を捨て身の安住さえ覚束ない際、こうして麦粉を菓子に茶を喫する

時程印象深く興味と共に茶人の友情感銘深きハない。この点ハ耳翁こそであれ、他の一流茶家二は求められぬことである。帰京の難儀をおそれ三時と云ふに称す。

大和田郊外 水川の杜の田の面にハ白鷺の群悠々と好餌をあさるは長閑なるに、彼ら又空の爆音に何となく不安さを見る

○雪の柳瀬荘を訪ふ 二月三日

p 517

昨払暁の雪ハ 大寒の寒さで解けやらす残雪街をうすむ。中村氏より縣君と共に雪の柳瀬行を連れられ、ここ四五日の天候に空の悪魔も侵入せぬので同行す。山荘につくと縁先に手拭

の用意がある。茶客でもあるかと家人に聞けば、学者連中五人茶道研究の催し。奥さんハ一時四

十度からの発熱病床中と、悪い折来た物と中村氏と顔見合せツツヤク。喜びハ主人早速お上りとして

囲炉裏の間に通る、大寒中に鉄風炉二 真ナリ 客振れを見ると堀口捨己老以外ハ未知の人々

向が 和布小羊の 白菜煮込 土鍋 浜納豆二 香物麦飯 お酒ハ杯一パイの戦時献立

鉄風炉 と云い、水指から茶碗迄黒一色、然も何れも筒斗かり、感覚の薄い二とナドトツチンカンこの取合せハ

巻を見てホットした。 茶法式 談、之れに共鳴する学者連の対話に三時が過ぎ、予ハ中村氏をウナガシ、無断

さんの給仕で炬燵上に運ばれた。向ハ 薫 雲丹 お椀ハウドン等にてお酒 焼物ハ藤原運輸相から

豚の煮込 シャコ の汁 など数々の美味佳肴を頂戴す内芳明老参着食事を共に、古画修理二

梁楷 修理について老の抱負を聞きながら、今一幅同じ雲州家田蔵因陀羅筆布袋の図

水菓子の後葛餅の温いのが小丸椀に進められたので、奥さんにお淡を所望し予又一服

頂戴した。最後に主人ハ手元の巻貝に何にか認められたそれは三本にて籤引用らしかった。

古代緋縮緬包數個を盛られて持出さる。当り符合ハ中村君に金更紗染牙席の根付、赤銅

蕨入れと云ふ当り籤は意外の餘興で歳末に対するお主人の厚意と深く感謝し辞去

せんと思いに、これより風邪引籠り中の藤原運輸相を見舞たいから同行せんとに進む中村君も同

○柳瀬山莊年賀茶

昭和廿年一月五日

p 513

敵機 来襲ハ北九州ハ勿論中部地方、北は北海道に渉る全本土に對循環に襲撃し来り最

なるは其の輸送の方法、現在既に鉄道輸送ハ不能となり、たのむはトラック、このトラックさえ一台の

車も得らぬ有様、只牛車或ハ馬車輸送丈であるが、それさへ途中の危険に危する者なく、今街

言へは遠隔の片田舎、悲惨なこの実情に我ら又其の苦難に遭遇している、荷物ハ出来たが、

かね今日始のヲカネ出掛タ 去る廿九日下谷黒門町より浅草雷門にかけての空爆ハ多大の家

池袋志木間は平常三十分余の車上時間なのに、今は途中運転中止で一時間以上を要する難行となつた。

美術研究会の一行と知り互二言葉交す其内に根津藤太郎氏(3)もいられた。柳瀬に着と程なく

木村老も年賀に来ると云ふ大勢、美術研究会を知らぬ予ハ、賀詞と要件丈で引き下る積りで

あつたが、折角来られたの一行と辱蘇を上げたいと椅子で頂く。

ここに三代家光筆鶏の幅も新春をつける意味、汲出の用意さへある。主人ハ是非一行とお茶を揚

たいと引留られ間なく本格的の迎い附で奥の広間に通る木枯の庭にも奈良朝の石椀当りには古刹

の気分さへ漲っている。研究会でもあり根津氏を先頭と思いに、茶の道に浅とて山口君が主客格

にて入席 床に 定家卿 能面白翁が 書院にハ 神代三方鈴の 釜ハ 菊地紋 炬縁 嵯峨

已上正月意味の飾附の内 師範格でも順序 不動も面白く 向 膽 染附 汁小宇 雑煮

炭手前、研究生にハ 終つて懐石迄 よせ物 地みそ

焼物 獅切身 器織部等にて 酒器青磁獅子フタ 香物 白菜 唐津片口に 菓子ハ千柿切りて

食事が 終り福引の餘興があつた。景品にハ竹の花入、茶碗茶入杯など雑多でカナリお粗末斗り

箱茶人が 然し翁とてハ目珍しきお奮発にて最後の残り籤に予二鈍翁好萬歳茶とある共

再入席すると床二 紺紙 敵国降伏 元寇の役元の大軍箱崎に襲来の折畏も亀山上皇

箱崎八幡宮に御祈願の為、敵国降伏の四文字を御親筆奉納遊れし勲額を、今度の大

垂戦に對し複写せられた物との事にて詢に時にとり申分なきお幅である。

これ大なら至極結構なる二 前に 山科宗甫作竹の花入、 が挿れしは 然も寂竹にてハ

たどへ模写なり共御宸筆 花太郎座外一種 不釣合至極である。

書院に 巻物 飾られしも誰一人披見者 水指 眞の 茶入 藤重作 茶杓 不味公

朱の軸盆二 なく主人の失望 手指 大棗利休在判 茶杓 作

茶碗、古高麗 無刷毛 魯堂旧蔵銘村雲、 已上 安太郎君藤寂仙君も共に翁自ら

水洗形か 滲アリ お手前を示され拝服した

私は今日の紅葉採りに如斯お茶に出合し事の幸福を謝し、夕暮近くお暇した。翁ハ氷川の社頭まで見送れしも恐縮した。志木に来ると産業戦士乗車時間で制限後迄一時間も待ち九時帰宅

○澤庵和尚三百年忌茶團家にて 十二月九日

P 510

数日前より 敵の偵察機ハ東京及京浜地区上に襲い其の来襲ハ主として夜半過ぎより明けにかけてである。昨晩三時亦ケタタマシイ、サイレンの無気味な響きに飛起ると云ふ不安事態となりし上、今日横鎮発表に依ればサイパン島にて我海軍司令十三提督戦死を報す何たる悲愴であるか、之に依つても戦況の悲運は国民一般の覚悟すべき最後の假際と迄追い迫られることとなった。こゝ言ふ折にも

天皇ハ 澤庵和尚に対し、和上三百年忌を期し畏も禪師の高徳を便はれ、普光国師と追諡あらせられた。これを記念に国師の遺蹟及び関係遺物を展示し并て

献茶供養 の催を原宿團男邸で行ふからと、井上候の名に依つたお案内を得ていた。処が最近の敵機来襲におびえた老妻は、月の初より長男嫁の疎開先山北に逃げ出し一人暮らしの

有様なので、不安ながら里方に居る次男の嫁を呼よせ留守を頼み参参することにした。幸ひ達朗が公用外出で親子三人来り安心して出掛く。

十一時 過原宿駅より東郷神社裏に出ると数日前の盲爆で数ヶ所の被害家屋がある。前夜の厚霜に路上ハ霜で凍つている。團家に着くと、齋藤氏の案内にて順路山上待合に導かれた。

土間にハ 炭火に暖の用意あり、間もなく庭内中門外なる御堂に詣す 御堂内正面本尊阿彌陀如来尊像側に今日の祭師普光国師の遺蹟が安置せられ

鉄銀象眼入猿ツマミ、香炉が供らる 香合、鎌倉刻 大香合にて香烟は直に満ちている、左側にハ共蓋南蛮鉄 一輪牡丹 澤庵和尚外二人和尚連名になる、時の

幕府中老士井大炊助宛 御堂側十手院待合側と 遠州宛澤庵和尚の消息文が掛られ 和尚関係文献を備へ大徳寺公文書の幅が

大炉に 文字入広口 朝日の汲出 参会者ハ会長井上候田中翁の外七八人 平金 朝鮮唐津振出にてお湯を頂く の先入者あり止むなく広間に移る



床二 伝秋ハ蓮片葉上 前二 硝子燈二足 存星卓几上二 琵琶床二徳川期 蓋上二銀時絵波二 観世音の絵 香炉 時絵ノ硯箱 立籠象嵌ト云ふ手法

殊に立籠側ハ籠潤と同じ織り金嵌入ハ目珍しくもある。猶フ手糊に四糸家流下絵着色下絵に松花堂筆百人一首の巻が堆黒軸盆に飾られアリ。台紙の華美ハ驚ク斗りなるも、巻物としてハ紙中の紙質の色つき過ぎるは、台紙の美から見ても粗末に取扱たともおぼえず、予ハ疑問が浮んだ。扱茶席前者の退席ハ後席への思いやらない連中とて、待の間も留守が気懸りにて

露地 に出ると漸く松永井上田中翁等の名大家に出合ひ、挨拶もそこそこ千手院に出席した。床二ハ三代家光筆枯木二本木の幅 花ハ古銅蟬耳二白の佗介構

水指、南蛮 茶人、唐物青貝入 纏靡れ 内朱



茶杓、遠州作、動閑への送り筒 この杓ハドウ見ても遠州作と思へないが公が殊更動閑向に作りしか

茶碗ハ 團主人の説でハ 予ハ 安南と断言 猶この手茶碗ハ 釜ハ 阿弥陀堂 古作 玉子手と云はれるが する物 益田家にあると

縁ハ 時代 已上にて伊能氏お手前にて正客及予丈に濃茶でもお上げしたいが、時節柄淡茶でと 自らのお手前にて淡茶を振舞れた。他は点出であった。

床の 家光の絵は將軍と澤庵関係上この上なき組合せである。 已上不安の寸関を得この意義ある普光国師御遺蹟に参列せるハ仕合であり、空襲

時急ぎ帰宅した。高徳澤庵 禅坊道徳ハ禪に茶に偉大な功徳を追憶され追諡を斯しこの会を催されしは、意義深く感じられた。

○畠山家名画観賞の会

十二月十七日

P 512

師走 の湖風肌をさすこの日正午前突然畠山家より電話あり中村好古主も来ている、都合でお遊びの案内に、幸ひ山北から老妻も帰宅していたのでお受して出掛く。

途上の街は空家にも均し寂れよふ営業も統制下物資不足で転廃業、或ハ空襲 来て家族ハ疎開、見るから敗戦困らしき悲惨な情景

畠山家に 着くと部屋にハ三尺四方の大炬燵に羽二重の蒲団に中村氏はモグリ込んでいる。壁面にハ松平伯家旧蔵梁楷筆猪頭道士、及び蝦子の双幅が掛られている。

表装中二重曼大牡丹 一風白地印金 と云ふ豪華な仕立、この双幅の内猪頭の図丈はお茶事 事で拝見せる事がある。お主人の話でハ此の幅は松平家上下薄茶地花宛印金

に於て以前表装仕立替の為糊が堅い為と紙中の破損甚しく、幸い中村君も来ラレタので君と共に相談シ山本芳明君を招き、大手術を行いたいがとお相談に賛成し山本君の来訪を求た。

蝦子 の方を詳細に拝見すると、補修悪しく、其上入墨多く、幸い大切な面相右手にさざけし 蝦など無事にて、詢に名筆である。元宋唐画名手ならでは描けぬ筆致、道

釋人物画の妙手の筆蹟、此幅について世評ハ色々あるが、梁楷であるや否やハ外問題にて兎も 名画である。お主人の話にハ元この幅ハ大徳寺什宝なりして不味公より愛蔵高麗茶碗即ち

大名 物喜左衛門 を寄進 せられた。これに対する答礼として贈られしがこの梁楷である。 井戸 そんな来歴を聞く内にも、山本老ハ選着 食事の用意が出来たと奥

前田老唯一のバトロソ森岡平右衛門氏夫人であった 床に大徳寺伝衣 出因通人圓通云々の幅階上席に移ると 和尙ノ一行

主人出座の挨拶に何のお構も出来ぬがホンのお茶一服丈との事にて向 鯛の小切ニ 甘酢 林橋キサミ

刺身 碗豆腐 シメジ茸 強魚小芋 焼物 豚の角煮 香物 菓子ハ栗入 云ふ 謙遜にも似ぬ 魚ノ切身 牛蒡 玉葱煮込 お秋と お馳走に恐縮

した。前田老は食器など新物丈はあるがこの食糧難にあえぐ折にも所謂下町気分での奮発には仕合でもあり現在大家にも見られぬ振舞である。

食事が終りて娘さんのお手前で水指信楽 茶入仁清と 茶杓初代不白作 茶碗無地刷毛目 矢筈 云れる 銘大黒 平予の贈り碗

にて濃茶が進られ、黒粟 茶碗了入作 にお手前を頂戴した、老も男子ハ二人迄軍務二 次いて淡茶ハ 茶入原叟花押 黒粟 に残る愛嬢の茶趣味に老いヲ養れるハ仕合、然も

知人顧客の方々を招き時局ノ鬱を晴される幸福を祝し歓談後辞去した。帰途に際し 鯛一尾を贈られハ重ね重ねの厚意であった。自庭軒端の柿少々持参して

○武蔵野の秋色

十一月十九日

p 508

秋は 酣、箱根日光寺の紅葉探りなど望まない燃烈極る死闘の最中、然も戦況は我方に不利をあやぶ む折ナガラ、耳翁とも約した為この晴天を幸い武蔵野秋色にも親まんと交通難を恐れながら出掛く。

では既に志木迄の通し切符ハ売ってくれず池袋駅では寄居、川越、志木行主要駅切符ハ発売中止の掲 示と云ふ非常手段を採る乗車制限、当惑したが長蛇の列に加里兎も角窓口まで一時間を要し

病人見舞の急行と窓口に訴へ、漸く切符を得てホットして乗車した。例により買出部隊が大半以上 志木駅からはいつもの通り徒歩、巻ケートルの軽装丈肩に背おう土産の柿翁の所望で十個餘りと

孫さんへのパン丈の身軽さに、黄葉紅葉の雑木の杜や麦の芽出しに、思の外暖き秋の陽さしをあび 野趣を満喫しながら行く程にうしろより一台の更制車が行き過る。フト車上の客を見ると越野である

太な包を前に抱えて、彼れは曰ク今朝耳翁から電話が掛り、仰木老が来遊の予定であるから、直ニ 箱風呂を届よとの事で持参との事、この箱風呂ハ元根津青山翁所持にて、翁他界後同邸にて雑品整

理売立品中の物が越野の手に移りしを耳翁ニ余が推挙した時代様式面白き箱風呂である。 この車夫が顔見知り丈、これからこの車にお乗りなさい、一人も二人も挽くのは同じことと進られ、野趣を味ふ自分

ではキウ屈な車上とは辞退したが、タツテと進られ車上の人となって山荘着、園内紅葉酣の好見頃、 翁ハ我らの参拜で大満足、殊に箱風呂の良さを喜れしが、何となく家中の物淋しさ、夫人ハ元より千代

子若夫人の姿も見えぬ。外出でもあるかと主人に聞くと、実ハ数日來の客攻で二人共疲が出て寝込 だとの事であった。扱この箱風呂を用ゆるにハドコが尤も適当ならんとの間に、予ハ速座に東山閑室こそ

最も良くと答へに翁も同意でこれから早速使いたいと、越野老に灰こしらへを命せられと云ふ騒ぎ。 処が病床中と聞きし夫人が起きてこられた。主人曰ク彼れは仰木さんの声で病氣ハ癒りましたよと、扱ハ

例により耳翁の癩癩爆発からのフテ寝と察られた。 置風呂用意の出来ル迄と、前日の来客前妙心寺管長大休老師、平林寺管長敬山師らの土産干柿を菓子

に奥さんを交へ濃茶を啜り合ふ。此折澤木黄道師從者阿部君外一人が来り、志木駅行切符不売 の為成増下車、あれから徒歩デヘトヘトにて、ここにて予愛蔵織部耳附振出を希望によりお覽に入れ

ると、之れは結構是非割愛されたと望まれしが、辞退したノ二聞き入れず、止むなく預け置く事にした 間もなくお昼となり、堂ヶ島からの山の芋に麦飯、干物をあぶり、何より馳走の香りに鱈魚頂

戴した。扱閑室の用意も出来たと伴頭役越野の知せに 母家より 数丁離れし場所丈、園内紅葉ハ數百年 主人は先発 予ハ奥さんと共に述より参入す をへし老松大樹の中に点々と錦を

交へ 花紅葉の風情、えも云はれぬ秋光、戦いさへなくはこの山荘の秋色に多く都人もつとほんものと、血 腥き浮世をかこいつつ山の中腹鬱蒼たる大樹林間に如何にも侘びし一畳敷に角切板の間の外土

間ある閑室に入る。この閑室より見降す一面にハ正門前の孟宗林、室の附近にも破竹の叢林があり それを透して柳瀬の堤が西より南に流れ田圃に刈り揚げ矢来欄が無意識ながら芸術的にも見え

さながら絵巻物を繰りひろげたよふ眺められる「麦粉かきた一人二人客があるがお前も来たらどうだ 壁床にハ芭蕉の文にて くるならトンガラシお持ってきて云々の未狂句一首」

「麦めしにやつ留る恋や里の猫」箱風呂鉄瓶 この鉄瓶ハ信長所持と 然し見るから 粗末な作にて 三日角水へ 者志越 京ノ土橋老より来る物 台所用にも均しい

茶入古伊賀 茶杓宗旦作 茶碗柿の蒂 二ツに割し 魯堂旧蔵の柿の蒂によく似た物 茶入水滴 茶杓一閑張り 石州所持 已上にてお濃茶が振舞れた。板の間

に箱風呂の落着も良く、鉄瓶丈ハ難物であった外芭蕉の文に狂歌、茶入から茶杓にハ宗旦の作が 如実に表れ茶碗柿のへたの二ツ割れがこの閑室の佗にトケ込み申分ない唄であった。

茶の 深さハ速観時こそ現るもの、今日の茶こそ真に環境に適した佗茶の真諦にて、計画 には作意がアリ過ぎテハ茶の本旨に反むことままたあり、時と場所今日程上出来なるは稀れ

『雲中庵茶会記』 翻刻稿 10

浦塚省二
後藤 恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、昭和十九年（一九四四）三月三十一日から始まる第九冊の全てと、第十冊の途中、昭和二十一年（一九四六）四月二十三日までの翻刻稿を掲載する。

政斎夫妻は松永耳庵の厚意により、昭和二十年（一九四五）三月、柳瀬荘内の茶室「春草廬」を借りて住み、疎開生活を始めた。このとき柳瀬荘には「松永家縁故の疎開家族は我らの外四家族」が住んでいたという（本稿59頁）。もとより外出がままならない時局にあって政斎が記録する対象は、耳庵をはじめとする柳瀬荘の人々の暮らしであった。同年五月二十五・二十六日の東京大空襲ではこの地も爆撃の恐怖に晒されたようで、その緊迫した状況を伝えている。また終戦の日（八月十五日）における玉音放送拜聴の一部始終や、のちに国へ寄贈することとなる所有財産の保存管理上の苦慮、小田原への転居に向けての準備の様子などを綴っており、終戦前後の柳瀬荘内の様相を伝える貴重な記録となっている。

結局政斎夫妻の柳瀬荘での生活は、昭和二十三年（一九四八）十一月までの三年八ヶ月に及んだ。

（うつら）かしょうじ 元公算財団法人中間市文化振興財団常務理事
（こと）うひさし 福岡市美術館学芸課長

凡例

- ・ 翻刻にあたっては、仰木政斎著・味岡敏雄編の影印本『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）を底本とした。
- ・ 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- ・ 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- ・ 変体仮名は現用字体に改めた。
- ・ 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- ・ 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。

- ・ 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに「ママ」を付すか、註記した。

- ・ 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- ・ 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- ・ 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- ・ 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- ・ 前号までに註記した事項については、註記を省略した。

雲中庵茶会集 第九

（影印本上巻の頁番号）

緒戦の勝利に赤道下まで突進した我軍は、戦備をととのえし米英軍に反激をうけ戦局は不利と追いこまれ我本土に至る処敵の空軍により爆激の惨禍こうもり市民ハ難をさげ疎開する我ら又廿年三月末埼玉柳瀬荘松永耳庵翁の好意により園内春草廬に疎開を断行し同年八月十五日の終戦までも趣味の茶の湯にしたしみし記録を日誌をたどり冊におさめる。

○南爰老市井の茶 昭和十年十月廿一日正午

P 508

市井雑沓 中にもこの戦禍のただなかに一同業者が愛顧の手前で松籟を唄みつつある前田老から「三日前関野聖雲氏らと共に一服上げたいと案内を得たが差障りで辞退したのに今日亦案内を受け正午前 合客は只一人の若く見えるが老夫入下町風の若作り大店のお神さんか京橋中ばし同家へ」サマなくば、梨園界の妻女かと思いに、このお夫人こそ

凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。
- 各論文中の著作物については『 』、団体名については〈 〉、作品名については《 》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で表記した。
日本語論文 執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ
欧米論文 執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと表記した。

福岡市美術館研究紀要
第14号

令和8（2026）年3月13日発行

編集・発行 福岡市美術館
〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
電話：092-714-6051
印刷 株式会社九州カスタム印刷
〒812-0007
福岡市博多区東比恵3-16-15

■ 表紙写真 ■

孔雀花唐草文様更紗、インドネシア、19-20世紀
福岡市美術館蔵（一杉コレクション、28-Hd-61）

Skirt-cloth, design of design of peacock, flower, and arabesque,
Indonesia, 19th-20th century
28-Hd-61, Hitosugi Collection, Fukuoka Art Museum